

及川
藏書

小野 精一 著

三浦梅園書簡集

第一書房

巖眉之山高峰秋雲降坐先生
英偉超群洞覽天地彈極鬼神
條理之說數十萬言闡發幽顯
以覺斯民屢辭聘命抗志守玄
遺像肅然想見其人

梅園先生肖像之贊萬里先生撰

後學 藤田鳴鶴



易立の庵太來賀入門を像肖たし寫の籬東山片津中
(照參頁八五二文本)像肖ためしせ正修てしを

凡 例

- 一、本書は三浦梅園先生の書簡凡そ百九十通、及び先生の長男修齡先生の書簡三十通を収載したものである。
- 一、本書に於ては書簡の用字、假名遣は全く原本の儘に従ふが、但し便宜のために變體假名は普通平假名に改め、返點を附して置いた。
- 一、書簡の謄寫に當つて、誤讀誤寫のないやう、大いに努めたが、萬一の誤謬なきを保し難い。
- 一、本書には書簡の所藏者も明記しておいたが、採集後に變動したところもあらう。
- 一、註や難語に解説を附したのもある、讀者の便に供せん爲めである。

市原玄意宛

一年は瞬息無_レ程得_二拜眉_一可_レ申_二(國東、田中銀二氏藏)_一。 二〇

後藤運平宛

一夕從容慰_二鬱陶_一(後藤敏宏氏藏) 二二
一兩年凶饑世上困迫(同氏藏) 二三
手本色紙御認被下(同氏藏) 二四
安節方不幸御聞達(同氏藏) 二四
新本故少々高價ニ候(同氏藏) 二五
性理大全御借被下度(同氏藏) 二五

後藤爲次郎宛

御藥克相考指上候(後藤敏宏氏藏) 二七
十棗湯ニてねり(同氏藏) 二八
十棗湯散有合候間(同氏藏) 二九
玄贅上木料彼はお世話(同氏藏) 三〇
大人御不快公私御引受(同氏藏) 三一
早速御悔可申上處(同氏藏) 三一

後藤鋳之助宛

遠方之由御芳亭(横手、利_二壽吉氏藏_一) 三二
石碑早春相認_二修齡筆_一(後藤敏宏氏藏) 三三
先日始而參上_二同筆_一(同氏藏) 三三
爲_二歳末_一御祝儀_二同筆_一(同氏藏) 三四

荒卷繼藏宛

城之助様御藥調進_二修齡筆_一(後藤敏宏氏藏) 三五
先時は逗留_二同筆_一(同氏藏) 三五
御母堂御藥調進_二同筆_一(同氏藏) 三六

河下玄意宛

年尾の挨拶(田川三郎氏藏) 三七
年尾御祝儀として(河下捨吉氏藏) 三八
拜納忝存候(河下清氏藏) 三九
爲_二歳抄_一御祝儀(同氏藏) 四〇

年尾御祝儀（河下清氏藏）	四一
御悔として遠方―修齡筆（同氏藏）	四一
見事の蓂莢―修齡筆（同氏藏）	四二
牢を抜け逃去候者（同氏藏）	四二
陰陽遍晦朔候（同氏藏）	四三
御菓子御惠授―修齡筆（同氏藏）	四三
看板甚不出來―同筆（同氏藏）	四四
脇先生の河下宛―参考として（同氏藏）	四四
大年の河下宛（其一）―同（同氏藏）	四五
大年の河下宛（其二）―同（同氏藏）	四六
喜助宛	四六

かやのくわん一さがり分御見せ（河下清氏藏）	四七
周益殿書物代（同氏藏）	四八
五郎右衛門宛	四八

毎度御道具御無心（河下清氏藏）	四九
-----------------	----

田坂宗二藏

美酒御投與被下―修齡筆（竹葉、田坂氏藏）	五〇
覺書一通進之候（同氏藏）	五一
脇儀一郎宛	五一

詩情不月、長進奉期候（日出、武内勢平氏藏）	五二
豚兒不幸、相應の者差置度候―修齡筆（同氏藏）	五四
亡父碑銘之義御請被下―同筆（同氏藏）	五五
野詩一首呈覽（脇儀一郎筆、修齡宛）―参考として（出田新氏藏）	五六
三浦修齡	五六
永松壽助宛	五六

廣島よりの書狀落手（日出、出田氏藏）	五八
幸藏彌右衛門參宮ニ付啓上（中島末吉氏藏）	六〇
八坂彌一郎宛	六〇
文獻通考康熙字典等御願（日名子太郎氏藏）	六六
岡松數右衛門宛	六六

御賢息御入來（日名子太郎氏藏）	六八
-----------------	----

藤井元藏宛

御安泰御臨年（中津、村上和三氏藏）・・・・・・・・・・六九

寺川英庵宛

鯉魚湯用方御示（高田龜市氏藏）・・・・・・・・・・七〇

垂尙恒字ハ久吾清江ノ人（同氏藏）・・・・・・・・・・七〇

鴻音到來御微恙にて（辻治六氏藏）・・・・・・・・・・七一

池邊橘左衛門宛

門下屬文は弓柳二子ニ候（今村孝次氏藏）・・・・・・・・七三

從弟豐田禎藏御方角へ（今村氏寫本）・・・・・・・・七四

乍無禮雖黃相加候（今村孝次氏藏）・・・・・・・・七五

此地逗留も御聽達（同氏藏）・・・・・・・・七六

秋月侯敢語御賞美（大塚留吉氏藏）・・・・・・・・七七

善次も俊藏も手前引取（全集八〇四頁）・・・・・・・・七八

小野昌庵宛

法則を天地にとり候へば（辛島詢二氏藏）・・・・・・・・八〇

詩轍一部呈平右（同氏藏）・・・・・・・・八二

弓崎俊平宛

徂徠鉛錄見申候（神戸、田椋竹藏氏藏）・・・・・・・・八四

綾部富坂宛

晋か所見四方の諸君子と合不申（渡邊勘藏氏藏）・・・・八六

綾部佐太郎宛

綱齋詩文集最早出來（磯矢康吉氏藏）・・・・・・・・八八

家庭指南序清記差上（滿洲、本庄完氏藏）・・・・八九

甲原幾平宛

漢字數四萬足らすあり候（末綱琢麿氏藏）・・・・九一

毛利泰元宛

灸書宜敷品不存候（松本立馬氏藏）・・・・・・・・九三

家老中根齋と申人の甥（毛利莫氏藏）・・・・・・・・九四

加藤善五郎宛

八

悴方迄御惠投(玉井頼光氏藏)

一樽御快復の印迄(同氏藏)

加藤周平宛

御小兒今以呻吟(玉井頼光氏藏)

見事之御肴(同氏藏)

無別事御勤(同氏藏)

小原隠居へ御届(同氏藏)

玄庭主へ詩一本進候(矢野伸太郎氏藏)

御平安欣慰(賀來榮二郎氏藏)

作進之募縁之序(玉井頼光氏藏)

雨羽織傘進之候(同氏藏)

加藤周貞卒し贅語上梓滞頓一修歸筆(賀來榮二郎氏藏)

玄應宛

履軒文集御無心(大坪寅太氏藏)

佐藤九一宛

閑散餘録一再涉獵(杵築、某氏藏)

守江良右衛門宛

道齋隨筆御尋ニ付申入候(東京、吉村龍介氏藏)

御取揃御年玉(同氏藏)

爲御年玉三種御惠投(同氏藏)

御令閨御安産(同氏藏)

當春ハ西邊御遊行(同氏藏)

芳野御參詣被成候由(同氏藏)

長崎へ達藏殿をも同道(同氏藏)

兒童出痘御聞及ニ付(同氏藏)

今日達藏殿御用御歸り(同氏藏)

歳暮御賀儀(同氏藏)

歳末御祝儀被懸貴意(同氏藏)

來陽緩々御禮(同氏藏)

餘寒に持病の疝氣(立川文友氏藏)

中田億右衛門宛

10

御兩家御繁昌(大阪、中野國氏藏).....一九
御樂調進仕候(同氏藏).....二〇
一封乍慮外(同氏藏).....二〇
愉快錄寫人無之(同氏藏).....二〇
五月雨抄御目にかけ候(同氏藏).....二一
松皮食の書付參候(同氏藏).....二二
御祝被下御禮申上候(同氏藏).....二二
御惠贈不淺受納(同氏藏).....二四
杉苗五百本程望ニ御座候(永松壯三郎氏藏).....二四
御肴料御深志ニ候(同氏藏).....二五
御目代として御在宿(同氏藏).....二六
御介抱人御丈夫に(同氏藏).....二六
愚妻此間危篤(同氏藏).....二七
無宛名.....二八

壯年とは乍レ申久敷御瀉(國東、森小彌太氏藏).....二九

無宛名

御年玉品々(別冊、宇都宮喜八氏藏).....

佐野玄遷宛

湯通口ニ滯結と相見申候(吉村龍介氏藏).....三二
灸治は折角可レ宜候(同氏藏).....三三
洞達亭記(佐野秀子氏藏類).....三四
菅公起レ自ニ儒林(吉村氏藏).....三五

佐野玄知宛

御令兄様の書面御示——修齡筆——(佐野秀子氏藏).....三七
御庭の躑躅満開につき——同筆——(同氏藏).....三八
富太郎女房御返し——同筆——(同氏藏).....三八
乳婦入湯被仰付——同筆——(同氏藏).....三八
乳婦入湯候處——同筆——(同氏藏).....三九

矢野雖愚宛

齒は之が爲め豁し髪は爲し之禿ぐ(清原道彦氏藏).....四〇

心病む人惡をなし氣病む人病をなす(清原道彦氏藏).....一四一

岡島羽仙宛.....一四三

簡天儀くつれ物 新五郎歸る迄(岡島保氏藏).....一四五

須摩屋源助宛

御藥又又御進候(杵築、莊野源六氏藏).....一四七
石摺代封の儘落手(同氏藏).....一四八
川芎半斤御遣し(同氏藏).....一四九
年賀四海同風(同氏藏).....一五〇
白水眞人と交を絶つ久し(同氏藏).....一五〇
又緩々參上(同氏藏).....一五〇
貳匁七分五厘乍延引御落手(同氏藏).....一五〇
詩轍御返し(同氏藏).....一五一
名字永頼は(同氏藏).....一五一
君侯引見ニつき御賀被下(同氏藏).....一五二

年尾御禮として御使札(同氏藏).....一五二
小兒出瘰之處(同氏藏).....一五四
見事御希御嘉賜(同氏藏).....一五四
轉藥も可然候(同氏藏).....一五五
鹽飽屋に居候事(同氏藏).....一五五
手本宜敷物無御座(同氏藏).....一五六
石碑螭首の義とくと(同氏藏).....一五七
行平鍋三つ入掌(高田龜市氏藏).....一五七
辨分より暮候へとも(來浦、吉武郁爾氏藏).....一五八
當春は御婚儀(姫島、江原虎二郎氏藏).....一五八

奥津左大夫宛

急流中勇退御手際ニ候(奥津幸雄氏藏).....一五九

植田元左衛門宛

古牒致拜見(朝來、植田榮氏藏).....一六一

安東貞五郎宛

御城下に上り御目見 (三浦榮二郎氏藏) 一六五

お類袖留御祝儀として (御堂琴代夫人藏) 一六七

瀬戸田政藏宛

お祭に御招被下 (安岐、中島穆氏藏) 一六九

一同御禮申上候 (同氏藏) 一六九

小串逸鳳宛

病人容躰承知致候 修齡筆 (手島辰次氏藏) 一七一

無宛名

始終の美名を全ふし給ふ様 (杵築、石田伯介氏藏) 一七三

文徵明草書も参り候 (同氏藏) 一七四

藝苑談拂本出候 (大阪、森繁夫氏藏) 一七五

眞の寒水石 (佐々木高重氏藏) 一七五

銅君より承り慰悦 (同氏藏) 一七六

健吉殿にも御歸の由 (出田新氏藏) 一七六

松原善太郎宛

遠路の御尋問 (中島穆氏藏) 一七七

成吉儀兵衛宛

茅屋御立寄 (中島穆氏藏) 一七八

成吉室平宛

菲薄の御菓子 (中島穆氏藏) 一七九

定藏宛

爲年尾御祝儀 (中島穆氏藏) 一八〇

中野升右衛門宛

杉苗五百も六百も所望 (安岐、永松壯三郎氏藏) 一八一

小深田磯右衛門宛

取込の處逗留 (江原氏藏) 一八三

路正平宛

戸次軍記代八匁八分二候 (朝來、植田榮氏藏) 一八四

家中變化齎入候 (佐野氏藏) 一八五

佐渡屋政左衛門宛

中汲は拙者甚好物(佐野平作氏藏).....一八六

山田孫一宛

從長崎碑文参り候(山田榮氏藏).....一八七

賀來吉左衛門宛

眞玉へ片便を得候故寸楮(佐野秀子氏藏).....一八八

豐國紀行御惠投(同氏藏).....一八九

今昔物語拂本有レ之由(同氏藏).....一九一

綾部要哲宛

秋吉産科段々發興(荒巻璞次氏藏).....一九二

賀來泰安宛

加藤周平歸藩之上(賀來榮二郎氏藏).....一九三

詩轍梅園集板本紛失一修齡筆(同氏藏).....一九五

若狹屋老人ニ對し愚案未決一同筆(同氏藏).....一九六

鶴崎より大黃參候一同筆(同氏藏).....一九七

貴塾兩雛蒙ニ惠來一候一同筆(同氏藏).....一九七

學業近來進一步候様相覺候一同筆(同氏藏).....一九八

僕以ニ天之寵靈ニ再一同筆(同氏藏).....一九八

拙家養子の儀一同筆(同氏藏).....一九九

日田表一件御面談之上一同筆(同氏藏).....二〇一

灸炷七萬五千送達仕候一同筆(同氏藏).....二〇二

此方病人今日益宜敷(同氏藏).....二〇三

唐本之醫書拂本御座候一修齡筆(同氏藏).....二〇三

久勞如何御入一同筆(同氏藏).....二〇四

唐木香賤價之品一同筆(同氏藏).....二〇五

御母儀様御不幸之段一玄龜筆(同氏藏).....二〇五

京師又々大火一修齡筆(同氏藏).....二〇六

桂細根皮御座候は一同筆(同氏藏).....二〇六

鈴木老母中暑ニ而一同筆(同氏藏).....二〇七

賤女縁談決定御聞一同筆(同氏藏).....二〇八

源泉一言半句罪ニ服する事無之一同筆(同氏藏).....二〇九

前藥の餘力ニ而(賀來桑二郎氏藏)	二二一
日田博多屋へは飛脚便有之(修齡筆)(同氏藏)	二二二
今朝ハ精神爽ニ(賀來元吉氏藏)	二二三
木綿二十反御世話被下(修齡筆)(同氏藏)	二二三
賀來三郎治宛	

天地帙も來月中には(賀來元吉氏藏)	二二五
鄙序御覆醬可被下(修齡筆)(同氏藏)	二二七
逗留中手本相認(同氏藏)	二二八
山崎甫庵宛	

歳首御祝儀(修齡筆)(日名太郎氏藏)	二二九
渡邊小兵衛宛	
おくめどの機嫌克滯留(荒卷瑛次氏藏)	二二〇
廣瀬久兵衛宛	

當領内村々騷立候趣(修齡其他筆)(武石繁待氏藏)	二二一
鐵砲等取扱候儀有之候へハ(同筆)(同氏藏)	二二二

お家どの宛

お類かへり度と申候(杵築、堀しづ氏藏)	二二六
-------------------------------	-----

兩子善兵衛宛

内々申上候浪人の義(加來義市氏藏)	二二八
-----------------------------	-----

無宛名

西方寺流人(加來義市氏藏)	二二九
彫刻料加賀屋善藏へ御拂(修齡筆)(同氏藏)	二三〇
敢語一部懸御目(杵築、荒木氏藏)	二三一
乍ニ無禮ニ離黄相加(高山通男氏藏)	二三二

補遺

錠前寸法進上候(杵築、荒木氏藏)	二三三
御歸國無 _レ 程(杵築、廣石氏藏)	二三三
御寫取の贅語暫御かし被下度(佐野秀子氏藏)	二三四
遠路徹齋迄御尋問(大分、小野澄氏藏)	二三五

卯作生歸省定て對話 (小野澄氏藏)	二三五
禹餘糧一顆被贈 (同氏藏)	二三六
書物料槌に落手 (大分、伊藤氏藏)	二三七
詩轍御加文の旨 (辛島詢二氏藏)	二三七
自拙者、申入吳候様 (松本義一氏藏)	二三九
急に御見廻難申 (同氏藏)	二三九
折角減性無之様 (同氏藏)	二四〇
遍阿の詠草見集めて (秋永鼎三氏藏)	二四〇

人間三浦梅園

三浦氏系譜	二四五
先生の家庭	二四七
先生の友情	二五三
梅園先生の肖像	二五七

桃李滿門

脇・蘭室	二六〇
矢野雖愚	二六四
矢野蕉園	二六六
毛利太玄	二六七
井上大成	二六八
清水守業	二六九
君子の好誼	二七一
賀來子登	二七二
倉成龍渚	二七四
後藤運平	二七六
麻田剛立	二七九
中井積善	二八六
手簡の上で一元論を説く	二八八
先人未發を自認す	二九一

藩公に召された時の光景	二九六
遺言書	三〇〇
先生の國體論	三〇四
皇和第二(贅語一、天地帙上)	三〇四
聖人第八(贅語五、善惡帙下)	三二一
立準第九(贅語五、善惡帙下)	三二一
立準通語	三三九
國體論の梗概	三四五
國體論の後に記す	三四五
跋文(三枝博音)	三四五

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the manuscript on the left page. The text is written in black ink on aged paper.

Handwritten text in cursive script, likely a continuation of the manuscript on the left page. The text is written in black ink on aged paper.

日中市渡邊次郎兵衛(玄碩)が天文に關し質問せし
に答へたる返書數通中の一(本文三頁及び六頁参照)

渡邊次郎兵衛宛

阿蘭陀圖に天球地球御座候 (渡邊功氏藏)

御使札披緘 滯滯之節御座候得共 徳門愈御壯盛御入被成珍重不_レ過_レ之奉_レ存候 野老無_レ恙罷過
候 御念想被下間敷候 誠仲春之頃者 大勢參上候に御丁寧 猶歸路をも御待被下候段 忝奉_レ
存候 御近邊をも通候得とも 御立寄申候得者 いつれ御留被成候故 乗打仕候御免可被下候
御尊父様(尊父とは綱任といふ、後項参照)にも何分宜敷奉_レ願候

一、星圖

一、怪異辨談

一、天學摘要

御返却落手仕候

一、御尋申候節御物語申候 拙著遣候様に被仰下候得共覺不申候 梅園讀法 答墨卿書 懸御目候且星圖名落候分御尋被下候得とも 御存知之通之近視中、小星目に障さり不申候 天經惑問註解進候 是にて御引合せ御覽可被成候

一、菊池加藤御狀便之節 相届可被下候

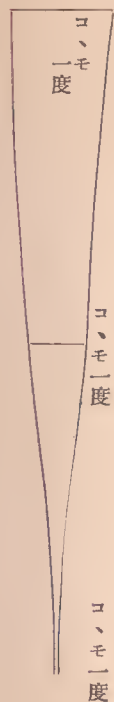
一、阿蘭陀圖ニ天球地球御座候 細工窮精巧候 小金にては手に入申物にはなく候 拙ことき貧兒の手に合不申候 何卒そろ／＼御心懸け御求被成候而者如何と奉存候 尤買賣には無之物ニ御座候 此天球御座候得者 星圖もよく正數相ミへ申候 又日之圖 月之圖御座候 是者格別之金ニハ至るまじ九候 何卒御心懸可被成候 是等も通事たのみ 阿蘭陀へ不申遣候而者無之物とも御座候

一、千一大坂とも御出御座候者 麻田剛立と申仁 御尋可被成候 此方にて綾部璋庵と申候 是者天學推歩には至而委數御座候 拙者は中々問を受候様の事ハ出來不申候 若御望も御座候者從是御引合をも可仕候

一、拙者天文推歩一向不案内に御座候 拙者於天地而一得有之候處ハ答墨卿書とくと御覽被成候得者相わかり申候

一、御來訪之御志も御座候へとも御多事 御心組も出來兼候段御尤千萬之御義奉存候

も回る事はひとしく御座候 度數



右之通に御座候 さて天も三百六十五度といふ物は本來天にあるものにてはなく候 はかる入度をたて不申候得者わかり不申候故 目やすに拵候物にて御座候 此處よく御合點可被成候 それゆへ唐にてハ三百六十五度四分度に候とたて申候 西洋にては三百六十とたて申候

一、一地球違ひつたる處 五十刻にて御座候 刻五十刻 度數にて百八十二度餘也

一、北極星ハ四軸の中にあり 北極軸之處には星ハなく候

一、予先年綾部璋庵にきけり 一度三十六丁 里にて廿里には足まじき由也 近年者定而密算あるへく候不承候 先三十六丁道廿里とみて 是を三百六十五度二分五厘にかけ候得者大抵わかり申候 地は至てほそきものに御座候

一、蠟蝋水火等の説とるにたらず候 すへて五行といふものは 周季に起りし學問にて大に正理を害するものに御座候

一、配當といふものすへて無理にて御座候

一、五星之名楞嚴經などに出候も 木火土金水と號し候得とも 是ハ翻譯之時の事と被存候 西洋の説は別に御座候 長崎にて承候分かきつけ歸り申候 拙著歸山錄と申内にしるし置候 乍去是も配當有之候 此處ハ面白からす候

右相考不申 艸々に書進申候 是ハ老懶とて

あとよりと申事

出來かね候故如此御座候 得

餘暇候て緩々御來遊をも待ち候而可申上候

近日肩痛申候而あらく申述候

御免可被下候

恐惶謹言

五月九日

三 浦 安 貞

渡邊次郎兵衛様

星象は自測得るを主と致候 (渡邊功氏藏)

尚々日田狀一通奉頼候已上

一筆致啓上候

霜露御平安御凌被成

珍重奉存候

拙老無事故消居諸候 然者研匣之銘 扱々

遅漫恐入候

漸拙文出來候故

先一通懸御目候

思召に相叶不申候處も有之候者 重而吟味可

仕候 表養老二字之義

御存之通之惡筆此義者又 他筆勤候衆へ被仰付可然奉存候

何分御斷申

上候 星象市譽州候も如何敷候へ者先紙に印申候 いづれ御式に被存候者 且上には書候も

可然候 木地には不圖 筆誤も出來候節難謀奉存候 是者珍敷木に候得者願くは御ぬり被成候而

者如何 何れ硯御入被成候處へ 其儘にては御用立申間敷候 夫とも同木地に御望に御座候者相

應に大工へ白ヶ御引を可被下様奉願候 右之段足下迄得申上候 何分宜敷奉願候 外ニ一枚句讀

入候者下書に御座候 足下方へ御扣置可被成 養老より今迄御書付と年數違申候得者 是者此方

にて重疊吟味仕候 左様思召可被下候

一、去年之御問遲滯其後物こと疎懶久敷打置候得共 答を早々殊には不案内 只存寄書付申候

御取捨者賢慮に過間敷 猶又有識に御問可被成候 別紙申進候 星之義者拙不眼にて分り不申候

何れ星象を天學家にても自測得るを以て主と致候 且古き圖ハ星象南北の相違者 天行によつて

出來候 黒星ハみへてもミヘ不申ても可有之候 六等に分ち候小星をすへて申事に候

一、鍾馗之贊惡筆恐入候 殊不出來如何敷御座候得共 命拒かたく 相調進候 御入掌可被下候

一、敢語御落手と奉存候

一、養伯又々他出 扱々氣之毒成事に御座候 如何其後模様ハつき不申候や 先者用事のみ早々

申遣候 皆々様ニ可然 自是も宜敷申上候 恐惶謹言

十月廿九日

三 浦 安 貞

渡邊次郎兵衛様

梧右

八
晋 (花押)

大坂本一部進め候御落手被下候や (渡邊功氏藏)

御遠々敷罷過候 御渾家御多福秋暑御凌被成奉珍重候 山中無異事與白雲親み申候 御懸想被下
間敷候 然者此仁豐田禎藏と申拙縁類之者ニ御座候 當時牢浪面目一見罷越候 近比乍御面倒御
見知被置 往來日暮風雨にも及候節者 御一宿をも御許被下候様奉希候 決而御心遣にも及候様
成者にては無御座候 宜敷奉願候 様子者此仁ニ御聞可被下候 且又先頃之硯箱畫賛未講思不仕
候御免可被下候 此内自大坂本下り候故 敢語一部進之候 如何御落手被下候やと奉存候 青柳
元龍も當春 肥熊本ニ遊學 自夫筑前ニ負笈 今月者歸郷可致と申來候 歸途様子により 御
見舞も可申上候 萬々申殘候 御尊父様にも可然奉願候 恐惶謹言

八月 八日

三 浦 安 貞 晋

渡邊次郎兵衛様

拜復

六郷山延力寺とは (渡邊功氏藏)

寒冷御平安可被成御入奉珍重候 拙無異事罷過候 然者此間は禎藏投宿彼是御世話罷成 忝奉存
候 以來ともに御慈愍奉願候 且中津より小倉迄之間 拙心安處無御座候 貴君御親戚様ニ御狀
御添可被下由忝 當時牢浪之身分ニ御座候得者 道中之才覺も出來かね候義 是又可然奉願候、
且又此内御狀研匣之銘被仰下候處 最早此方發申候故不及即答候 禎藏へ右之點付可遣由 左之
通申入候

豐之國東○ むかしはさきに崎之字用候得共 三齋公已來東之字用候

一、郡六郷 一郡中ニ六郷と申候得共 武藏郷安岐郷 國崎郷來繩郷 田染ヲ郷とも申候 左様
ニや分明ならず五郷一郷ハはやみ内山香郷いり申候得とも大圖ヲ申候

山龍蟠于其間焉 龍の如く六郷の間にわたかまるなり 峰或面而起 流多背而走
龍從然而遠焉 山之氣内ふかみたる也 昔養老戊午有緇徒(佛子) 人聞者大關金仙窟於此 曰延力寺

六郷山延力寺といふは、國東中ノ寺號山號にして、東塔西塔横川にかけて、比叡山延曆寺といふ様なるものなり。

蓋蔓延一百餘區……延力寺の内に兩子寺ヂヤ、文珠ヂヤナド、廢寺小堂かた／＼百八十餘カ所あり

逮^{シテ}今天明壬寅^ニ相去^{ルコト}一千六十有五年 以久矣

鎮西^{（九州の南部）}郡官使日高^{ヒタカ}鎮臺^{チンタイ} 揖斐君^{スズキ}佐 高原君得^{モト}其故^{コト}

柱^{ハシラ}於^ニ馬城里之練若^{レンニヤ}、爲^ス研匣^{ケンコ} 研硯^{ケン}同し

以充^{アヲ}文房之雅賞^{マカフ}

其理順而澤^{スベリハコ}

其質堅而緻^{ニシテ}

愛護得^{ハハサイ}處^{シヤウクハ}

大事に守護する事 圖に入らば也

豈恨^{ユクサキ}其往^ニ焉哉

銘曰 俯就^{ミツナリサケナリ}繩墨^ニ

木は心まゝにゆかみ

ねぢれてふとれともスミカネを受る也

仰^{サマフ}撐^{ムナギハリ}棟梁^ニ

すみかねを以て大事のむなぎをもちて家をたもつ

引^{オモキ}重^キ致^キ遠^キ

此箱チヒサケレトモ オモキ石ヲいれて猶數千年もつ

率^{フル}此^キ舊^キ章^{ノリ}

舊章ハ俯してすみかねにつくや此はこ大事あぶなさ處におかす取あとさず手入よければ幾千年

もたもつなり

高原氏も大下の御丁つたへ 大下のハハより見れば棟箱はたの事なり 此

箱大事になされしも おもきをひき遠きに致す 此一縣を御たち被成候もおもきを引 遠き

にいたす只繩墨につく事に候

右子細らしくも思召へく候得共 ケ様之ものいましめの心なさは閑文字とて淨瑠璃も同じ事にな

り申候故 右の通申進候 萬々申遺候 恐惶謹言

霜 月 十日

三 浦 安 貞 晋

渡邊次郎兵衛様

宵の明星曉之明星と申は (渡邊功氏藏)

八月十二日之貴書追々落手致拜見候得とも 亡妻以之外之様子追々登鬼錄 從夫弔客送迎 近

日七七日と推移 乍存御無音罷在候 晨下霜露交降 如何起居御平安御入被成候哉 拙落魄とし

て消殘年候

一、硯箱之義枉而蒙稱諭大赦 然し仕合御座候 御丁寧之御挨拶痛入候 可然被仰置可被下候

一、俗に宵の明星曉之明星と申者 定なる事なく只曉タミへ候大星をつかまへて申候 實に曉タ

の明星とするは 太白即金星 日の西に廻れば曉の明星となり 日の東に出れば宵の明星と成

曉なれば啓明と申　夕なれば長庚と申候得とも一星にて曉夕出沒は不定候　水星ハ日を遠く不離候得者　天已に曉け日纔ニ沒するの頃に見へ候星故　拙ことき朦朧たる眼には遮り不申候　五星の歌ハ曆家ニ應と申物御座候　應ニ因て推せは早遅しれ申候　今火星ハ暮候而中天にあたり小夜に見へ申候　土木秋の比くれにミへ申候　今比此邊山高く宵ハミへ不申候　もはや日に伏候也　近來心を不用候故不申進候　歳星即木星一名龍とも申候　十二年に大概天を致一周候故　先子丑之空に應すると致候故　歳星とも申候　龍次ニ甲子　歳次ニ乙丑　皆此星を以ていふ也　されとも是あらましの事ニ而天度ニ十二空歳星定まる所ハ無し　大概ニ御覽可被成候

一、地中氣ノ隧道有之候　古人もこれを菌　瓣蜂火のとしと申候　此竅氣もみち火ふるもあり水あるもあり　氣陸ニ出る處風穴と申候　陸ニ水ノ通するを川と申候　海中氣ノ通するを海眼と申候　地氣一面には不發　海眼に取りまつて發候　因て阿波の鳴戸など申類　氣道門のあたる處海眼之地是より出る時　潮水湧氣出盡せハ水入て潮ハ申候　委敷ハ書狀ニハ難ニ申盡候

一、信州之火變希有之義乍去　大小社御座候へ櫻島と同様之事ニ御座候　櫻島火變之記は拙國字文ニ書おき申候　夫に付申入候信州之變　色々書付も見申候　猶又板行も見申候得とも　是實徴とも難致候　公儀御勘定し易き微細之書付可有御座候　何卒高原氏などの御力を以て　實事之言上書記録之類手に入候義者相なり申聞敷由御考可被下候　拙にも希代の義書とめ置度候得とも

火變も一絡ニ吟味仕置度候　任御心不申進候　時宜次第御沙汰被度　不可ハ何れも是ハ用候可被下候　先荒々返書延引御斷旁　如此御座候　恐惶謹言

十月十一日

三　浦　安　貞

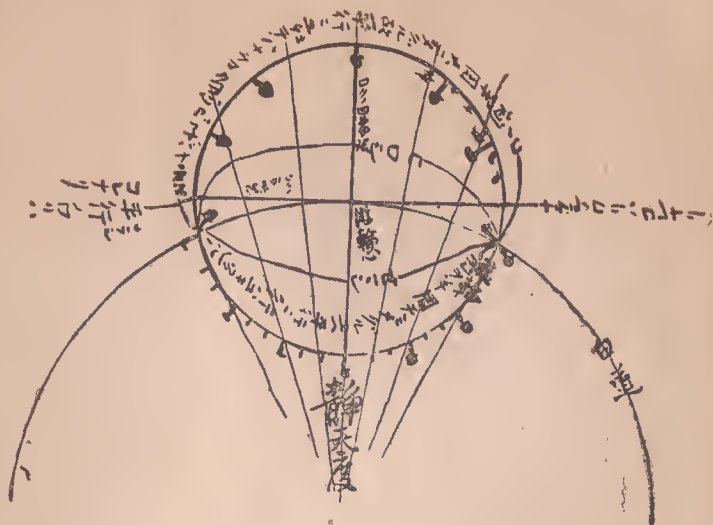
渡邊次郎兵衛様

靜天度ノ廣狹ハ高キ卑キニ分レ候　(渡邊功氏藏)

序註解十一マイメ

月行遲疾之御不審成程此處文章ゴタツキソロ　先一体漢學ハ遲疾留段ヲ分チソロ　西洋ニテハ升降ト見ソロ　西洋ノ見様甚明かにソロ　文章ニカハハラズ　眞行御考ナサルベクソロ　靜天度ノ廣狹ハ高キ卑キニワカレソロ　月ノ游輪ノ心即白道ニテ月ハ白道ニハアラズ　白道ヲメクルモノニソロ　コレヲ靜天度ニアテ、見候ヘバ白道下ニテハ狹ク　白道上ニテハヒロクナリソロ　遲段ハ半ノ上　疾段ハ半ノ下　留段ハ半ノ側　地上ヨリ見レハ　游輪ヲ下ヨリ升ルト　游輪上ヨリ下ルト升ルト降ルトハ地上ヨリ其位チガハヌ故ト、マル様ニミヘソロ

先ケ様にも被思申候　不案内ニ候へ者其道にくはしき人に御問可被成候



地ノ一度 ケ様ナルコトハトカク 古人ノ説モ
タノミガタクソロ 西川ナド四五十里ノ間ノツ
モリカト覺ソロ 麻田剛立ハ二十里ニタルマシ
ク申サレソロ 尤サモアルベキコトニソロ 豊
後國東邊 北極三十五度餘ニシテ サツマカゴ
島ハ三十一二度ノ間ト承候ヘハ カゴ島マデ迂
曲シテ行テモ百里バカリカニソロ 然レハ豐薩
ノ間四度内外ノ差コレアリソロ 三百六十五度
ニ 三十六町道二十里ヲカケ候ヘハ 地球ノ大
圖シレソロ 二十里ヲカケ候ハチフトスギ可
申候ヘトモ大概先心得候ヘバアラマシレソロ
微星ヲ見候器ハ ゴンガラスト申ソロ 未見不
申ソロ 望遠鏡大概ハ見ヘソロ 星目ガネト云
モ承候 ゴンガラスト別カ一カ存ゼス候高價ノ
モノニソロ

此間御尤ニソロ 愚案ニハ盈縮ハ南北經緯ノ度ニカハハル事ニハ非スト存候 其故ハ盈縮ハ
見出シソロハ 隋ノ劉焯已來元ノ郭守敬ガ時盈縮ノ點ト合シ候 サレトモ今コロニテハ冬至後ハ
九日ノ間夏至モ同様ニ候ヘハ全ク冬至夏至トハ別ナルモノニ候 コレモ月ト同シク 游輪アルコ
トニヤ イツレ升降イタス故ニヤ盈縮ノ源ハトクハ存ジス候

渡邊氏質疑の書狀(其二) 並に梅園先生の回答 (渡邊功氏藏)

— 參考として —

一、津府會成氏御返進物罷歸候砌 早速相届申候處 彼方より受取參申候 重而御借用被仰遣候
書物之儀 何之儀も申來不申候 若彼方より直に便ニ而も御座候て參り候哉と奉存候 若未不參
此後此方之様ニ參り申候ハ、早速差上可申故に付先 御書物通箱ハ留置申候 左様思召可被下候
(以下括弧の中の文章は梅園先生ノ回答書信で朱を以て書き入れてある)

(未彼方よりも返書無之候乍去此方ノ品相達候得者安堵仕候 彼是御世話ニ罷成忝奉存候)

一、怪異辨斷 此度御返進可仕之處 些拔書仕度儀御座候ニ付此節も御返上不仕候 何レ早春ニ
社御返上可仕候 左様思召可被下候 永々留置甚氣之毒ニ奉存候

(緩々御覽可被成不_レ苦候)

一、毎度申上御面倒にも 可被思召上候得共淺見仕候様之御書物御序ニ御恩借被仰付可被下候
此段吳々奉願上候 星之圖御借被下度 (今日諸事度候へとも其御元春に御進可申候) 少々宛宿星見え立申候て 大悦不少奉存候 將又、星之
圖ニ而 春夏秋多何レノ邊ヨリ出テ何レノ邊ニ
入短夜長夜月ノ出入時分相違無之儀也 月之運行相分り不申候様ニ御座候 もし右にて相分り候哉
御序に御しらせ被下度奉存候

(此儀者御面談之節粗申談候と覺申候 先黃道にて十一月中なれば中といふ字ヲ其日纏と定め
其處ヲ東ノ地平ニ合せ候得者其時地平より上ニ見へ候星が上ニうかみ候星也 其日纏ヲ西ノ地
平ニあて見候へはそれは日入し時ニうかみ候星也 其十一月中ノ日纏ヲ子午ニむかひ候天徑環
ヲ地下ノ筋ニあて候へハ夜半の星地平以上ニうかみ申候 此例にて御推可被成候)
且天者圓成物ニ而一晝夜ニ一遍周り候物故東西無之筈之處 右星之圖に東西南北御分チ被成候儀
參上仕候節うつかりと承り候而 今更後悔仕候 是又右月之運行と一所に御序ニ御しらせ被遊可
被下候 此段偏ニ奉願上候

(二十八宿ヲ七ツニ分ケ東西南北の字ヲ置候は少々ハわけも候へ共先フテウト思召其字に強て
御なつみなされましく候)

一、安節様 養伯子への書狀乍憚御届させ可被下候 もはや年内無餘光罷成候 隨分御安居御迎

陽可被遊候 來春得尊前

萬々可奉得尊前候

書付引候儀候

其書付引候儀候

巳冬月十三日發

渡邊 次郎兵衛 (花押)

三 浦 安 貞 様

尊 下

渡邊氏質疑の書狀 (其二) (渡邊功氏藏)

——參考として——

地度同じ一度ながら 日天の一度とハ次第ニ廣狹あり

日天



コ、ノ一度中華ノ二百五十里ニテ候哉

コ、ノ一度ハ中華ノ二百五十里ニテ候哉

定て地球の所の一度と被存候 此所にて地周も大體分り候様被存候

*

黒キ星ハ不見トアリ イカナル朗夜モ見ヘス候哉 コレヲ見ル器ニテモ 有之候哉

日 龍頭龍尾ノ所ニテ食スル時ハ 其下ノ地ヨリ見ル時ハ皆既ノ日食ニテ候哉
(然リ)

冬至ノ日道南陸ノ極界ニシテ其靜度ハ狹クシテ黃道ノ度ハ廣シ 故ニ日行盈トス 春分ハ黃赤ノ
交處即日道トナル故ニ平行ニ合ス 是ハ其意ヲ得候ヘドモ 夏至日北陸ノ極界ナル故 靜天ノ度
ハ廣ク黃道ノ度ハ狹シ 故ニ平行ニ不_レ及 天度廣キノ至ハ赤道 黃道ノ度廣キノ至リハ黃道也
黃道ノ度北陸ハ狹キト云事 愚意ニ會得仕難ク奉_レ存候
地平上ニ遠キヲナストハ 北陸ニ有テ ウヘニ見ル故カ 又地平上ニ近キヲナストハ 南陸ニ有
テ斜ニ見ル故カ

北五六度ニ在テ游輪ノ最高ノ點ヲ行ク故 其行所ノ靜天ノ度ハ狹ク 月行黃道線ノ度ハ廣ヲ以テ
必平行ニ過テ盈トナルト云ハ會得仕候 月行處ノ天 亢氏房心尾箕斗ノ宿ト與ニ南陸ニ斜ニ低ク
游輪ノ最卑ニアリテ 地平上ニ近キ故 列宿靜天度ハ廣ク 月行黃道線ノ度ハ狹キト云コト 愚
意ニワカリカネ申候 南陸トテモ北陸ニ同ク黃道ヲ社 月ハ徑行イタシ候ヘバ ヤハリ黃道ノ度
ハ廣ク 靜天ノ度ハ 赤道ヨリ二十四度離レ候ダケ 狹キヤウニ存シラレ候 又月行天ハ星天ヨ
リ卑ヲ以テ 其度ノ狹キ所ニ就テ勘ヘ候ヘバ 北陸モ靜天度黃道度ヨリ狹キヤウニ存シラレズ候

渡邊所著の「南陸」の文を以て、
應_レ渡邊君爲其老父開_ニ六十之壽筵_一之篇上

聞説老策子 開宴唱千輪 趨庭多日月 長好弄離遊

二子山人 三浦晋拜

衆山縣泰岳 四座則兒孫 詩賦青松茂 舞將黃鶴飄
素封偏潤屋 陰行欲高門 園制鄉耆老 六旬世所尊

右賀渡邊賢翁六十誕辰 龍渚倉巫

玄碩の父は綱任、寛政八年七十八で歿してゐる。其の六十の賀とすれば安永七年で梅園五十六、玄碩（即ち次郎兵衛）
はずつと後輩であつた。それに斯うした天文の事を糺してゐた。後ち玄碩は歌道を修むべく、京師聖護院村に住し歌を日
野蒼枝に、連歌を里村昌逸に學び、里村家を襲ぎ、法橋に敍せられ將軍家齊の師範となり、柳營に勤仕し、廣く天下の名
士と交遊してゐた。文政四年江戸で客死したが、年六十であつた。其の子玄有亦師範の家を繼いでゐる。
梅園先生中津に通ふ、往復必ず渡邊邸に泊り主人玄碩と談じ、中津に行つては倉成龍渚と語る。三子の交遊は頗る親密
なるものがあつた。

市原玄意宛

一年は瞬息無_レ程得_二拜眉_一可_レ申 (國東、田中鏡二氏藏)

陰晴不常候 御起居奉_レ窺度候 收麥插秧田園紛々罷暮候 然者此内ハ御從駕の命降候由 目出度奉_レ存候 暫ハ御餘閑握手期申候處 却而隔_二參商_一可申候半ハ 滄然之仕合 乍去一年瞬息無程得拜眉可申候

一、贅語落手仕候

一、御用立候本御返可被下由 御發駕迄ニ緩々御取調可被下候

一、御心安儘得御意候御所持の十金外臺御留守中御預ケ被下候義ハ相成申間敷哉 先御尋申上候 今日も艸々萬々期他日候 恐惶謹言

市原玄意様

* 市原玄意とは杵築藩醫で、其の子東庵は帆足萬里と親交があつた。藩主に従ひ一年江都に勤めることになつたのを送つた狀である。

後藤運平宛

一 夕從容慰鬱陶 (後藤敏宏氏藏)

此間ハ一夕從容慰鬱陶候 愈御安健可被成御座 奉欣喜候 拙自麻田暮ニ及候得とも無恙歸宅仕候 御案被下間敷候 其節御約束仕候品 今日得便指上候 御慰ニも相成候は千萬本望可奉存候

頓首不備

霜月廿七日

三 浦 安 貞

後藤運平様

* 運平、幼名長次郎、享保五年生。寶曆元年三十二、父に替り大保長となり、安永六年五十八歳致仕し、家を養嗣子安道(爲一郎)に譲り、寛政九年行年七十八を以て歿し、量譽宗壽居士と諡してゐる。

び精神に交はり深かつたといふ。浦安の計を惜み、其の限の中にも、

一 兩年凶饑世上困迫 (後藤敏宏氏藏)

御投書拜見仕候 凍寒之節徳門御萬福奉忝喜候 拙蠶々送寒光候 然者此間龜末の野蔬進候處 態々御挨拶痛入候 年内得貴意申間敷候 折角御安寧御踰年春陽萬々可申上候 乍慮外何レも様ニ可然御致聲申御禮奉願候 愚息同上申上候 扱一兩年の凶饑世上困迫 兩子内も御聞及被下候 半 小原内も御事多段承候

のがれても世は治まれと思ふ哉 靜ならねばかくれ家もなし

なと申事存出酸鼻御事に御座候 且又家庭指南も上木の擧 取懸り候筈ニ此間杵築ニて申談置候 尤序文章稿のみにて御座候へ共 是は春ニ至 相調可申 詩轍も來秋は慥に成就可仕候 周平生委細被存候 申度事先是限閣筆申候 恐惶謹言

極月廿日

三 浦 安 定 晋

後藤運平様

手本色紙御認被下 (後藤敏宏氏藏)

芳歇 鳥啼候近候 御健在之段奉忝喜候 然者兼て御願申上候手本色紙御認被下 御老躰御苦勞
忝 乍併先許大悦十襲重寶可仕候 (十重十襲と大切にすること) 任便先許へ遣申候 殊御書損しも御座
候由にて色紙御足し猶舊紙御返却被下 被爲入御念候御事痛入奉存候 拙者も先月は 藩中滯留
此内於横手令嗣君 (令嗣は爲次郎?) へ緩々懸御目候故 荒増御相談申候得ハ粗御聞被下候半 先鬱
寒の事も一通り相達申候 乍去掣肘御座候處 酸鼻仕事ニ御座候 夫ともに少々宛ハ行はれ候事
も可有御座奉存候 他事不能腐毫候 恐惶謹言

卯月五日

後藤運平様

三浦安定

安節方不幸御聞達 (後藤敏宏氏藏)

安節方不幸御聞達 御弔書忝奉存候 茫然之仕合御察可被下候 右御禮申述度 如此御座候

五月十四日

恐惶謹言

三浦安貞

*安節とは妹婿、石川昇、安節と號し醫を業としてゐた。

新本故少々高價ニ候 (後藤敏宏氏藏)

(切)御平安御加年可被遊大慶奉存候 弊方無恙迎春仕候

一、詩韻一卷懸御目候 是ハ去處よりの拂本にて 拙者へ世話可仕旨申來候 千一御望も可有御
座かと(一字切)懸御目候 先年本藏殿三重韻御欣羨の義も御座候付 得便呈之候 御入用ニ無御
座候ハ 御返却可被下候 少も不苦候 外に王勃詩集檀弓 (檀弓は禮記の篇名) 批點^一明令文章九命^二拂
ニ出申候 明令と文章九命トハ拙者取申候 残りの二部若御望之方も御座候へは御しらせ可被下
候 尤新本故少々價高御座候 若此本御入用無御座候は 追て御返却可被下候 折節草々申上候

恐惶謹言

正月廿四日

三浦安貞 (花押)

後藤運平様

性理大全御借被下度 (後藤敏宏氏藏)

(切)慶奉存候 弊方無恙罷過候 御心安思召可被下候 然兼て申上候性理大全今日幸便御座候聞

申上候

何卒御借被下候様奉願候

尤大部ニ而御座候へハ

涉獵仕候にも少々隙入可申候間 暫

ハ抑留仕度奉存候

恩風奉仰候

恐惶謹言

霜月十一日

小原運平様

(小原は村苗字なり)

三

浦

安

貞(花押)

二六

後藤爲次郎宛

御藥克相考指上候

(後藤敏宏氏藏)

拜誦月迫御平安

大悅奉存候

誠先頃ハ緩々接紫字

解鬱陶候

御歸路御難義奉察候

拙子も漸

罷歸候

扱御藥克相考指上候

十棗湯壹匁包として指上候

折節棗遣切

御地にて御調御用可成

候 何れ十棗湯の藥力未微物と相考候 緩々御用御覽可被成候

一、事緩急あり

銀札の義此節論する處にあらずと相考へ申候

一、助給の義一工夫も御座候も大意書申候

何とも是は當時行はれ申間敷奉存候 猶相考可申候

一、御大人様(大人は運平也)より借用仕候品

先御預り申上候 可然奉願候 取込 荒々申上候

皆々様可然奉願候 恐惶謹言

十二月廿日

三

浦

安

定

小原爲次郎様

* 爲次郎、諱宏直、又彌助と稱す、梅園門人、寛延三年鶴崎の木岐源左衛門致直の四男に生れたのである。二十八歳、運平氏に養はれ大保長となつたが、享和三年致仕した。それでも在職二十七年、文化九年に六十三で卒したとあり、天明八年（梅園六十六）十一月、爲次郎、村周年、佐野玄仙、兩子文平、海老屋壽助等發起となり、玄語贅語出版につき醸金の世話をしてゐる。

十棗湯ニてねり（後藤敏宏氏藏）

當時なつめ 無御座候間 御近邊醫家ニてもとのへ可被成候

一、十棗湯 散藥五貼 但五分入

夜半頃棗三ツ程土器にて茶わん一ツ程水入 半分程にせんし一時ニ一貼用候 尤口中惡敷藥ニ候へとも口中ニ滯不申候様ニ手はやにのみ込み 口中ニ散するをいとい候へは 十棗湯にてねり候て用候てもよく候 湯ハ皆のみ候に不及 勝手次第に御服可成候 用候ては手あしひへ不申 冬冷物服用候得は下り不申候 かゆをたへ候よく候 ミそ漬 香物梅干類口惡敷候は御用可被成候 瀉とまり候上ハ 御平生ニ含御用可被成候 もし下りかね候は 其上二三分ニても一服にても 御考御用可被成候 五分五度分と申候は 先

様子瀧ふみにて候 五分も過と思召候は 急に御減可被成候 或ハ吐 或瀉 或瀉ハかゆの
只管御用可成候

一、控涎丹 折節少々御座候有合候程進候 日々拾粒程夜寝付一度御用可成候 感白湯砂糖湯い
つれもよく候

一、せんやく 一日一服つゝ 常の通御用可成候

即日

安 貞

爲 次 郎 様

十棗湯散有合候間（後藤敏宏氏藏）

如仰此間ハ於手野寛候 得閑談大觀喜仕候 疾御歸宅被成候由拙者も追て歸山 扱々寒く覺申候
隨而今日藥取一人御遣被成候 相考御藥進し候 加入書御座候 一日一貼半御用可成候 十棗湯
散三々六分有合候間進し候 棗貳拾五進候 大かた此位可然候 過候へは藥力ぬるく相成候 御
考可被下候

扱控涎丹 白芥子 甘遂 芫花 和と申すは甚あしく候 くらと御申遣可被成候 右三味等分細末ヲ蜜にて練生、藥湯ハ〇〇一

日一々位兩度ニ御用可成候 先右の通御座候 御大人様猶皆々様ニ可然奉願候 御事前御繁用奉

察候 萬々重而可申承候 恐惶謹言

二月廿三日

小原爲次郎様

三浦安定

玄贅上木料彼はお世話 (後藤敏宏氏藏)

尙々此間の御返書慥に落手仕候

一筆啓上仕候 寒冷之節御平安被成御座珍重奉存候 拙同邊に御座候 御安慮可被下候 然此間承候處、玄贅上木料彼是とお世話被下事相調候由存外之御深切 修令も一同難得。盡 辱奉存候 歳末無人乍略儀 以書狀如此御座候 不腆 (不腆は輕少の意) の至候へ共 鯉魚二口歳末の御祝儀進上〇仕候 御受納候は辱奉存候 尙御家殿様始皆々様へ宜敷奉願候 折角御仕舞御超歳可被成候

十二月廿日

恐惶謹言

小原爲次郎様

三浦安定

左右

大人御不快公私引受

客歳ハ御懇書誠 接紫宇候誠久敷御大人様にも御不快 公私御引受 御心遣奉察候 左候得者此邊迄御踰山も可被下候 兼て御存寄の艶陽の春にも趣候へは 何事も得閑暇申承候 可然御兩親にも御寄聲申上度候 以上

即日

安貞

後藤爲次郎様

早速御悔可申上處 (後藤敏宏氏藏)

御掌珠時行にて終イ御死去被成候段 御歎奉察候 早速御悔可申上處 此内故障 乍延引如此御座候 御令内様にも可然奉願候 恐惶謹言

八月十四日

三浦安定

小原爲次郎様

山家の義庵末の至 (松本峯吉氏藏)

秋冷御壯健奉察候 誠先頃は遠方御入來被下忝奉存候 爾來彼是御禮不申上失禮仕候 山家の義庵末の至遺憾奉存候 爾來藥化此間照恩寺より始て承御無聊奉察候 折角御加餐御兩親様にも御宿付の段様々にと奉存候 類子(類子とは先生の次女也)も段々快く相覺候御念懸被下間敷候 恐惶謹言
九月十二日
三 浦 安 鼎
小 原 爲 次 郎 様

遠方之處御芳尋 (横手、利行歸吉氏藏)

此間は遠方之處御芳尋被下候 接紫眉積鬱を散 忝奉存候 定而薄暮吉弘迄ハ御歸被成候半奉存候 爾來無御障御入可被成候 其節御約束仕候 指上候御用御覽可被成候 用様別紙指上候 猶御老人様奉初皆々様へ宜敷奉願候 恐惶謹言

十月二日
三 浦 安 貞 (花押)
小 原 爲 二 郎 様

石碑早春相認 (後藤敏安氏藏)

貴書忝相讀仕候 如仰嚴寒之時候 益御清福被成御座候由 珍重の御儀奉存候 然爲歳末御祝儀御肴料一封御惠投被下不淺忝拜納仕候 且又御石碑早春迄相認候様 被仰付奉承知候 清書紙入手仕候 萬々來陽目出度可申述候 恐惶謹言

十二月廿六日
三 浦 修 齡
小 原 彌 助 様

*彌助とは爲次郎の別名なり、小原は矢張村苗字歟。以下五通は長男修齡の書簡であるが、猶次男玄龜の書簡等も參考として併録することにした。

先日は始而參上 (後藤敏安氏藏)

尙々拙弟も宜敷申上度申出候
一筆啓上仕候 寒氣御康寧可被成御座 珍重の御儀奉存候 先日は始而參上御丁寧御馳走被成下不淺忝奉存候 小生無恙歸宅仕候乍憚御安慮可被下候 乍筆末御同苗様始皆々様可然可被仰下候 先御禮得貴意度如此候

霜月十八日、

小原彌助様

三

浦

修

齡

黄(花押)

三四

爲「歳末」御祝儀

(後藤敏宏氏藏)

貴墨忝拜見仕候 如諭月迫嚴寒之候 益御清福被成 珍重奉存候 山中無恙消光陰候 乍憚御安情可被下候 爲歳末御祝儀一封御惠投 不淺品拜受候 時分柄公私御取込之段奉推察候 將又御令息様久々御風邪御勝不被成 御勞心奉察候 今日ハ遠方御來訪忝奉存候 御様子も相伺候様被仰下承知仕候 今日甚取込不能縷々草々奉復如此御座候 恐惶謹言

十二月廿日

三

浦

修

齡

小原彌助様

後藤鋳之助宛

城之助様御藥調進

(後藤敏宏氏藏)

昨日者 得貴意大慶奉存候 彌御平善可被成御入 珍重奉存候 御丁寧御馳走被成下不淺義奉存候 然ハ城之助様御藥調進仕候 一日二貼宛御用可被成候、又々其内御左右可承候 御同苗様御在宿も難斗 別書指上不申 乍慮外宜敷奉願候 右可得貴意草々如此御座候 恐惶謹言

三月廿八日

三

浦

修

齡

後藤鋳之助様

先時は逗留

(後藤敏宏氏藏)

雲簡相誦如諭殘暑却甚敷御座候處 益御健康被成御座候由 奉珍重候 先時は逗留御丁寧被成下

忝奉存候 然ハ御母堂様先御同邊御入被成候由 秋暑折角御調護可被成候 小子も大黒屋病用ニ
而昨日も田深迄罷越候 今朝早々歸山候此節ハ指急候段 御尋不申上候 乍筆未皆々様可然御致
聲可被下候 右貴答如此御座候 恐惶謹言

七月五日

三 浦 修 齡

後 藤 鍊 之 助 様

御母堂御藥調進 (後藤敏宏氏藏)

過日ハ寛々逗留候て御丁寧被成下忝奉存候 昨夜四ッ前歸宅仕候 乍慮外御安憶可被下候 然ハ
御母堂様御藥相考調進仕候 御服用可被成候 御同苗様御歸宅の上可然奉願候 其外皆々様宜敷
御傳意奉願候 右得貴意度早々如此御座候 恐惶謹言

六月十六日

三 浦 修 齡

後 藤 哲 之 介 様

荒卷繼藏宛

年尾の挨拶 (田川三郎氏藏)

貴書拜見仕候 月迫寒氣御壯健御入被成珍重の御儀奉存候 敝方無異議罷過候 然ニ年尾の御挨拶
御使金子一封拾五匁被懸貴意忝受納仕候 來陽萬々可申承候 御平安御齡年可被成候

恐惶謹言

極月廿日

三 浦 安 貞 晋

荒卷繼藏様

* 安永七年荒卷氏の爲、養生訓を書いたとあり、荒卷氏は杵築の豪家とある。

河下玄意宛

年尾御祝儀として (河下捨吉氏藏)

尙々愚息(愚息とは修齡先生也)も宜敷申上候 已上

於御慶 海内一様申納候 貴家御平安御超歳被成珍重奉存候 拙無異ニ迎春候 殊ニ客臘之御信
書昨相達 年内御平安之御様子悉之 慰悦仕候 年尾爲御祝儀種々重寶之品共被送下 猶藥料
一封被懸御心頭忝祝納仕候 乍略儀任御心安一緒御禮申述候 春來緩々可申伸候 恐惶謹言

正月 四日

三 浦 安 定 晋

河下玄意様

河下秀益様

・河下氏も、其御具、



宗壽始めて河下氏と稱し、代々別府にて醫を業とし、世良氏の後歷代世良と稱せしが如し、此には便宜、城隴、玄意、世良、秀益の宛名を一括して併列することにした。

拜納忝存候 (河下清氏藏)

覺

一、毛 緬 壹 端

一、草 履 愚 妻 へ

一、半 紙 修 令 へ (修齡、黃鶴)

一、御元結 長 女 へ (菊)

一、同 末 女 へ (類子)

一、玄墨 龜兒へ（玄龜）

右之通 懸貴意 不淺爲拜納忝存候 已上 三 浦 安 貞 晋

極月卅日

河下玄意樣

爲ニ歲抄ニ御祝儀（河下清氏藏）

尙々くれ／＼も御禮宜敷申上候 御親父様にも可然奉願候 已上

御狀忝致拜見候 嚴寒偏御清福被成御暮珍重奉存候 手前無恙罷在候 御安慮可被下候 然者爲
歲抄之御祝儀目錄之通被贈下不淺受納候 寒氣之節折角御安健可被成御越年候 來陽日出度可申
述候 恐惶謹言

十二月晦日 三 浦 安 貞 晋

河下秀益樣

年尾御祝儀（河下清氏藏）

覺

一、木綿布 壹端

一、奈良草履 妻へ

一、墨 修令へ

一、足袋 龜兒へ

一、水引 菊へ

一、同 類子へ

右從河下玄意老 年尾御祝被下忝幾久敷致祝納候 御序之節可然御禮御申達可被下候 以上

極月廿七日 三 浦 安 貞

善助樣

御悔として遠方（河下清氏藏）

一筆致啓上候 向暑之節彌御安全被成御凌珍重奉存候 然ニ先達而不幸之節ハ 爲御悔遠方之處

御出被下忝奉存候 其以後右御挨拶書差出申候相達候や 此節幸便ニ付御様子承度旁如此御座候

恐惶謹言

五月廿五日

三 浦 主 齡

黃 鶴

河 下 玄 意 様

同 世 良 様

見 事 の 薯 蕷イモ (河下清氏藏)

尙々御家内様可然御傳言奉願候 自此も宜敷申上度申出候 已上

拜書如仰新禱目出度申納候 御渾家御清福被成御超年候由奉賀候 弊境無恙致加年候 然者不存

寄見事之薯蕷一連被送下忝儀受納候 右御禮答申述度如此御座候 恐惶謹言

二月十一日

三 浦 主 鈴

河 下 世 良 様

*此の二通も修齡先生の書簡であるが、河下家との關係を知るべく挿入す。修を主とも齡を鈴ともある。

牢を抜け逃去候者 (河下清氏藏)

以別紙得貴意候 然者御聞及も可有御座候 其御地多吉と申 盜賊去冬已來當所入牢罷在候處

今月十七日夜牢抜いたし 逃去候 御地之方ニ忍居候趣 内々取沙汰承及候 當所より段々尋之

者差出候へとも 他所之儀 詮義行届キ不申 千一貴君御兩所の御聞及之儀ハ無之候哉 若御聞

及候儀も御座候はゞ 内々爲御知被下候様奉願候 委細ハ此者より御聞可被下候

一、此者當所之者ニ御座候へ共 當所の者と申候ては人之疑も可有之 高田の者と申 先年貴君

富永ニ而心易く致候ニ付 此度用事之序ニ御尋申上候と申體ニ爲致候 此儀御承知可被下候 右

御願申上度如此御座候 此書中 早々御覽之上 御火中可被下候 以上

三 浦 安 鼎

河 下 玄 意 様

陰陽逼晦朔候 (河下清氏藏)

陰陽逼晦朔候 德門御清健 唱南山候 就ハ先日有合之儘 蹲鴟ハ苞 懸御目候處 御謝辭之勞

御勞筆之段憚入候 萬ハ期烟霞之春 當暮之御感傷不常奉存候 頓首謹言

臘季 六日

四四

三 浦 安 定 晋

御菓子御惠投 (河下清氏藏)

貴札致拜見候 彌御安全被成御凌珍重奉存候 然如御聞及舊冬ハ拙女長病之處 養生不相叶致落
命殘念奉存候 今日不存寄御菓子壹袋御惠投被下御深志忝奉存候 右貴答如是御座候

恐惶謹言

五月三日

三 浦 主 齡 (黃鶴)

河下世良様

看板甚不出來 (河下清氏藏)

御別書拜見 然ハ油布院墓銘文之儀被仰下 則相認申候 草々執筆甚不出來ニ御座候へ共 取込
中不及改書候 先様宜敷奉願候 尙又御菓子料 壹封先様より御惠贈被下忝致受納候 可然御禮
奉願候

一、賣藥看板甚不出來御座候 花の字大ク相成不恰好ニ御座候 當所も寡君明日ハ乗船ニ付甚混
雜中 萬端草卒御用拾可被下候 已上

五月二日

世良様

脇先生の河下宛 (河下清氏藏)

——参考として——

御紙面拜見仕候 先以て頃日ハ遠境態々御越被下殊御逗留千萬忝奉存候 御障なく御歸着目出度
奉存候 然ハ繪本御返し被下被入御意候御儀 取亂し御座候故入ませ申ことおかしく奉存候 家
内ニ御傳筆申述候 何分宜御禮申上度候 已上

七月卅日

和 喜 義 一 郎 (脇和喜とか
く先生の高弟)

河下城隍 (世良を城隍とも
青龍ともあり) 様

御 報

大年の河下宛 (其二) (河下清氏藏)

—参考として—

秋冷御清福 被成御渡 珍重奉存候 日外御噂之堂名 稍々此度指上候 左之通御覽可被成候

九月二日

頓首

河下世良様

三浦大年 (大年は先生の次男) 玄龜の事である

奚疑堂

大年の河下宛 (其二) (河下清氏藏)

—参考として—

昨日は御出被下 忝奉存候 然者二日御指闊無御座候得者 夕飯指出申度候 御來話可被下候

晦

世良様

大年

喜助宛

かやのくわん一さがり分御見せ (河下清氏藏)

一、地布さらし 四尺八寸 是又御たのみ申候

右代銀 おひ銀、候は祭之節 進可申候 已上

即日

安貞

喜介様

一、かやのくわん 井かぎ 御座候は 一さがり分御見せ可被下候 是はまつりの時にてもよく御座候

周益殿書物代 (河下清氏藏)

正銀四匁五分

右 周益(周益は秀益氏なり)殿 書物代御世話御頼申入候 尤正銀被下度候 已上

極月廿四日

喜介様

三 浦 安 貞

五郎右衛門宛

每度御道具御無心 (河下清氏藏)

每度御道具御無心申忝奉存候 即

一、盃 二箱 組數四

一、朱吸物椀 一箱 但十人前數二十

一、銚 子 二 組ニそひ

右之通御受取可被下候 以上

卯月十五日

五郎右衛門 (夫人ノ父寺島五郎様 右衛門洞雲の事?)

安 鼎

田坂宗三郎宛

美酒御投與被下 (杵築、田坂氏藏)

御手昏相見仕候 如命 鬱陶敷天氣ニ御座候處 彌御清適被遊御座 珍重奉賀候 然ハ先般御婚
 姻御整被成候ニ付 私出勤中に御座候へは御招可被下之處 引込中ニ付美酒御投與被下候趣 御
 厚志難有奉謝候 召立右様之御配意決而御無用之御事に奉存候 快方之上參堂承り御禮可申上候
 右貴答可得御意如此御座候 以上

三月十二日

三浦主 齡

田坂宗三郎様 貴答

* 田坂宗三郎、名は延世、杵築藩に仕へ、御舟奉行たりしと。

覺書一通進之候 (杵築、田坂氏藏)

爾來御遠々敷罷過候 彌御清福御凌被成奉賀候 然者一件之義 覺書一通進之候 兩社如御承知
 にはり紙致進候間銘々御印形被成 其上奥書の案紙相添候此通候 奥書御認八ヶ村之御役人御連
 印被下 御返しも〇〇候得は其上は拙と參候節は對面はかり一夜にて事濟候 もし此印形出來不
 申候へは 參候ても 無詮義ニ御座候 因而 庄屋衆連印御成就之上 御分地より此方へ御届可
 被下候 左候は何卒今月中 天氣好時分參上 皆々へ可致對面候 御印形之上ハ御指間之方は御
 出席無御座候ても相濟申事に御座候 杵築表は淺井氏歸國之上申達候 取はからひ可申候 左様
 思召可被下候 此印形の御返事ハ其内奉待候 恐惶謹言

卯月 八日

三浦 晋

尚々書付二枚さし上申候 若已後之爲御扣御入候は御扣に被成候

* 宛名はないが田坂氏宛なり。

脇儀 一郎 宛

詩情不凡、長進奉期候 (日出、武内勢平氏藏)

先月廿七日の鴻書落凡上謹而悉。近候。欣慰此事に御座候。誠先達は御不幸御憂念奉存候。御加餐奉祈候。安節よりも宜敷御禮申上候。

一、詩文御暗投拜見仕候。兼而御出格思設候(切)。猶又詩情不凡處々發露御長進奉期候。御文章立意甚高。御平生の蘊蓄相像。慕高風候。存寄申進候様被仰聞候へとも。中々愚評申出候様の義不奉存候。復將の字随分わかる間布候。唯不知申。盈伯の人物與此文相當否。豐中以學而興者望之於足下御努力。若殘喘得引于世者見大成可申候。

一、鳩巢集無御座候。此方角ニハ何方にも御座有間敷候。

一、神主御尤の思召。御座候。拙兼而存候は今實ニ位牌を要するの地ハ菩提所祭御なし候へ共

候。上の法下之に従ひ候は。下たるもの、禮に御座候。且當時門盛なるものも。又衰るもの。是によつて。位牌を寺に托し。化者の諡號俗名日月。寺の思錄にしろして不朽につたへ候は。叔世にはよき物に候。葬祭浮屠ニよりし事禮に候得ハ可然候。位牌神主別々御座候へ共。大概ひとしき物に候。神主の制。徂徠は。其主牌宜布由申候。是も可然候。文公家禮の式たりとも。表面法諱相用候事必可然奉存候。足下も鸞門と覺申候。此方角鸞門神主墓表を許さず候事は甚苦々敷覺申候。府君の字未相考不申候得ハ甚輕卒に御座候得共。無爵ニも通し可申存罷在候。猶御考可成候。一、函苞港所據存不申候。御在所を冠の岸と承候。享保の末。安岐を自古紅葉浦と申。高田川を桂川と申類。所據不明候へ共。人々皆存候上ハ。詩文苦かるましく候。府内を隆國府と申候も此類ニヤ。久敷尋候へ共分り不申。御聞出し被成候者御しらせ可被下候。

一、鄙生義寡君眷顧不堪赧然候。御紙面痛入奉存候。誠寡君豪傑にして君子才德兼備。大に歡喜仕候。

一、愚息義初夏便船有之。天地ニ宿癖有之候故。麻田剛立子へ爲質問暫指遣候處。先月廿一日無恙歸省仕候。於天文地理麻田氏只皇和の壹人と申候ても事たらず覺申候。

一、拙著詩轍成就仕候付。誠無用の長物ニは御座候へとも。頃日君祚君へ托進上仕候。もはや時

分柄ニ候へは障子御繕の爲にも相成可申候一呵

一、御詩文稿御所望仕度留置申候 猶近々可申承候 恐々謹言

十月 既 望

三 浦 安 鼎 晋

脇 儀 一 郎 様

* 脇儀一郎、蘭室、二十二歳で入門し、二十六歳の時梅園先生は歿したのであるから、此狀は天明七八年の頃である。

豚兒不幸、相應の者差置度候 (武内勢平氏藏)

寒候益御清康可被御凌珍重奉存候 劣生眠食依舊候 然者先達而ハ御投書早々拜答可仕之處 多
間遲慢。失敬罷過候 且御寄款之佳什感佩縋襲仕候 此節御近地迄得幸便候 延引拜謝如是御座候
一、來春より賢胤哲吉君熊藩御遊學之思召之由傳承仕候 重疊御決定の儀ニ御座候哉 自弊藩一
書生遊學の志ニ御座候得共遠國不案内之子に御座候 若賢胤御遊學被成候は、彼地へ御同伴被成
下儀ハ相叶申間敷哉 大概期日被仰付候は、其用意可仕候 左様相成候は、彼表の儀都合宜可有
御座大幸之至ニ御座候

一、劣生儀御存知之通常春豚兒不幸之段 嗣續之義も不貪着ニ過候 格別差急候儀にも無御座候

得共 相應の者も有之候へは 養置度奉存候 御門牛の中猶御近邊思召付之者有之間敷哉 門地難
資之義。毛頭無御座候 毛利泰元方ニも男子多有之由如何之生稟ニ御座候哉 其外何分御心附之儀
も御座候は偏奉願候 急便早々如此御座候 窮陰御康寧御超年可被成候 萬期春來候 恐惶謹言

十一月十七日

三 浦 主 齡

脇 儀 一 郎 様

亡父碑銘之義御請被下バ (武内勢平氏藏)

亡父終焉之節 碑銘之義 中井兩先生之中 何レニテモ相頼候テ 相調候様遺命仕候 尤賢兄御
從遊之儀ニ候得ハ 御憑申候テ可宜ト申置候 乍御面倒御請被下候ハ誠以可含笑於地下 千
一許容有之候ハバ 早速以草稿賢兄マテ可得貴意候 僕モ嘗テ得識荆候得共 不若賢
兄之親炙候 以參御頼申上度候得共 制中態ト相扣候

御病翁近況如何御勞心相察候 僕失恃已來 心胸鬱陶殊來賓酬酢旁大ニ失意罷在候 恨寒郷不
能得益友如貴兄者相切磋殊益悵悵耳 賢兄實天賦之英才 豈僕輩之所企及哉 往執
手耳於翰墨之場者又皆屬望於足下在吾儕 將依頼不堪景慕之情 頃聞有微恙 願加
省察 萬期後鴻 頓首

五六

黃鶴

* 識荊は初て人に面會すること、
二 識^ヒ韓荊州^ニに出づ。失恃は母の逝去をいふ。母の死は年表參照。酬酢は主客互に酒を酌みかはすこと。

野詩一首呈覽
(出田新氏藏)

— 參考として —

早春辱貴翰候處　追々御歸國の思召と承候故不修復書候　頃日幸便ニ傳承候は　當年ハ御上京御逗留被成候由御篤志敬服不堪欣羨候　奉寄野詩一首　甚拙惡ニ候得共　呈覽仕候　祖母老病頃日已來益劇　不遑淨寫草稿ニ而差上候失敬の段御海容奉希候　萬他日寛々又申上候　頓首

四月十日

和喜儀一郎

三浦修齡様

尙々御近著如何御遠寄奉侍候
已上

* 脇儀一郎、名長之、字千善、愚山又蘭室と號し小浦の人。愚山年二十一、肥後に遊び蘆孤山の門に入つた。其翌天明五年去つて道を丹山の三浦梅園に問うた。梅園出迎へ禮接していふ、愚拙も此の山中に在つては學者であるが、世間に

[illegible]

* 答脇子善「晋 飲苴溪之水」 耕苴山之田 優游遂生 無一長技之以獻人 足下以犬馬之齒不棄之 數致存問 實不敢當 足下姑舍舊典之所說 先達之所論 反觀合一 取徵於天地 條理怡然氷釋 則知世之悶悶者之實悶悶焉……所請之題 別錄呈之 自麻田剛立之許至 彼固無探 龍頤之手 唯望驪珠之所藏光芒熒熒立衝天而還」とあり、脇子善に天玄の理を究めん事を勧めてゐる。然し子善の從學久しからずして、梅園先生歿したので、天玄の理を究める隙もなかつた。

三浦修齡宛
永松壽助

廣島よりの書狀落手 (日出、出田氏藏)

尙々此節ハ甚とりこみ剛立先生の書は〇〇候 此間地圖御返被下慥落手仕候 今般被召罷出
甚とり込御返書ハ罷歸候上可申上候 世倅等參上彼是御世話罷成候段 先よろしく御申置可給
候 已上

本月二日廣島よりの書狀落手 御兩人御平安 二日の晚廣島出帆の御定と もはやとく大坂御着
始而繁昌の地御覽御樂致察候 此表拙宅兩子安岐佐野其外何かたも不替罷在候 御念慮有之
間敷候 次第暑にも赴候 客土は水土姓となれ不申候へば 飲食の類みたりにほしむまゝに用
ひず 暑にも相成候て濁り候得バ 不覺水過 又は瓜西瓜類ニても過候間よく念を入れもし
外かたへ參り御馳走等有之候とも、に満腹にいたらざる様かねて腸胃に和し不申候

物用不申候様 千一の事に御座候 偕今頃は京師にも御出候半かとも存候 何卒玄遺兄大坂卜向
候へかしと存候 如何御座候や 御對面有之とて何分可然御致意頼入候

一、老拙今月十日御城下へ罷出今以致逗留 此邊親類平安大坂便承知候間 御左右申入候 於御
地麻田氏(麻田剛立)興津(興津公錫)加藤(加藤周平)皆々可然御申可被下候 定而いつれにも御世話に罷成可
申候 佐田屋にも御逢候や 是又同然に御申可被下候

一、家庭指南(家庭指南は其師綾部安正の遺編である)彫刻大かた出來候様ニ承 定而追々下り可申候 板殊の外見事成
風聞承候

一、詩轍も追々に仕立出來可申候 今頃豊前より木付へ紙未出不申候 さてに遅々の事に御座
候

一、拙義病用親類等城下に罷出べく 左候は御沙汰可申上候 大原左五右衛門殿へ御進有之 此
段小串氏より申來十日出府 十一日御逢有之難有仕合奉存候 尤翌十二日も被召 御物かたり共
有之候 未御暇は不被仰出候 いつれ永逗留の運氣とは相ミへ不申候 近々歸山可致候 猶委敷
別紙申入候

一、廣島にて 香川氏へ御對面の由 委敷御紙面御一興大坂にて人物の周旋可有之候 御歸家の
由澤山に面白義とも御たくはへ 家産ニ被致候は此上も有之間敷候

一、古物店にて よきなつめ有之候は

御求候てはいかか

六〇
てりわる今の器にては 暑中いた

み可申かと氣にかゝり申候 豊前上田にて目薬を入候 年の内に掘り込 ^{フダ}口をばつちりに致候

重寶に御座候 もし御見あたり價廉に候は御求も可然 やくま事猶かさねて可申述候 恐惶不悉

五月十三日

三 浦 修 齡 殿

三 浦 安 定

永 松 壽 助 様

幸藏彌右衛門參宮ニ付啓上 (中島末吉氏藏)

幸藏 彌右衛門 參宮ニ付致啓上候

此邊今以霪雨

宿に居候へ共給にて宣布御座候

此表相替

義無之候 細書忠右衛門殿に話候 違ニ而傳語も致度

今市迄參り候へ共 間違違取申候

一、詩轍紙上り候分ハ 本追々出來候哉待入候 跡々紙案れ 込^コり申候 夫ともに有無之處承り

追て可申進候 可然御文面頼入候 先書にも申進候 詩轍の様子如何 ちと元銀の助にも相成可

申歟承度候 紙間違の事彌右衛門にも 有増^{アラマシ} 申聞度候

一、何方にも 貴殿等御世話に相成候趣可然御申頼入候

一、田根付は仕舞候へ共 畑は少々相殘候

一、天地訓一通書立候 麻田先生へ御正し 不^ニ宜敷處はとくと御聞 御申遣被下度候 追々人

地頼の内 日月篇清書出來可申候 出來次第遣候而 先生之意見承度候 兼而申上候通 日影ハ

陰散陽聚之天地 天地ハ氣散物結の天地ニ候 しかるに氣取之天地立候得ハ 中位を地しめ候程

に 日ハ己が處をわきに立ざるを得ず候 是故に一大圈の内 地正中に小圈をなし 日又側に一

小圈をなし候 地の小圈ハ天ノ大圈と極を同じ候へは 異論なく候 日の一小圈只扁圓鏡の如く

ニ候は 五星の行もそれにてすみ可申候 乍^レ去扁圓と申ものハ出來かたかるべく候 もし正圓

毬の如くに御座候は 此圓圈中小黃極なき事能はず候 圖二枚進候 先生思召御聞可被遣候 拙

意ハ是ニ極有之候へハ 大黃極と ほとんど別物たるべき歟 甲圖の如くなるべく候 もし是を黃

極ニ歸し候へハ 乙圖の如くにして 角形を得ず 轉し難かるべく候 且西轉致物ハ氣外にして

大なるもの彌急に下の小なる處 勢ゆるく候 東運致すものは 廣く大なる處勢ゆるく 近き所

勢急に御座候 是氣象反する處 然らざるを得ざる故に御座候 然れとも日月土木と 一ヶ／＼

に致候得ハ 路遠き所勢緩き筈 道の近き所早き筈に御座候 されとも黃道白道分明に 日月の

行とわかれ 且煙星で二萬年餘をもへ 一周致す事 經星と天運を會し候様に御座候

此處輕星の東行と 輕星天の東行と一に候や 別ニ候や とくと御正し可然候

いつれ日天と 東運同しからざる様に御座候 左候へは諸家東運之外 東行之氣あり候様に相見

コノ處ハ輕星ニテ
東行スル
此軸 甚 緩
コノ處日圈ノ黃極地ヲサル事近ク
東行早シ然レハコレヨリ下ノ軸ハ
メグルコト稍速シ

日天ノ黃極
此處ハ日圈ノ黃極
此軸ノ東行最モス
ミヤカ也
地

是ニ準し候へハ 日表の五星の小黃軸も 此理に歸し可申様ニ覺候 前ニ申通 象はかりに候へハ遠路ゆるく近路早かるべく候 軸を以て運する氣有之候へハ 其軸ニ節有之 輕星天の軸の節は 東行二萬年位に一旋し 日天圈の軸の節ハ 三百六十餘日一旋申候 月天圈の軸の節ハ二十七月に一旋する様に相見申候 黃道之輪軸一度ハ赤道と合し 一度ハ離れ候へハ 此軸はたとひ常〇てあつても 繋るものにもなく候 左候へは 日天圈に小黃軸有之候 其軸ニ節有之候や 御間被下度候

一、追々暑にも趣候 折角御兩所 御保護 水土にあたらす 拜天の事に御座候 御兩所ともに下戸にて御座候 少々宛は なれざる水土の地にては可然かとも存候
一、永松清藏西國より歸り 疫にて打臥候とも承候 如何御地疫邪行はれ候や もし左候は 雄黃鼻舌ニ御爲りなと 御なき御用心第一に御座候
一、氣むつかしく獨居を好候故 肌肉は常の通にて 内甚熱を相覺候 經脈の間に腐蝕すべき邪

可然事と存候

一、彌右衛門など盆後ニハ歸り可申候 其節又々委曲可承候
一、先書ニ御茶屋の記進候 其内 如與鷗鷺忘者 如與鹿豕遊者 とかへ申候 鹿豕と遊ハ 舜深山の中に遊ぶの時の話 孟子により候 松籟を天籟と直し申候 前に松籟と出候故に候 御内見ニ備見候 廿三四日頃出府可致候 始終は殿の思召とも承候
一、壽助殿に別紙不置候 一同に御覽可被下候 御留守居 今月廿一日 御宅御引取の筈ニ御座候 左様に思召候はとかく申内 最早四五十日にも及申様ニ相成候 いかゝ御稽古相應ニ出來候や 無御油斷御出精 故郷の錦と御待申入候 其内幸便次第 御様子承可申候 恐惶謹言

六月廿七日

三 浦 安 定 晋

三 浦 修 令 殿

永 松 壽 助 様

* 永松壽助は女婿 君尊又克孝と號して、安岐の人である。先生の長女菊を天明元年嫁がした。其時鉄漿訓を書いて與へたとある。然し菊女は文化二年四月五日、三十九歳で歿したといふ、其の夫壽助の弟克家は杵築の荒卷家から、篠と

大坂には學友剛立先生がゐる。此頃は藩公に召されたりして忙しい、返却の地圖は受取つた。返書は歸村の上にと、傳言してくれ。

てたものと同様のものかと推察してゐる。

判じの片断の熟語を羅列し

坂は京坂で醫術修業の爲めである事が分つた。

とあるから、五月初めに出て、九月には歸省したものであらう。

八坂彌一郎宛

六六

文献通考康熙字典等御願 (目名子太郎氏藏)

覺

一、廿一史 四百多位

綱鑑錄入の十七史にて御座候や 眞の廿一史ニ御座候や 兩様御書わけ被下度候
一、文献通考 四拾多位

文献通考纂にて御座有ましく候 眞の文献通考正編はかりに御座候や 正續文献通考にて御座候
や 是又品々の直段御書わけ被下度候

一、韓柳文、注本全部、御聞繕可被下候
一、康熙字典 八九十多位

一、明史 直段

右の通重疊奉願候 尤頼候日に至つては駄賃にて 取寄申候事にや 如何致方有之候や 代物拂
かた等御つもり等も替々候事にや、脇氏へ御相談可被下候

一、官用唐紙是は定而直段時々狂ひ申候 是又貳百枚直段當時にして どれ程に御座候や 御聞
可被下候 已上

卯月廿四日

三 浦 安 定

八坂彌一郎様

岡松數右衛門宛

御賢息御入來 (日名子太郎氏藏)

貴翰拜見仕候 辰下御平安 被成御座奉忝喜候 拙宅無異事罷暮候 御安意可被下候 然ハ今般
久々ニ而 御賢息御入來 暫御滯留可被成段承知仕候 御機遣被下間敷候 隨而兩所の御出產
白銀二封を忝方迄 被懸貴意忝奉存候 他文略 猶期後音 恐惶謹言

卯月六日

岡松數右衛門様

奉復

三浦安定晋

藤井元藏宛

御安泰御踰年 (中津、村上和三氏藏)

改年御慶無際限申納候 御安康御踰年可被成大悅奉存候 敝宅無異事加年仕候 右御祝詞申述度
如此御座候 尙期永日之時候 恐惶謹言

正月五日

三浦安貞晋

藤井元藏様

尙々皆々様ニ可然御祝詞奉願候 妻より御伺迄申上候 又五郎隨分無恙長敷罷在候 御機遣被
下間敷候 已上

キツカヒ

寺川英庵宛

鯉魚湯用方御示 (高田龜市氏藏)

御平安奉察候 手前病人先同道罷在候 然者鯉魚湯ニ水率用方御示可被下候 近日用見申度候
照し合せ申度 已上

八月十七日

三浦安貞

寺川英庵様

用事

聶尙恒字ハ久吾清江ノ人 (高田龜市氏藏)

清江久吾聶尙恒

清江ハ地名ト覺ソロ 當時一統志等之書不在欠檢出ソロ 萬姓統譜中ニモ 久吾之複姓ミヘ不申
同書一百二十四聶姓アリ 衛大夫食菜于聶因氏焉トアリ 望月三英の明醫小史ニハ久吾ヲ字ト有
レ之ソロ 字ノ書所チト味アル處ニゴサ候エトモ 是等モ例ノアル事ニテモ候半 小史聶氏ノ傳記
左聶尙恒 字久吾清江人 家世業儒 以經術登仕籍者 指不勝屈 而遞傳皆以杏林旌勝而醫學愈
玄 久吾究心於醫術數十年 博取而精研之 深思而透悟之 因病製方不膠千古方 得意應手不拘于
成說 所著有奇効醫述 話幼心法 註偽刊有醫學彙函 蓋後人依託也

鴻音到來御微恙にて (辻治六氏藏)

鴻音到來御微恙にて御勝不被遊候由 如何様御宿疾疥瘡爲外邪ニ聲援候故共ニ御座候半歟 折角
御保護可被成候

一、詩轍未成の書御座候へ共 御心安奉存候得は得後便進可申候

一、巴豆霜能止瀉事本綱ニも出候かと覺候 然ハ方止瀉か感應丸用 巴豆霜の能止瀉ニ巴豆霜瀉
の義ハ存不申候

一、小白帶鈎ヲ射候と覺候 折節史記も宿ニ無之候故 五車之韻端ニハ書付置候 猶それにて御
吟味可被下候 帶鈎と候へは 大帶なとかけ候鈎ニと被存候

一、三種の草此方定見決而無 荆芥野生覺不申候 先年 蒔候てはえ候を見候 久敷事故とくと
不覺候 香薷追々分り可申候 澤蘭存不申候 見當候は御尋可申候 薺○同前ニ御座候

一、一件別紙 御覽可被下候

一、敢語開卷之二字 草廬書入候由追て下り可申候

草廬敢語見候而 誤而 賞美にあひ 自分著書不苦候を見せ申度由申來候 任御心安御沙汰候
萬々申遣候 溫冷交至の候折角御保護可被成候 恐惶謹言

二月十六日

三 浦 安 貞

寺 川 英 菴、様

*草廬とは詩轍の敘を書いた彦根の前文學、伏見の人、詩轍の敘を書いたとき年七十とある。

池邊橋左衛門宛

門下屬文は弓柳二子ニ候 (今村孝次氏藏)

一、書附歸鴻候 華鳥之時節御吟興奉察候 野老無事故致送迎烏兎候

一、御詩稿拜見 此節之詩卷ハ大分新意ヲ覺 悅申候 折角御出精 此上はそろ／＼御讀書被成

其上之功ヲ以て被成候上者進一步ノ事に御座候 此節委曲子玉生へ申入候

一、詩轍御加文被成度旨 御文數次及展讀候 序喬文學草廬へ頼申候 跋文未相決不申候 門下

少く屬文にても相成候ハ 弓柳二子に而御座候 惣中の相談次第ニ相成可申 拙一存ニ難決候

惣中柳生を推候得共 柳生達而辭退申候 弓生ハ當時不愼 當地へも參得不申候得者 難申候

惣中何れ柳生を推申候 足下の御文章いつれ小文之御仕立ニ相見へ申候 畢竟寫工ヲ記し取候様

ニ相ミへ申候 詩轍尾へ附言被成候も可然かに候 此節点檢御返し可申候得共 思召之通ニ上ヲ

換ズニ被成度様にも 御紙面相見へ申候 乍去筆削ちと不相加候而者 如何に御座候 思召之處
得と承候上者 愚存御心に相叶候者 取はからひ可申候 因て此節指扣申候 若大文御望も御座
候は、 子細附子玉生口頭ニ御聞可被下候

一、修令も當時中津へ致遊學候 來月末罷歸可申候 任御心安 御沙汰申候 恐惶謹言

二月廿八日

池邊橋左衛門様

三 浦 安 貞 晋

從弟豐田禎藏御方角へ (今村氏寫本)

坂子玉歸省乍返書走筆候 春寒猶盛に候 庭圍始御清安御凌可被成奉珍重候 拙無恙擁衾候

一、御肴相達忝致賞玩候

一、御作 面白承候 此節及還璧候

一、御認被成候を見候に 誠ニ御墮入候段 御尤奉存候 打より見事に出來候由申事に御座候

此上御出精可被下候 小串柳藤三生へ宜敷可申達候

一、拙妻從弟豐田禎藏と申者 近來浪人無據當時姫島へ遣申候 此仁至而手かたく 少々四書五

經素讀等御覺申候 小料理も成申候 武家邊之義も一通心得居候 少々療治仕候 何卒御方角御

世話に思召被下候様成義者出來申間敷候哉 委曲子玉可申仲候 急候義者無御座候 宜敷御可
被下候 御親父様にも御物語可被下候 恐惶謹言

閏巳 極月十九日

三 浦 安 鼎 晋 拜

池邊橋左衛門様

乍無禮雌黃相加候 (今村孝次氏藏)

無_レ程碧雞報_レ春 每物新に覺候 御平安御踰年被成奉賀候 拙老無異事 經_ニ霜雪_一迎_ニ烟霞_一候
且客冬念日之貴札 昨夜落手 舊臘之起居悉之候 爲御饒歲黑頭〇二十枝を御嘉祝 文房之幽事
相揮可_レ申忝樂申候 御作造を宜敷承候 乍無禮雌黃相加候 是にても可然候者 其内御投被下
度候 其已前の御狀返書はとく指出候 誰家船公喬者江に流し候覽無覺束候 詩轍も冬中絶_消
成就又一兩月をのべ候半と_奉存候 拙詩稿も當年上木を心かけ候者有之候 大かたハ左様に相
成可申候 下しらべ共仕候 萬々不能腐毫候 恐惶謹言

正月三日

三 浦 安 定

此地逗留も御聽達 (今村孝次氏藏)

十四日之御投書 今夜於燈下入手 十一日夜に入御無變御還家被成候段承知 御渾家御平安此地御逗留之趣も 御家嚴様御聽達 御氣にも應候 御紙面於拙甚本意彼是安心仕候 誠御踰山數日御淹留久々にて 申承別而者一件御出精被下千萬忝奉存候 唯々御苦勞かけ候段恐入候事に御座候 以來拙も所々奔走御謝辭も不申述 失_ニ本意_一候段蒙御海容度候 詩轍も來正月には 点檢相濟可申候 最早壹遍ハ見被申候との事ニ御座候 拙老も 此内一通り見申候 見候へは所々添削も出來申候 とかく一通ハ拙子書不申候而者 叶申間敷候 其上ハ必々御頼可申上候 何卒此方春内に出來候へ者大事に而御座候 無覺束候 杵築より今以何事も何方よりも不申來候 工藤生ニ御逢被成候由 此生殊之外息長キ男ニ御座候 御序ニ御催促可被下候 自是も可申遣候

一、數通之御狀各相達申候

一、李仲和之義相心得申候

一、廉介生ニ一通用事申遣候 奉願候 其外之書狀是又同様奉願候

一、八坂生書狀參候得共早速隈本へ罷越 年内一盃ニ歸國 早春には見舞申との事ニ候故不及裁

復候 歸國之上何分可然奉頼候 且玄語被願候賃書一二卷出來可申候 料物ハ拙子取替置可申候間 此旨無御失念春之節者持參被致候様御申達可被下候

一、別紙不呈候 御兩親様御叔父様御令閨様へも何分宜敷御傳聲可被下候 醜妻も宜敷申上度旨申候 寒威折角御自愛可被成候 恐惶謹言

霜月三十日

三 浦 安 貞 晋

池邊橘左衛門様

秋月侯敢語御賞美 (大塚留吉氏藏)

華書拜閱冷氣稍相逼候へとも 御壯健御凌被成候由 欣慰無所加候 拙無恙催犬馬之年候

一、御願申候早速御調被下 紙數之物扱々忝 文字隨分鮮明 別而重寶可仕候 尙々入御念詩草等御うつし被下候由忝奉存候 乍去御願申程出來不申候 御出之節ともハ又々御願可申上候 且書物之義隨而被留置不苦候

一、豐田生より布二端 慥ニうけ取申候 宜敷御禮 猶一通奉願候

一、美忠書狀先達而進候 御落手と奉存候

一、玉英老より承候は 郡代所にて御講書も有之候由 自是も致歡喜候

一、筑前秋月侯敢語御覽御賞美政事有益之書

七八

申來候 且松平出羽守様家中萩野記内と申仁

右膝元ニ可存由 本日所持 平松俊貞子より傳語

申來候 京都草廬も當時玄語見候由 是ハ評ハ不承候 敢語見被申候而 書翰江戸より參候 結 交度由

侯京極備後守様より 御懇望ニて 被指上候由 玄庭主うつし歸國の處 峯山

上候 御他言ハ御斷申入候 此内又々被參物語可有御座候 任御心御沙汰申

一、皆々様へ宜敷奉願候 恐惶謹言

十月十三日

池部吉左衛門様

三 浦 安 貞

*僧玄庭は丹後の人、双山寺に寓し互に往復あり。「春夜憶庭公」「送僧玄庭還丹後天橋山」等の詩がある。

善次も俊藏も手前引取 (全集 八〇四頁)

善次も手前引取申候て城下へ醫業稽古罷出 俊藏も當暮引取申管御座候 乍去段々新門も有之候
故 不相替罷參候 富田生書物之義相心得候 折角御壯健御仕舞御踰年可被成候 來陽萬々可申
承候 皆々様へ何分可然奉賴候 恐惶謹言

極月十三日

池邊吉左衛門様

三 浦 安 貞

*池邊氏は當時鶴崎にて醫を業とす。次に池邊氏に關する梅園作の詩を掲ぐ。

送池邊生還鶴崎

有客忽乘黃鶴歸 風烟遙指舊庭闌 相思千里命仙駕 又向雲山深處飛

小野昌庵宛

法則を天地にとり候へば (辛島二氏藏)

卯作生來訪ニ付御投書披緘候處 御起居御清健被成御座忝喜仕候 弊方無事故消光陰候 御
 繫念被下間敷候 然者學箴貴命難拒一二之鄙衷申述候處 御用拾之一ニも相成候様被仰下
 赦然慰怖懼之意候 鳩杖之義追々可申上候 今朝書狀數通檢出之暇ヲ不得候 且條理不被捨置
 御玩索被成候由 拙より開眼候得者 先達立言垂範之徒皆自立趣 これによつて馳驅し候様ニ見
 へ申候 天地條理ヲ以て法則ヲ被進候 自家より立る之法則ハなき事に候 法則ヲ天地にとり候
 得者 彝倫之道より百之技事ニ至候 而も天地に従へは自得其宜候 たとへは菽乳ヲ製し候に
 鹽鹵をさすかことく 不過非不足之節ハ天に候 たとへは吳藍ヲ以て紅ヲ染るに梅酢ヲ用ゐるこ
 とく 天之則不從候へば終になる事なく候 此方より趣を立候得ハ 天地之方を引付候様になり

申候 天地條理之誤らざる處をしりて 是により候事に御座候 とかく先達豪傑自爲趣而法則
 ヲ建立いたし候様ニ覺候 贅語中立準之篇ヲ書忝(忝はさんするを消 略したるにや) 申候 故ニ晋常ニ天ヲ師とし人
 を友とすると申候も しらざる人は晋を倨るといはん なれとも其實 天にあらざれば師となし
 がたく候 天則にかなふ事ヲ申候者皆天ト同敷 我師御座候 胡盧々々御自愛可被成候

恐惶謹言

十月廿日

三浦安貞晋

小野昌庵様

錦囊の珠玉御暗投 (辛島二氏藏)

華牘薰誦 寒威迫日肅候へ共 貴體御壯健 詞壇御遊戲 依舊候段 不堪大幸奉存候 如仰微軀
 暫爲造化小兒被惱 別界にも赴候哉と存候處 又引殘喘候仕合罷成候 乍去次第落魄御憐察可
 被下候

一、錦囊之珠玉御暗投 再四玩賞面白奉存候 愚存宇作生迄申入候 御者可被下候
 一、條理御工夫被成候へ共 於醫事御發見も無御座段 御尤奉存候 事物之境御者可被成候 兎

角醫事より國家之治亂等皆 氣之感應之間に有之 感應之體 鬼神不測 是又條理にて御座候
 是又御者可被下候 拙寓意も筑前南冥殊之外ニ喜條理も少々被釋候由 門生元龍罷歸相語申候
 一、愚息配偶[◎]之義 御祝詞忝奉存候 當夏見舞に參候を留置介抱爲仕申候 先安堵仕候 老懶^{ヲシ}與
 塵冗相兼草々裁復奉希御海容候 恐懼謹言

十月廿九日

小 野 昌 庵 様

三 浦 安 定 晋

* 先生の寓意の一篇の成つたのは、天明三年七月。柳元龍の筑前に遊んだのは、先生の「送柳元龍遊筑前序」で見ると、天明四年閏正月である。其の年元龍歸郷の際、龜井南冥の弟の疊榮といふが、梅園先生に寄する詩を携へて歸へり、先生も之に酬いた詩が、詩集にあるから、此の書簡も天明四年のものであらう。男黃鶴の妻帯したのも、此の年と見てよからう。

詩轍一部呈坐右 (辛島詞二氏藏)

華書從卯作生相達御平安之狀悉之 大慰鬱陶候 殘喘猶引于世候 御憐察可被下候 春にも成候
 者 南遊可致かの段忝奉存候 如何程ニ可有御座や 無覺束候 足下にも様子により御尋も可被
 下段 左候ハ心緒可申述候 御佳篇も御座候由 追々相見可仕候 詩轍成就仕候は一部呈坐右候

御覽可被下候 世忤も宿癖難已 故人麻田氏ニ暫遣置申候 九月下旬歸省仕候 條理も御進被成
 候由珍重奉存候 拙者も少々進申候と覺申候 贅語之内一二章門人等 上木之心懸にて脱稿仕候
 追々大阪迄指遣可申候 來年中にも出來候べしと存候 出來仕候者 懸御目候 贅語六七十篇
 之内纔二篇可笑事ニ御座候 人身之條理も少々相分り候事とも御座候 いつれ禿筆難申盡候 藩
 侯延見之義及御沙汰候 誠望外之義ニ御座候 乍去藩侯者格別之君にて追々雨露之化も及蒼生
 可申大樂申候 他事宇作生より御聞可被下候 恐々謹言

閏十月廿七日

三 浦 安 定

小 野 昌 庵 様

* 本書簡は杵築侯が延見せし事や、詩轍の脱成の事や、黃鶴の大阪遊學の事等がみえるので、天明六年のものであること明瞭である。

弓崎俊平宛

徂徠鈴録見申候 (神戸、田澤竹藏氏藏)

一、拙とも唯今 徂徠鈴録見申候 不案内成事故通しかね申候 此内へちと韻鏡見申候 少々得
益も有之候得とも とかく通し不申候 盆前故諸兄大かた引とり申候 四五人相殘少々静に御ざ
候

一、秀英も 講ハ堀美喜介 療治ハ山脇道策へ被參候由ニ御座候 美喜は造酒かとも存候得とも
彼方より美喜と書來り申候 其語ハ、すきと取出し不申候

一、周郎兄 孟子近日如何に候 御序どなたにも 可然奉願候 恐惶謹言

七月二日

三 浦 安 貞

弓崎俊平様

* 柳(柳元龍)弓(弓崎恕)と並び稱せられてゐた。矢野直(字雖愚、號下樂)が梅園三語の跋を書くべく稿を起した
が、僅に弱冠を過ぎ奄として歿した。弓崎其の志を繼ぎ、明和丁亥の年三語の跋を脱したとある。弓崎俊平については
梅園に次の如き詩がある。

送弓崎俊平

書難奈抱病身 不得存山雲水親 他日垂揚生左肘 隨風吹入後園春

綾部富坂宛

晋か所見四方の諸君子と合不申 (渡邊勘藏氏藏)

當代之豪傑學習一洗の功なきにはあらず候へども 甚不修邊幅其末流當今に至て相見候 當時の先生と稱する者 以道學而修行の人に目し放蕩を以て風流と稱す 故に今の青袍は其志行却て常人に不及唯白眼以接人 晋生質辭藻に拙く偶吟哦仕候も興あれば成し興なければ不作 自拙さを知るを以て四方の諸君子と抗衡の望なく候 先生に親炙不久候得とも道唯彝倫にあるの所深く服膺仕候 條理を取て天地を大觀するに於ては前に不見古人 此に於て竊竊乎として章句訓詁をあたむる事不能 是を以て晋自量るに晋か所見必す四方の諸君子と合申間敷候 今日世の晋を望むもの皆 晋か意に非候 是によつて晋竊に望を四方の諸君子にたち候 若同調の人御座候はば於御李車 (李車は誤意?) 而晋これを憚るものにあらず候 は無用の言に候得とも 彼書中に藤子の事な

ども見へ申候故 心事ちらと書し候 必や此意彼地へ御沙汰被下候事にては無御座候 鄙意又藤子にあらず候 望は四方の君子にたち居申候 辭藻に拙く訓詁にうとく經史に不通 是自しる處に候 榮利に走らず 自之分上に安じ候は 頗自得之境有之候 條理を取て 天地を大觀するにあつて 肩古人より卑さを不覺候 聊おもふ事有之吐露心情仕候 爲狂爲癡亦只從所見而已

即日

晋

富坂先生

几下

* 綾部富坂とは其の師綾部綱齋の長男、梅園より四歳の年長であつて、杵築藩に仕へ、天明二年九月三日六十二歳で歿してゐる。梅園常に先生と稱し兄事してゐた。此の書翰では大いに抱負識見を語つてゐる。また次に掲げた梅園の詩は兩者の交情を語るものであらう。

壽綾部富坂先生六十

不羈南指碧芙蓉 取入壽杯起獻公 末棹煙波泛湖上 別開天地笠壺中 梅花當宴偷春發 松樹覆庭與鶴同 無復絃歌入塵乎 似追陽鷺學仙翁

綾部佐太郎宛

綱齋詩文集最早出來 (磯矢康吉氏藏)

本月十八日 貴墨落几上 春蘭御健在候御様子 重々至祝珍重仕候 野老蠢然起臥仕候

一、佳作今以見出不申 恐入候 乍御苦勞今一應御書寫可被下候

一、此内子璞集今般先生御遺稿共又々御遣被下落手仕候 追々御調可申上候 原祭如何難決義ニ御座候 先生詩集文集ハ最早相仕申候 附録ニ取懸申候 北村可昌ノ復之先生墓誌有之候様相ミ

ヘ申候 此節ハミヘ不申候 是ハ大家之文章附録ニ入申度候

一、晋書追々指上可申候 暫相待可被下候 其節〇〇文集 有終先生之御遺墨一同ニ指上申積リニ御座候

一、追々御越山も可被下候段 折角奉待候

一、近作一首 懸御目候

一、寓意出版之後示レ人候處 一向如レ聲如レ啞 毀譽褒貶不レ承候 長崎龍洲和尚ニみせ候處 大稱揚ニあつかり申候 詩別懸御目候他期ニ嗣音ニ度候 母堂(母堂は富坂夫人也)様宜敷奉願候 恐惶頓首

季春廿七日

三 浦 安 鼎

綾部佐太郎様

家庭指南序清記差上 (滿洲、本庄完氏藏)

尙々公錫玄遷(公錫は豐津氏玄遷は佐野氏) 二子御索居學友も無御座當時御寂莫奉察候 乍去志さへ立候得者出

來候物ニ御座候 一倍精神御ふるひ 御發憤可被成千萬奉存候 已上

中節先生御行狀(中節行狀とは輔之の作父富坂の行狀記である) 拜見仕候故指上申候 已上

先頃者御入來被下久々接ニ紫宇ニ奉大悅候 公錫君最早御解纜可被成奉存候 且剛立公より御細書忝奉存候 如御便り御座候者先落手仕候段 御申達可被下候

一、家庭指南叙清書仕指上候 若誤處も御座候や 被附御氣可被下候 關防之印をし進申候 是者家庭指南序と申下ニ押申事に御座候 此儘にて御上し可被下候 板下出來之上 彼方にて押可申候 拙名字之印 手前に御座候者貞ノ字にて御座候 大坂加藤周貞に預け置候印御座候間 三

浦晋ノ印上 安鼎之印下に押候様御申遣可被下候 先用事のみ申上候 恐惶謹言

二月十四日

三 浦 安 定

綾部 佐太郎様

*綾部佐太郎、輔之、其の師綱齋令孫で、富坂の子、同杵築藩に仕へてゐた。綱齋詩文集は全く梅園の手により成つたものだが遂に上梓にならず、梅園全集刊行の際之を巻末に挿入してゐる。其の綱齋（即ち復之）の墓誌は北村可昌（伊兵衛と稱す）の作で、梅園全集八九四頁に出してある。文中有終遺墨とは、其の師綱齋の父、有終（諱道弘）の作品である。

*梅園は其の師綱齋の遺編、家庭指南等の上梓につき、頗る好意を以て、麻田剛立等と計り上梓が出来てゐる。興津公錫、諱は彝孝、綱齋先生の孫婿とあるから、富坂先生の女婿であらう。梅園先生の門人で、公錫の江戸に之くを送る文、公錫の平安に遊ぶを送るの文などで見ると、餘程信頼ある門人のやうである。

甲 原 幾 平 宛

漢字數四萬足らずあり候（末綱琢磨氏藏）

本立殿に承候得者 春霖之節御無變御暮被成候段奉賀候 拙者無恙消日申過候 御安心可被下候
正月之比は御祝書忝奉存候 自是は取紛御返事も不申述失禮罷過候 右申譯旁得御意度 如此御
座候 恐惶謹言

三月二日

三 浦 安 貞

甲 原 幾 平 様

尙々日本通用の字數御尋 日本の字は先いろは四十八字 其外和字と申もの昔は大分出來候と相
見候 今はとれほど御座候や不存候 杣畠ツマハタなと申類和字にて御座候 又俗字と申もの有之候 蟻シム

糲コウツなどの類にて御座候 此外漢字三萬餘 四萬不足ほと見へ申候 しかし急度極り候ものにて御座なく候 とかく世世にまし候方にて御座候 其外からにても 俗字と申すものも別段にありと見へ申候 其外は國々にて色々の字御座候 朝鮮の諺文天竺の悉曇各各其の國其の國の字さわりなき事と被存候

毛利泰元宛

灸書宜敷品不存候 (松本立馬氏藏)

本月七日之雁書落凡上 杏林御無變之様子承之慰悅無所加候 老子蠢然仍而添白髮候 夙志不被爲遂 御感慨之御紙面 世の中ハ俗物而已多候へ者 與御心事と被變候事共可有御座候 月に村雲花に風と古人も歎候事ニ御座候 只々何方ニても無御油斷御勤被成候へは出來可申候事に御座候

一、漫遊雜記之義之入御念候御義承知致候

一、灸治毎々御得効も御座候由致歡喜候 灸書宜敷品不存候 後藤家之 艾灸通説者御覽被成候半と奉存候

一、仲景者 古來立方之祖と推 無異論事ニ候得者 左可有御座候 管見ハ古今萬國平觀之上

たとひ仲景宜敷御座候迎 壹人ニ而某能盡し申さん事とも不存候 己以吉益子仲景已後之壹人と自負被成候も 十二方之瀉劑ハ仲景之外ニ多出候 彼方ニては仲景ノ意を得候へは方ハ自在と申様ニ承候 左候へは東垣家ハ東垣家より仲景之意を得て 立方と可申 其様も其意ニて 又〇訓と可被成候 此處ハとかく自得自信ニ御座候 拙法方ニうとく候へば 仲景方之義とかく論ヲ入候程之力ニ相成不申候 六陰六陽ヲ分候様なる處ハ 天地ニ正ニ合候事とも不存候 乍去是ハ未熟之論に候 賢哲に御問訊可然候 恐惶謹言

八月十三日

三 浦 安 貞 晋

毛利 泰 元 様

奉復

家老中根齋と申人の甥 (毛利莫氏藏)

只今家老中根齋と申人の甥にて御座候 足下の義被承及 何卒官途の志は有之間敷や 拙者へ承合せ呉候様にとの事にて御座候 尤醫家にては無御座候 當時困窮被致候へ共 君徳に於ては御聞及も可被成候 明哲慈惠之君に相違無之 行末はたのもしく奉存候 もし官途の望も御座候はば 御取持も可申候 此處は先よりも不申來候へ共御夫婦にても苦かるまし候や 其義不被存候

て申來候や 又又木付の義承可申候 いづれに相成候とも 御返事不_レ被_レ下候ては 拙者こまり候に付 兼々奉願候 已上

極月廿二日

三 浦 安 定

毛利 泰 元 様

* 毛利氏、毛利元就の弟元綱に出て、元綱の曾孫貞直豐後に來て歸農し、其の子孫代々醫を業としてゐた。太玄、又泰玄ともかき、弘綱の長子で字は可貞、當年の常行村、今の高田村で仁術を業として、格式は中小姓であつた。其の長子節齋(字樂甫)、次男到(字懷甫、號は空豪)は帆足龜井の門に學んでゐた。

加藤善五郎宛

忤方迄御惠投 (玉井頼光氏藏)

貴翰拜見段々御引立被成候得とも小。餘毒十分御快無之候段 折角御保護可被成 御親父様にも御成御同御在宿も不被成候趣 御苦勞奉存候 猶御病中ニ懸御意御使札殊年頭御賀儀兩種〇 忤方へ乾柿一連御惠投不淺受納仕候 外御樽並御肴御快氣御祝儀として 被送下被爲入御念候御事痛入奉存候 如何様其内得御意可申述候 右爲御禮如此御座候 恐惶謹言

二月 廿日

三 浦 安 貞 晋

加藤善五郎様

一樽御快復の印迄 (玉井頼光氏藏)

尙々御親父様別紙不呈之候 可然御傳可被下候 且御病中御遊事御斷申入候 已上此間ハ得御意珍重奉存候 彌御清復可被成奉察候 且乍輕少一樽御病氣御快復之印迄 致進呈之候 御受納希之候 恐惶謹言

正月 朔日

三 浦 安 貞 晋

加藤善五郎様

加藤周平宛

御小兒今以呻吟 (玉井頼光氏藏)

如噓渾家觸癰毒打臥 聽而及絶煙可申程之仕合 先ハ段々起立 小兒今以呻吟 追々快復致候へ
かしと存候 御勢候之中 御尋被下忝奉存候 御内様如何 御無難ニ御乗取被成候哉 折角御調
護可被成候 不備

九月廿五日

三 浦 安 貞

加藤周平様

見事之御肴 (玉井頼光氏藏)

一筆啓上仕候 彌御平被成御座 大慶奉存候 然者此間者 見事之御肴 被饋下忝賞玩仕候 右
御禮申上度如是御座候 恐惶謹言

五月十日

三 浦 安 貞 晋

無別事御勤 (玉井頼光氏藏)

尙々此内ハ御見舞忝奉存候 可然御申越可被下候 あまり、敷罷在候ものによ 見世にて
御用も濟申候故と奉存候 已上

愈無御別事 御勤可被成 奉珍重候 就者日外米之義御沙汰申候得とも 當年ハ無盡 右之相談
相止申候間 先御貪着ニ及不申候 追て又々御願申上度奉存候 已上

霜月七日

安 貞

小原隠居へ御届 (玉井頼光氏藏)

どふか近日御風邪之趣ニ御承申候 淺深如何何卒急御本復も被成候へかしと奉祈候 然者此壹封

小原隱居（小原隱居は後藤蓮平なり）ニ御届可被下候 尤便無御座候得ハ春に成候ても不苦候 外に色紙短冊夾板ニ二つ是ハ小原へ其内上置申度候 書狀ニハ此事不申〇〇御うけ取置來陽緩々御遣可被下候 折角御自重御踰年可被成候 早々同便如此御座候 已上

十二月廿九日

三 浦 安 貞

手 野 周 平（周平は手野村庄屋なりし）様、外ニつゝみ物一ツそひ玄庭主へ詩一本進候（矢野伸太郎氏藏）

愈御清福奉賀候 然者廣田生より手簡參候 相届申候 從彼詩轍上本隨分加力致度由 銀五百錢
 ほど可致と申來候 此旨各方へも申出而彌御出精被成候様にと申事ニ御座候 五百錢目と申事ニ
 而候半と被存候 左候得は餘程此節の助力と相成可申候
 一、御村貞平へ金子一角是ハ玖珠御家老吉澄右門殿よりの加力 右金子傍々添書即右門殿自筆ニ
 而御座候 是ハ彼仁面目成義と存候付進し候

一、玄庭主へ詩一本進候 御頼可被下候 もはや跡ニ成候者不苦候 已上

二月五日

三 浦 安 貞

手 野 周 平 様

御平安欣慰（賀來繁二郎氏藏）

尙々敬八殿にも可然奉願候 已上

拜見 御平安欣慰 誠疇昔過飲 乍例荷「厚意」候 併久振緩々握手不淺奉存候 一件彼方とも
 御物語候處 工面も可有之由 猶柳公山にも御出會被成度由 是ハ如何様とも可相成候 使及暮
 艸々申遣候 已上

十月五日

安 貞

周 平 様

作進之募縁之序（玉井頼光氏藏）

尙々〇〇語申候淨満寺門〇〇序進候 御覽可被成候 御返却ニ及不申候 已上
 疇昔夜來御過訪辱 乍去草々御歸去 不堪遺憾候 其節ニ作進之募縁之序の寫 懸御目候 不及
 御返却候 已上

七月廿三日

寸 々 武

子 睦 兄（周平の號？）

雨羽織傘進之候 (玉井頼光氏藏)

御藥致調進候 又々灸治等隨分可然候 已上

拜啓頃日者乍例投宿御世話被下忝奉存候 吉弘にも立寄候へ共 小雨之内及歸宅候

一、雨羽織傘二本 今日進之候 忝奉存候 雨羽織はほし候へ共霽無之候へば猶御ほし御直し可

被下候 手拭一條は敬八殿へ御返候 禮之段可被下候 さかひ重括り
細引一統返進

一、挾板之義修令へ申通之者入御意候御事ニ御座候

一、御令聞様へ〇〇御禮奉願候 已上

八月廿六日

三 浦 安 貞

加藤周貞卒し贅語上梓滞頓 (賀來繁二郎氏藏)

昨日は貴書忝拜誦 如喻春事爛珊(爛珊は
爛葉) 益御清福被成御起居候由珍重奉存候 小生先達鶴崎行

無恙歸山仕候 贅語校定五冊出來仕候處 然處大坂加藤周貞物故申候段承申候 甚當惑仕候 右

訃音北浦鍵屋にて承候故 歸路綾部顯藏(綾部顯藏とは佐
太郎の事なり)殿 懸御目一左候儀序に御嘶申候處 御藏

屋敷淺野重兵衛へ頼候はば埒明き可申 重疊左様に相成候はは、書狀此方に可遣此より書中相

添可遣と被仰候 右之通にて宜敷候哉御考可被下候 先日の銀子は加藤へ遣候事は 御見合可被

成候 其内拜顔右體之義も得と御熟談仕度候

一、先達ては良介殿御無難御歸國奉祝候 尙又弊宅へも御出被下候由 他行不得貴意候 其節は

爲御土産種々御惠被下忝被存候 是よりは彼是御無音可罷過候 右荒々得貴意候 萬拜眉

頓首

三月廿七日

三 浦 修 齡

加 藤 周 平 様

玄應宛

履軒文集御無心 (大坪寅太氏藏)

拙者も日出ニ來リ 漸ク昨^{ユウ}夕かた歸家仕候 道履御清勝と奉存候 久しふり他出 おもしろき事
とも多く御座候ひしか とかく懶性山中のよきには不如と覺申候 御文史近來如何程ニ御すゝみ
被成候哉 承度事ニ御ざ候 然ハ履軒文集得申候 寫置度候 近比乍御無心奉願候 五十丁には
足り不申候 内空紙多く御座候 可成事に御座候者御願申上度 先押而願上申候 其内拜顔可申
上候 已上

九月廿二日

安 貞

玄 應 様 (杵築の
人?)

尙々周平殿さそく當時ハ寸隙有之間敷候 乍去御尋申候 木付にも有徳院殿か一生之義しる

し候もの 暫かうけ申候 ひらがなものの六十枚にはたり不申候 御うつし被成間敷や 是ハ
拙者御たのみ申がたくも御座候 うつし置候て周平殿へ有之候へは 手前に有之候と同然の事
に御座候 乍去只今ハ中々左様の事ニては御座あるましくと奉察候は 案し出候て又々申進候
うつしものゝ義當時出來申間敷候者 近日御しらせ可被下候 いそき候本にて御座候 當時の
事故おもしろきものに御座候

佐藤九一宛

閑散餘錄一再涉獵 (杵築、某氏藏)

御主方重疊忝候 追々服藥可仕候 且又閑散餘錄一再涉獵甚慰渴御座候 便希に候故 先早々御返進申候 忝奉存候 已上

七月朔日

三浦安貞

佐藤九一樣

*佐藤九一、濱脇の人。次の七絶は梅園の作である。

送藤九一

邯鄲江上雁南歸 四極山前憶舊扉 一片離情秋不限 白雲遙逐馬蹄飛

守江良右衛門宛

道齋隨筆御尋二付申入候 (東京、吉村龍介氏藏)

道齋隨筆之義御尋ニ付申入候 一體杜撰多相みへ候 宜敷事も多候得とも怪説も多候 有眼の人は此書をまたす 無眼の人は魚眼を以て玉ニ混申候 先表題に省字を用候 又開卷にも道齋之齋齊と書候 是ハ古字通用と申よりの事とみへ申候 されども後世齊齋書わけ候へば 後世にしたがひ度候 筆を^{ツヤ}冠に從ひ候も略字法との事にあらず

上一ノヲ李極^{キキ}是ハ字彙の音に從ひ申候 セウよく候 蒸之韻之字に御座候

葉公セウトカナツケンロ セフニテ候

玉拙ハ音シユクト覺申候

二ノヲ烏瓜ノ切ニアリ 音ハなく候

越王^{タツ} 是ハ連聲濁りて字音にあらず あつめ候者別に部ヲ出し度候

鄭袖^{テヨウ} 鄭玄と同一と御座候 是又吳音よみくせに候得は別部に此類集め申度候

但史記ニシヤウト有シカトモ覺候

星宿 ホシナレ共シウト申候説有之候得とも日のやとりなれば宿よしと辨正有之候

金莖 キンケイハ非ナリ カウ漢音 キヤウ吳音 つねはキンケウトコソよみ申度候

茗雪 シヤウサツ、拙者テウトウト覺申候 拙誤にや改不申候

黔驢^{ケン} 黔首^{ケン}クロキノ意 黔中^{ケン} 地名

一ハ黔中ノ驢と覺候 左候へはキンロ也

揖讓^{イウ} イフノカナ也 訛謬^{ビヤウ} グハビウト覺申候

檀弓^{ダンクウ} 是又吳音古讀 今書に對してはタンキウとよむ 蓋 桓武帝ノ令に従ふ也

孟浪^{マンラン} 杜撰^{ツザン}ヨミクセナリ 石橋^{シヤク} 同前

訓解^{クン} 本キユン クンヲキユンニ轉ズル也、キンハ中畧也

綸^{リン} 中畧シテリン 六^{リユク} 中畧シテリクトヨム、類也

龍光^{テウ} 是ハ詩經之字 龍光ノ咎也、龍ヲテウトヨムニアラズ

復關^{ケン} 詩經叶韻ニテヨム也 叶韻にあらずる處はクワン也

教率^{コウソツ} 孟子の註に隨ひ コウリットアルト覺タリ

阿監^{アカン} 阿監ト覺タリ 阿兄^{アケイ} 阿爺^{アヤ} 阿戎^{アジツ} 阿難^{アナン} 皆同様 阿彌陀の阿と同じからず

豚 藐ト同シク漢音バク 吳音シヤク 平生豚々クルシカラズ

南斗北斗 イヅレモトヨミ 古今句會の辨ある様に覺候

松江^{セン} 稱江院ヲサケ奉る由 稱光院あつて稱江院なく江光これをさけ候者 大なる博士家の誤な

り 唐音まじへよむ事 行脚^{アンギヤ} 行燈^{アンドウ} 靈隱寺^{リンイン} 副司^{フウシ} 何ほともある事也

◎南朝四百八十寺^{シツ} 十^{シツ} 入聲字なり 寸^{シン} 平ニナル也 綠浪東西南北各紅闌三百九十橋^{シツ}の

類也

甫^フ ホノ音ナシ 古實ニホトヨムコトアヤシ

行宮^{アン} 本邦ノ古音ニハアラズ 唐音ノ訛也 古讀トハ云ベシ 古音トハイフベカラズ

無乃^ム ムシロニアラス 無寧^{ムシロ}ナリ 無乃^ム大簡^チ乎なり 先儒辨アリ

中 卷

回也賜也 全語助にて 之ハ思なしとハ非也 也ハ上の物をさす音也 回の字もさす也 和語の

ゾの字也 不改其樂者ハ回也の意なり 始而ともに詩をいふべき者ハ賜也なり

曰云ノ別 曰イヒヤウ 云イヒカタ 句尾に云ノ字ヲツカヒ 曰ノ字句尾ニ用たれハ別あるに似

たり されとも大意可なり ざる故に他書ニハ 詩曰とありて 大學にハ詩云とあり 他書にハ子曰とありて 防記にハ子云とあり 可考

幾望

既望(數)と同じ 隱居放言(出づ)に幾とあり 此説しらす 既望ハ十六日也 月幾チカシ望ハ易の語なり 易によれば幾望ハ十四夜とすべし

別

另ニ作るとあり 另も意は別と同じけれども音レイと覺候 ざる故に另ノ字ノ時ハレイト僕ハヨメリ

卷作寫

寫卷の略なる事徂徠之説にて何か見候様に御座候 乍去暗記不仕候 右者只艸々相考え

申候事のみニ御座候は他見ハ御用拾可被下候 殊ニ御信用ハ被下間敷候

故

コトサラ格別之様に申候 コトサラノ時ハ折角ワザノ事ニソロ

*以上吉村氏所藏の書翰卷にあり、全集にも之を採用して「梅園拾英」の中に收む。

御取揃御年玉 (吉村龍介氏藏)

尙々御加筆之御禮可然奉願候 已上

如仰御慶無盡期申納候 御揃被成御安善御踰年被成大慶奉存候 今日ハ乍例達藏殿爲御禮御出

殊御取揃御年玉被懸貴意不淺受納仕候 當年も御逗留被成段是にても悦申候 隨而手前無恙加年

仕候 妻も宜敷申上候 萬縷期永日之時候 恐惶謹言

正月廿日

三 浦 安 貞

守江 良右衛門様 返上

爲御年玉三種御惠授 (吉村龍介氏藏)

於御慶目出度申治候 彌御舉家御清康被成 御迎春之由奉欣幸候 今日者達藏殿御出被下 殊爲

御年玉三種御惠授 忝幾久受納仕候 乍慮外御家内様宜様御傳意可被下候 尙期永日之時 可申

出候 恐惶謹言

正月廿日

三 浦 安 貞 晋

守江 良右衛門様 人々御中

御令閨御安産 (吉村龍介氏藏)

一筆致啓上候 彌御平安被成御座珍重奉存候 且此内承候得は御令室様御安産段々御母子様御引

立被成候段奉賀候 右御歡皆々様にも可然奉願候 愚妻も御同然申上候 且又今日は達藏殿御歸

可被成由御迎にも不參候故御とめ申候得とも いつれにも御歸り可被成由 因而不顧思召御返申

上候 萬々後喜可申上候 恐惶謹言

二月 卅日

守江 良右衛門様

三 浦 安 貞 晋

當春ハ西邊御遊行 (吉村龍介氏藏)

尙々達藏殿御堅固御滯留にて御座候 御氣遣被成間敷候 已上

貴墨致拜見候 然者當春は西邊御遊行 當月初御壯健にて御歸國被成候段 珍重御儀奉存候 不存寄是迄御土産夫々に御惠贈忝奉存候 幾久布賞玩可仕候 猶皆様にも御同然御致音可被下候 愚妻も左申上候 恐惶謹言

三月 十五日

守江 良右衛門様

三 浦 安 貞 晋

芳野御參詣被成候由 (吉村龍介氏藏)

貴書拜見 無程炎熱相催候處御全家御安寧被成御座慰悦仕候 弊方無事罷過候 然者此節者御互に御尋も可被下覺召候得共 少々御痛に因候而達藏殿御遣被下 猶種々御取揃御惠投忝受納仕候

達藏殿も御願に付芳野御參詣被成候由 御苦勞と存候 御内好御慰とものと奉存候 折角御見立無

程御還家之上可申承候 猶皆様に御致音奉希候 愚妻も宜敷申上候 恐惶謹言

六月 十二日

三 浦 安 貞 晋

護江 良右衛門様

長崎へ達藏殿をも同道 (吉村龍介氏藏)

貴札致拜見候 秋暑彌御安寧御入被成珍重奉存候 拙宅無恙罷過候 御繫意被下間敷候 然者御聞達之通 拙者義も長崎表存立 來月中旬にも罷立申積りに御座候 因而達藏殿をも御遣可被成段 海老屋呈次をも同道仕筈御座候間 一所誘引可仕候 御氣遣被下間敷候 尤拙者義は肥前に

九月一盃は逗留可仕候

諸生衆皆わか候へは先ニハ返申かたく候 若年代宜敷才領等御座候者 御聞立被成候は さきにも返し候様にも可仕候 拙者抔人連レ不申候 恰と恰羽織 肌着合羽是程風呂敷ニ入 背負申 筈御座候 先許にて寒く相成候は 鳴木緋にても調へ 綿買ひ布子に仕直し可申と存罷在候 爲御用心申上候 猶皆様様ニ可然奉願候 恐惶謹言

閏七月 廿四日

三 浦 安 貞 晋

守江良右衛門様

一一四

*安永七年七月五十六歳の時長崎へ旅行せんとし門人達藏の父守江良右衛門へ出した狀。

兒輩出痘御聞及ニ付 (吉村龍介氏藏)

貴書奉拜見候 寒冷相募候處 皆々様御平安御入被成候段 珍重不過之奉存候 弊宅無恙罷過候
然此間は兒輩出痘御聞及に付 爲御見舞遠方御使札 猶三種御惠贈被下 御事多内痛入候仕合
忝奉存候 御地には未痘瘡も流行不仕 御待可被成候 此邊當年ハ甚輕 手前子とも相揃一時ニ
煩申候處 十三四日振ニハ何れも引立悦申候 御安心可被下候 右御心遣之御禮 御母堂様御令
政様ニも可然奉願候 猶愚妻も御同然御禮申上候 恐惶謹言

十月廿八日

三 浦 安 貞 晋

守江良右衛門様

今日達藏殿御用御歸り (吉村龍介氏藏)

先頃三郎次殿御尋之節は御芳札 猶御丁寧御傳聲忝 彌御平康歲寒御凌被成候段奉忝喜候 誠先
頃は御尋間折柄他出不得御意残念奉存候 御兩所様より御祝儀不淺受納仕候 此内御禮愚札指出

候 定而御落手被下候半奉存候 今日達藏殿御用御歸可被成由 因而御報申述度如此御座候

猶皆々様ニ宜敷奉願候 愚妻も御同然申上候 恐惶謹言

極 月 四 日

三 浦 安 貞 晋

守江良右衛門様

歲暮御賀儀 (吉村龍介氏藏)

尙々近日御眼氣に御座候段 御咲止奉存候 何卒早速御心好御入被成候様にと奉存候 已上
貴札致拜見候 寒冷相募候處御渾家御平善被成御座珍重不過之奉存候 隨而弊方無恙罷過候 然
は今日は遠方御事多中御使札 小兒輩痘疹輕相仕廻候迎御祝儀 猶達藏殿より歲暮御賀儀御肴兩
種 愚妻拙生小兒輩迄御祝被下 乍例忝祝納仕候 當時此邊痘流行候ニ付達藏殿御出可被成候段
々入御念之御義 來陽緩々可申承候 乍憚何レも様ニ可然奉願候 愚妻も書面種々申上度旨申出
候 何事も期永奉候 恐惶謹言

臘月十四日

三 浦 安 貞 晋

河野良右衛門様 奉復

歲末御祝儀被懸貴意 (吉村龍介氏藏)

貴札忝拜見仕候 如諭嚴寒之節御座之得共 彌御揃御清康御暮被成候由 珍重奉存候 隨而弊家
無別條罷在候 乍憚御安意可被下候 將又世忝方迄御加筆被下忝奉存候 此間は爲歲末御見舞御
子息様御尋被下 其上歲末御祝儀被懸貴意幾久鋪^シ受納仕候 如仰殘臘無餘日罷成候 折角御仕舞
御超歲可被成候 萬々來陽日出度可申述候 恐惶謹言

臘月廿六日

三 浦 安 貞(花押)

河野良右衛門様

來陽緩々御禮 (吉村龍介氏藏)

爲御歲暮 貴札忝拜見仕候 如諭甚寒罷成候處 御渾家御平安之旨珍重奉存候 然者二種 并主
令方迄御惠贈忝受納仕候 猶來陽緩々御禮可申伸 草々頓首

十二月廿七日

三 浦 安 定

守江達藏様

餘寒に持病の疝氣 (立川文友氏藏)

貴札忝拜見仕候 先日ハ參上仕 段々御馳走罷成忝奉存候 其後餘寒強御座候へ共 彌御安康被
成御座珍重奉存候 昨日ハ達藏様御出被下忝奉存候 乍例御年玉被下 忝幾久愛納仕候 昨朝ハ
御母上様御勝不被成候段 御當分の御義御座候へかしと奉存候 餘寒の御痛と存候 折角御心添
可被成候 私義も昨朝本家迄參候處 以の外相勝不申候 餘寒に持病の疝氣差起難義仕候へ共
今朝は余程快御座候 乍憚御安意可被下候 乍憚御祖母様御母上様にも 御内政様にも宜敷御頼
申上候 愚妻も同様申上候 甚取込早々亂筆御免可被下候 右御禮貴答旁早々如是御座候
恐惶謹言

正月廿一日

三 浦 安 貞

河野良右衛門様

追而御子様方いまた御抱瘡不被成候様承候間 御用心ニ少々藥心付候藥 達藏様へ可渡申候
御入用無御座候節ハ何時も御返可被下候 町も遠く御座候故用心ニ差上申候

一、ウニカウル 五分

一、熊 膽 一分

- 一、德寶丸 十貼
- 一、男煎藥 四貼
- 一、小兒虫藥 六ふく
- 一、人參 二本八分

右任御心安進置申候 右の藥御用不被成候様御座候へかしと奉存候

中田億右衛門宛

御兩家御繁昌 (大阪、中野豐氏藏)

貴墨拜誦 御全家御壯健寒冷御凌被成珍重奉存候 誠御兩家様御繁昌目出度奉存候 祝儀御禮痛入候 仕合御座候 此内御尋申候節は御他出不得貴意 御留守御丁寧御響應忝仕合奉存候 御取方等御世話被成候由 乍去海邊付ハ沙汰も宜敷相聞候 山中ハ御聞及も被存候半 近年珍敷凶飢にて御座候

一、御仲兒様御藥 御幼兒様御傳藥進申候 御幼兒様御藥此節のはそくゐうすく被成御ぬり 御痛所に御はり可被成候 御仲兒様のは已前の通に御用可被成候

一、東光方丈御藥進申候 御届可被下候

一、此間は御追悼被下忝感吟仕候 此節の不幸は如何致候や 追悼あまり參不申候故 別て思召

感荷仕候 萬餘乍慮外御令聞様にも可然奉願候 恐惶謹言

霜月十五日

三 浦 安 鼎

中田億右衛門様

御藥調進仕候 (中野豐氏藏)

御手教拜閱 御壯健時下御凌被成奉欣然候 然は龜太郎殿近來御出來の御様子 件件承知御心遣奉察候 何れ虫の業なと申様の事かとも奉存候 先御藥調進仕候 御用可被成候 追々御様子可承候 鳩藏殿御壯健御座候 是又御安心可被候 今日取込草々及亂筆候段御容恕奉希候 頓首 尚々家族へ御致意忝 乍筆末御内政様にも可然奉願候 増右衛門殿御平安の由 是又可然御申上可被下候 已上

十一月廿六日

三 浦 安 鼎

中田億右衛門様

一封乍慮外 (中野豐氏藏)

御遠々敷罷過候 沍寒の節 御渾家御萬福奉賀候 拙無異事罷過候 御安心可被下候 此間は

久久振鳩藏殿御出 兩種被懸貴意不淺忝致受納候 隨分御無事御逗留にて御座候 御案被下聞敷候 且一封乍慮外慥成便に富來久保屋へ御届被下候様奉頼 乍末筆御内政様にも可然奉願候 猶重て可申承候 恐惶謹言

臘月七日

三 浦 安 定

中田億右衛門様

愉婉錄寫人無之 (中野豐氏藏)

寒中御健在奉賀候 拙無事御繫念被降間敷候 今日御遣被下候付 米一袋被懸貴意毎御心遣忝奉存候 且又日外御頼の愉婉錄寫人無之 折節壽助も望候て 爲寫候處高料思召も甚如何敷御座候得共 無據鳩藏殿迄進置候 御入手可被下候 當年凶饑定て彼是御心遣共奉遠察候 乍慮外 尙々愉婉錄代十四匁九分と申來候 尤正銀にて御座候

十二月十五日

三 浦 安 鼎

中田億右衛門様

五月雨抄御目につかけ候 (中野豐氏藏)

昨日より緩々得拜誦珍重奉存候

一、御姉様御葵^{シヤウガ}迄申候、生^{シヤウガ}姜少御入御用可被成候

一、増太郎殿御藥御届可被成候

一、愉婉錄

一、西州遺事

懸御目候 年内中に御返可被下候

一、五月雨抄 是は御約束は不致候へとも懸御目候 つれも損し不申様に奉願候 増右衛門殿にも御家内様にも可然奉頼候 已上

閏月十五日

三 浦 安 定

中田億右衛門様

松皮食の書付參候 (中野豐氏藏)

如來命月罷成候へ共御渾家御平安被成御座大悦不過之奉存候 今日は天氣好御迎被遣場

藏殿御引取 殊更當年は右の仕合故彼是厚御世話罷成忝奉存候 隨て件件別幅の通被懸貴意

不淺忝奉存候 猶御令室様にも宜敷御禮奉願候 御兩家共に當年は賑賑敷御年可被成奉珍重候

別書の御禮家内宜敷申上候 當年は別て凶饑彼是御心遣共奉察候 松皮食の書付參候故 鳩藏殿

にも御寫取被成候様に此内申置候 御覽御考の一つにも相成候へかしと奉存候 無餘日相成候へ

は千萬來陽可申述候 恐惶謹言

十二月廿日

三 浦 安 鼎

中田億右衛門様

先立ちし妻の此頃折々夢に見えければよめる

ぬるまのみむかしなりけり烏羽玉の夕つく鳥よ心してなけ

*天明三年九月、夫人歿す。夫人は寺島五郎右衛門洞雪の女。時に梅園六十一歳。先生の和歌としては此外には見つからぬ。次に梅園先生の「夢亡妻」と題する詩をあげておく。

夢 亡 妻

孤魂長不忘人間 昨夜分明入夢還 孔雀東南相背處 嫦娥霄漢若爲攀
暫時愛護平生態 十分清羸永訣顔 枕上烟霞天縹緲 白雲蒼海阻三山

御祝被下御禮申上候 (中野豐氏藏)

覺

- 一、壹 樽
- 一、歲暮御祝儀 壹封 修令へ
- 一、足 袋 一足 龜次へ(次男玄龜)
- 一、白 粉 一箱 類へ(末女類子)
- 一、鬢 付 四包 召遣四人へ

右の通御祝被下忝何も一同御禮申上候 已上

十二月廿日

三 浦 安 鼎

中田 億 右衛門 様

御惠贈 不淺受納 (中野豐氏藏)

御投書披緘 如「貴諭」寒氣強御座候得共 御清門御多福御入被成珍重奉存候 拙宅無異事 消日月候 今日は御事多内 壽助兄御入來 彼是被縣御心頭御祝儀 家内迄も御惠贈不淺受納仕候

御紙上にて悉申候 秋已來少少御痛處有之候由 存不申以書中も御尋不申進背本意候 已上

杉苗五百本程望ニ御座候 (永松壯三郎氏藏)

近日漸催和暖候 彌御平安御凌被成珍重奉存候 當年は増右衛門殿にも御參宮彼是御取込可被成奉存候 隨て弊方無恙罷過候 先頃は令郎御出彼是御心遣被下忝 其節取込候て裁復不仕失禮罷過候

一、別件拜見合點仕候義は書かへ申候 夏大豆の義一向合點不仕候 此内増右衛門殿申進候 定て御承知可被下候 御下書出來候はば今日御遣可被下候 只今清書半に御座候 五六日内相仕廻可申候 仕舞次第指出申度候 十行にて百枚の外に出申候 四五遍も書候故退屈仕候 一、鳩藏殿へ老悖より杉苗御頼申置候 今日壹人進可申候 四文か四文より内に入位五百本程望ニ御座候 使の者もて候はは皆御遣可被下候 もて不申候はば 先もて候程御世話被下候様に御申可被下候 銀札三拾匁爲持進候 猶皆様へ可然奉頼候 恐惶謹言

二月十一日

三 浦 安 定

中田 億 右衛門 様

* 先生の住宅の其の屋後に廣大なる杉林がある。老杉森々として晝猶暗く、百數十年の昔を物語つてゐる。其の杉苗、五

百本を注文してゐる。其の値四文か、四文以内のもの、此の使者が持てるだけ持たして下さい、銀札三拾匁持たせてあるとの事。後掲の中野升右衛門宛の手紙にも同様の事がある、兩様に依頼したものであらう。

御肴料御深志ニ候 (永松壯三郎氏藏)

貴札致拜見候 春寒御多福御入被成奉珍重候 拙も無事罷過候 御安意可被下候 鳴藏殿久々に御入來緩々申承慰悦仕候 殊御肴料御携荷御深志候 猶御用事も御座候由 大意御紙面致承知候 新三郎殿此間御見舞候て御座候 粗左様の御用にも候や 重て可申入との御挨拶ともに御座候 折節取込荒々及裁復候 猶皆様へ可然奉願候 恐惶謹言

二月廿一日

三 浦 安 定

中田 億右衛門様

御目代として御在宿 (永松壯三郎氏藏)

貴墨薰讀 時下愈御壯健御入被成珍重不過之奉存候 隨て弊方無異事罷過候 御安意可被下 然者鳴藏殿御事 最早時分爲御目代暫御在宿可被成段 御尤の御事奉存候 今日御歸家萬々口述申進候 此間は客來に付段々御苦勞懸忝奉存候 皆皆様へ可然奉願候 恐惶謹言

尙々おゆい様へも可然奉頼候 已上

卯月十七日

三 浦 安 鼎

中田 億右衛門様

御介抱人御丈夫に (永松壯三郎氏藏)

拜見頃日は御勢々の中逗留仕御馳走忝奉存候 無恙罷歸申候 途中迄駕籠被下休息仕候 然者御息女様御難義の由相考御藥進し候 御服用可被成 是は明朝より勢相増可申存候 理中湯は附子^{フシ}はよく御座候得共 餘藥ちと忌申候 卽此度煎方中附子とも相加進申候 一日二貼にても三貼にても御氣限に御用可被成候 桂作殿にて此御藥可然候 一、下女同症 是は土佐郎殿藥相用候様に被成可然候 一、御小兒様 此内の梅干入兼用可被成候 御當人は御嫌の由もし御酒御好に御座候はば 此内申候古酒三合氷砂糖六匁末となし 煮合候方御忌不被成候はは用申度候 腹痛の御爲にも可然かに候 一、御令内様へも宜敷御禮奉願候 暑さつよく御座候得は 御介抱人御丈夫に無御座ては相なり不申候 どなたも御飲食隨分淡泊に過不^レ申候 もし其氣味も御座候はは 是やく御藥御用御煩

不被成候様奉_レ希候 已上

六月廿二日

中田億右衛門様

二八

安 鼎

愚妻此間危篤 (永松壯三郎氏藏)

貴札致拜誦候 秋涼早催候得共 御渾家御無變御入被成奉賀候 御聞達の通愚妻此間は危篤相煩候處 近日少少心好相覺候 被思召付御尋の御書中鳩藏殿にも 御微恙に因て御尋不被下候由被入御念御義何卒當分の御様子追追御快復被成候様にと奉存候 此内お家も逗留病人介抱致吳深切の義御座候 猶又升右衛門殿 (升右衛門は中野氏である。中田氏と兄弟?) 御尋忝奉存候 御内室様御加書是又可然御禮奉頼候 恐惶謹言

八月十六日

三 浦 安 貞

中田億右衛門様

無 宛 名

壯年とは乍_レ申久敷御瀉 (國東、森小彌太氏藏)

毎々御縷書先徳門御清福奉賀事に候 拙無_レ恙罷在候御懸念被下間敷候 然者貴兄御儀久敷御不快 此内は杵築松本氏に途中懸_レ御目_レ御様子とも承猶安節よりも承申候 御壯年とは乍_レ申久敷御瀉 申迄もなく御油斷可有之事にては無御座候得共 千萬御自重可被成候 胃は一身營養の本其本缺候ては百出自_レ是甚懸念不止事に御座候 寄存候はば申遣候様にと御座候得ども 様子伺不_レ申兎角難_レ申候 鮎の子のわたを鹽辛に致相進申候はば立處にしるし有_レ之候 土用中のうなきの鹽辛是又宜敷と承候 餅を水飴にてよく煮 時々服餌致候はばよしと承候 先いつれケ様成おとけ事も可成参りかね候はば とくと御療治可然候 殊に當秋疫病も候故旁御自愛可被成候 一、御沙汰の通 此内又又御城下へ参、四五日逗留致候得ども 無滞歸山致候

一、序に御尋申候 いつぞやウニカウル御用立候を歸り候様にも覺申候へ共 とくと覺不申候故
一寸御尋申候 置所失ひ御尋候も御心安如斯御座候 恐惶謹言

七月 五日

三 浦 安 貞

大宮司誰人に候や (吉武得巳氏藏)

頃日修令歸候節、若宮社式御書附被下忝く落手仕候 不詳の處御尋申事左の通

一、神主と申は誰人に候や

一、大宮司誰人に候や

一、惣檢校祝 同斷

誰村の何がしと申事はしるし可被下候 生地氏は神主に候や 大宮司に候や 神主と申人は其つかさにて候や

一、神座は左尊く候や 右尊く候や

一、御内殿の内圖の通に候へば 皆々神の方にむかひ候様にみへ様 左様に候や

一、御殿の内は 御神體は 社家にて 本地の佛像のつとめ僧に候や つとめは打込候や

一、御内殿は神體佛像御座候様に承候 若宮も定て左様可有之 此處承度候

一、社家の方も御聞 護保寺之方も御聞しらへ被下度候

一、此内棟札の事も申上候 近近御遣し可被下候

一、奈多八幡宮も右の様子委敷承度候 とくと御聞しらへ被下度候

一、奈多明星院も護保寺の通 無程常の取行ひ諷經迄も不仕 小僧立溫居迄も不仕候事 護保寺同前に候や 猶昇殿出家社人之式圖を以 委敷承度候奉頼候 以上

正月 晦日

三 浦 安 定

御年玉品々 (別府、宇都宮喜六氏藏)

於御慶御同然無盡期申納候 御渾家御壯健御躰年被成大悅奉存候 隨而拙宅無恙加年仕候 然者爲御年始 勝彌殿御出 猶爲御年玉品々御取揃 被懸御意忝受納仕候 當年も御逗留被下候やの趣承知仕候 猶新參も有之候間賑にも有之候 御機遣被下間敷候 萬喜期永日候 恐惶謹言

三 浦 安 定

佐野玄遷宛

湯通口ニ滯結と相見申候 (吉村龍介氏藏)

拜見疇昔之握手にて今難忘候 留滯中御懇意忝奉存候 十市病婦様子承候 いつれ湯通口ニ滯結有之とハ相見申候 御投劑面白承候 如何宜候や 茫然猶一あてあて場にや 又元氣つかれ候や 遠方より難申候 體つよく候者通劑も可然 模稜之手御爲に成候事難申出候 以上

極月十日

三浦安定

佐野玄遷様

* 佐野玄遷は杵築の人、尙貞の子、諱尙長、叔子と號し、醫を業としてゐた。其子玄知は黃鶴の門人だが、梅園爲めに洞達記を作つて與へてゐる。玄遷をして渾天儀を作らせ、天文を研究させた事は、後掲矢野雖愚への手紙でも交遊の程が分る。

灸治は折角可_レ宜候 (吉村龍介氏藏)

尙其日大紛冗不_レ能_二即答_一候 彌御清健奉賀候 川千里イナ咳出申候 如何何卒平快有之候へかしと祈申候 猶又灸治は折角可_レ宜候

一、御作拜見面白承候 答人之作意味不_レ存候故 とかく難_二申進_一候
 ならや善兵衛よりの狀 懸御目候寫本二卷と御座候 一卷ハ名字私儀落手 一卷ハ五月抄工藤氏ニ參候趣にて御座候 是ハ八坂彌一郎殿本にて御座候 あの方へ届候様に相成候也 如何御吟味彌一郎殿も御逢とも被成候者 右之趣御物語落手有之候様ニ仕度候 女早學問箱ニ入 貴君ニ指上候 四箱の本も御受取被成候や 御しらへ可被下候 箱は舊年書物入遣申候 ならや書狀懸御目候 不及御返却候

一、如_レ仰當春ハ 雛生相集殊之外やかましく御座候 とかく老境精力も非_レ舊候 覺_二疲勞_一候 人事ハ却而いやましに覺候 御憐察可被下候 逸鳳子御出精にて御座候
 一、京師大火如何 御親類様方 御左右無御座候や 唯事夥敷承のみに御座候 可惜は書板大分歸鳥有候半 頓首

三月二日

三浦安定

佐野玄遷様

洞達亭記 (佐野秀子氏藏額) (文集に無し)

蓋士之道講之於學修之於禮弗修則無益于講弗講則罔于所修修以行其正講以知所向然而所向多岐雲樹丘陵以遮其望不知向誰問其羊(亡羊)歟といひ多岐亡羊といひ學問の道多端なるを以て眞理を失ふに喻ふ不_レ如出雲標凌霄漢躡日月之倒景以察壤土之茫々於一彈丸岐路繚繞紊亂之狀雲樹丘陵之擁蔽下視悉之就所在取其羊假有田夫給之已諳大澤於前有蚩尤起涿鹿之霧璿璣天地以定其方何難於獲其一羊佐野翁亭成結構輪奐叔子玄遷從予而遊問名于予予曰此亭也極輪奐致爽塏雖然當雲霧抹林星月藏光謂之洞達未矣顧子拔身以置蒼茫曖昧之標以指其所求於掌則雖有魑魅何隱其羊於無何有焉於是乎輪奐爽塏以成洞達達乎達乎吾以名山亭叔子領焉書以爲記

天明丙午夏日

梅園處士 三 浦 晋

菅公起自儒林 (吉村氏藏)

(前切)成而弗可掄 謂之者天爲而弗測 謂之者神(自形而上以下二十字抹殺あり)有所縱其志惑夫天命蓋方宇多醍醐之時藤氏據鼎槐之地執天下之權已數也菅公起自儒林終至三台位格位身居姦邪之間識者危焉公何不早退蓋公之遇于上皇豈常哉公已知其不安故上表辭職者數而弗聽桂冠踏海乎負上皇眷顧之意致此羝羊觸(羝羊觸不能進不能退・易經)上皇猶將進于則闕辭而不就時平陰行姦邪以閔閔妬之浸潤已成剝牀及膚主上猶幼不照其奸致此蹶躓蓋天下德與爵爲相尊故爵爲人爵德爲天爵依爵者以威福依爵以榮辱藤氏以閔閔世家天下之權公廢而藤氏之位定矣——之位定而皇家之勢衰焉勢也夫姦邪之爲社鼠(社鼠ハ君側ノ奸臣?)爲魑魅爲虎爲狼亦神位之變化雲旒風驅能鼓舞同類驅龍驅龜雖爲一時之冥晦不久則白日上懸秋毫共察公雖身終鎮西忠誠不掄皇終贈之以正一位太政大臣則上皇之所憶子孫繼其志公薨後帝都水火交起震驚人世謂公之靈公之忠誠唯見君之尊一榮一落以爲春秋何有此事雖然有說于此通天下之情不容姦公之遇變——滿憤滿天下快曰靈宜就天宜罰是以伸其憤猶岳王之廟擊檜賊於是公得自立上覺悟公嘗曰唯合誠不禱神護杵藩有公之廟肇于——人之尊水旱疾疫皆祀夫神不福、不知其禱者以何心公之事君不以君之不明而悲不以僚之不良而怒唯誠之奉然則長○人者雖一事之

威福不能易榮辱 然則禱此祀豈一身安哉 一家安焉 豈一家安焉哉 闔國安焉 以闔國安之道
推則雖舉寰宇不爲 難大至哉 神之德也 從歌曰 (以下缺)

佐野玄知宛

御令兄様の書面御示 (佐野秀子氏藏)

從御令兄様御内意之御書面御示被下恭奉存候 右之通ニ相成候而者 甚面倒の儀に御座候 何とも相計ひ可申候 御令兄様へ宜敷御禮辭奉願候 已上

九月廿四日

三浦主 齡

尙々右之書火中候

佐野玄知様

* 令兄とは、月齋とも玄盟、玄鳳ともいつて、實は高橋氏、尙長氏に養はれて家を繼いだ人。

* 玄知は大雄又柿園と號し、才藻富瞻と稱せられてゐた。天保六年十二月三十九歳を以て歿したとある。

御庭の躑躅満開につき (佐野秀子氏藏)

御手紙拜見仕候 然ハ御庭の躑躅満開ニ付明十七日參上仕候様可仰下忝奉存候 隨仰參上可仕候 余儀者期拜芝候 已上

三月十六日

三浦主 齡

佐野 玄 知 様

富太郎女房御返し (佐野秀子氏藏)

行右衛門女房直ニ御留置可被下候 富太郎女房村役人中出之儀も有之候由 右之者は御返可被成候 右之通近右衛門殿申聞候 御承知可被下候 已上

十二月七日

三浦主 齡

佐野 玄 知 様

乳婦入湯被仰付 (佐野秀子氏藏)

昨日乳婦入湯被仰付候處 相續快御座候而 乳も相應に垂り候に付 身仕舞等被仰付候由 其段

豊島氏へ可申達候 様子により明日被罷出候儀も可有御座候 其用意罷在候様 被仰聞可被下候 右貴答早々頓首

正月十四日

三浦主 齡

辻 松庵 様

佐野 玄 知 様

乳婦入湯候處 (佐野秀子氏藏)

乳婦入湯致候處 相續快方に御座候由 明後十六日御殿へ御差出し被成候様奉願候 自私豊島氏へ其段相達可申候 已上

十二月十四日

三浦主 齡

佐野 玄 知 様

矢野 雖 愚 宛

齒は之が爲め^{むな}豁し髪は爲^は之禿ぐ (清原道彦氏藏)

貴翰薰誦漸霜露之候推移候處 起居御清健御入被成欣慰不過之奉存候 野生依舊消日月候
御慮懸被下間敷候 然者此節佐藤生此地御來遊 得と得貴意無此上奉存候 伶利に相みへ
申候 不肖の弟子御得益の處は無覺束候得共 随分可申承候 御安心可被下候 猶又御宿所に
も可然御挨拶可被下候

一、簡儀出來申候處 按排不宜候 追々に拵出し可申との事に御座候
一、墨卿子へ答候書とも 御覽思過半候由に候得は 於拙も甚本望の御事奉存候 條理の義は
只只實徴を主と仕次書にて 考候事にて 愚拙申候事も 天地に合不申候得は 辭說にて御座
候 又先様固見を取候て論候はば たといいか程の難駁候ても 不苦候 扱條理千古を経て野子

已前致發明候人無御座候故階梯無御座 さてさて苦候事に御座候 拙自少年齒爲之豁^{ムナレ}髮
爲之禿候へ共 條理七八分をも得候位に被存候 生涯十分の成就是出來申間敷候 被仰下醫事鄙
衷の通に御座候 此地位にて御座候得ば随分御進み可被成候 世間の學習智臆に痛候人は何分説
入不申候 何ぞ申進候様に被仰候へども 當時取込申て不能詳候 贅語中の一篇是は未脱稿に
ては無御座候へとも 佐藤生へ御謄寫被遣候へと申置候 御覽の後御一咲丙丁童子へ御投可被下
候 御他見御無用と申内 多賀子は同調の義御勝手に被成可被下候 先は答謝申述度 如斯御座
候 秋氣折角御加餐可被下候 恐惶謹言

九月五日

三 浦 安 貞

心病む人惡をなし氣病む人病をなす (清原道彦氏藏)

醫國之義是は先達て申進候と覺申候 御難問御尤の御事に御座候 是は拙著身生餘談御覽の上
又又可申上候間先略申候 惣して天地の間の事は 本一に候故 何事も融候位有之候 又二に候
故斷然と分り申候位有之候 此間をよく見候處 條理の事に御座候 其故は譬へは孝の字を擧て
説候日は無忠も不幸に候 無信も不幸に候 無仁無義無智は皆不幸に候 不養生も不幸に候
不治産業も無幸に候 忠を擧て申候得は 君は一國の父母に候 我父母と仰く處にかへ候忠に

候 然れば一家の孝に候 無忠心にして孝道は不出來候 無忠心にしては仁義禮智皆虛文となり
申候 忠なくしては妻子奴隸にも道は不被_レ行 いつれを舉候事も皆一の位を持候ものに御座候
醫より開_レ眼候得は 天下の事非_レ醫事なく候 一段下して申候へば 商賈にみせ候得ば 天下の
事悉商賈の事にあらざるなく候 又佛寺にみせ候得ば 風聲水音まで皆佛ならざるなく候故に
心病む人惡をなし 氣病む人病をなす 天地よりして見れば同一病人 天心を病む人を分つて大
家に屬し 支體を病む人を以て醫人に屬す 庖丁物をみる時皆手也 醫人物に見る時 病健の間
にあらざるなく候

一、古なきの病あれば今あるの病 古なかるべき事條理の道如此みる事に御座候 乍去未_レ得_レ徵
候 未得徵故 博く求申候 若彌徵なくんば又其條理を考べき事に候 御不審御尤の御義 拙も
同病の人に御座候 或は今行はるるもの又絶することもあるが 吾五十年の壽を以て窺候事 た
とひ書典有之候迎も 漸堯以來五千年に不盈事に候 徵未得候故 とかく難申進候 折角御考御
深索可被成候 必可然故可有之候 先夜陰老眼朦朧の間相認候分りかね可申候 歳暮の御作等御
出來の上御暗投奉待候 多賀兄定て御安健と奉存候 御序可然奉頼候 恐惶謹言

十一月卅日

三 浦 安 貞

佐野玄遷と談天地 (清原道彦氏藏)

先月十一日の貴答昨日落手 御様子悉_レ之候 先以可_レ申上_二は 別後被_レ爲_レ失_レ掌珠_一候段驚入
御憤神の段自_レ此不堪_レ悵然_一候 折角御加餐可_レ被_レ成候 酷暑之候一入御自齋奉_レ祈候 拙子依
然として送_レ烏兎_一候 御懸念被_レ下間敷候

一、御別後條理御探索被_レ成候段 彌御厚意にも叶候由左候はば 隔山川候とも得一知音候と奉_レ
存候 夫に付杵築佐野氏の子 此内暫在山 談_二天地_一候ニ付 指示に苦候時 渾象の簡儀を致_二指
圖_一候ニ付 彼生及工藤生(藤生は雖愚の從舅藤子龍介) 細工被_レ致候 追て調可_レ申候 調候はは定て藤
生より沙汰可_レ有_二御座_一候 實は天地を得るの筌蹄(筌は魚をとり蹄は獸を捕る具、轉じて目的を達する方便の
意)ともなれかしと存而已御座候、上方の君子に見せ候ものにて無_二御座_一候

一、時俗の風習御嘆息 滔々たるもの 天下皆是に候得は とかく難_レ申候 浮屠氏などは多候
故 俗物も多候得共 其内人物も多く見へ申候 醫流は唐にて尙士にも齒せられず候故 甚人物
に乏しく孫思邈如き人甚難_レ得候 於是偶醫をよくする人ありても 醫を以て稱せらるゝを耻申
候 本邦近古已來一變化して 常人と衣裳形態を異に致候様に相成候 其志をするに 只衣裳を
美にし 俗に媚ひ人の憐をとり候事 遊妓野郎と同態 其辨辭聞え候が如しと雖共 廿九日は唯

精を得るに在候 只徳本子壹人此中にあらず 本邦醫流の第一品とも可申候歟 漫遊雜記を見るに及んて 獨嘯子の胸襟やや灑落に相見へ申候 後藤氏勤厚且被_レ爲_二一宗之開祖_一候得は 於_二醫道_一大切に御座候 本邦の醫傳見不申候 もし宜敷物も御座候はは御示し可被_レ下候 先草々鶴崎方門生歸省に付如_レ是御座候

一、安節へ御加筆猶宜敷申上候 他期_二後鴻_一候 恐惶謹言

六月廿八日

三 浦 安 貞

*門人中佐野玄遷など、單に讀み書き、醫書の講説のみでない、梅園獨特の宇宙眞理の研究に其の啓發を受けてゐる。

玄遷は梅園秘藏の弟子であつたことはその詩に、共讀_二黃牛角上書_一の句でも分る。

苟も天玄の條理を探索する者は梅園の好き學友であつた、矢野雖愚は此の方面で尤も寵愛された一門生であつた。

岡 島 羽 仙 宛

簡天儀くつれ物 新五郎歸る迄 (岡島保氏藏)

貴墨拜見秋冷御平善御渾家御凌被成珍重之御義御座候 然者新五郎追々歸し候様被仰聞承知候拙者も少々細工ども頼候 仕舞次第 修令も杵築日出邊迄遣候 同道爲_レ致返し可申候 其節は一日日出迄御かし被_レ下候様にと存候 御頼申入候

一、箱 一つ

是は至て大事之物に御座候 何卒明日にも寺町森常藏殿方へ慥に御届可被_レ下候 無_二間違_一様に還可_レ被_レ下候

一、簡天儀くつれ物 是は新五郎歸り候迄御預置可被_レ下候

一、書狀前後に成申候 此節御使見事の御肴被仰付忝致受納候 萬々追而可申承候 愚妻も宜敷
申出候 恐惶謹言

九月二十三日

三 浦 安 貞

岡 島 羽 仙 様

須 摩 屋 源 助 宛

御 藥 又 又 御 進 候 (杵 藥、莊野源六氏藏)

拜見御平安奉賀候 今日長世生御迎御遣被成 天氣好御仕合奉存候 又又御勝手次第御遣可被成
候 拙無恙罷在候

一、御藥此節又又被仰遣進じ候 近日御眼霞候由 病毒の所致と被存候 重疊御腫氣も萌不申候
や 瀉おもはくは無御座候や 何卒今少しよく有之候へかすと奉存候
一、毎度彼是御世話辱奉存候 又又日出へ參候様奉頼候 是は日用にても入候得は 從私遣申
筈に御座候 御取かへ可被下候

一、公子葬儀修了迄 御みせ被下候はば入御念忝拜見仕候 今日早々申殘候 以上

卯 月 卅 日

三 浦 安 貞

須 摩 屋 源 助 様

* 莊野氏は杵築の商家、須摩屋と稱してゐた。五代目の源右衛門又源助ともある。永頼は諱、萬世は字、それが梅園の命じたものらしい。藥を調べてやつたり手本を書いて與へたり懇切を悉してゐたので、莊野家からも明け暮れに音物を以て謝書を表してゐる。源助永頼は梅園の門に學び、寛政中に歿したとある。

石摺代封の儘落手 (莊野源六氏藏)

貴札致拜見候 秋冷御平安御凌被成珍重奉存候 此内出府の節は段々御丁寧罷成忝奉存候 去年
もと様長崎近く罷成候 舊遊可被思召出候
一、今日は長太郎生御出 因て御土産の一品御名御祝儀一封被懸 貴意不淺自是も御同然祝
萬歲候

一、石摺代封の儘落手仕候

一、所々届物毎々乍御面倒奉頼候

一、此内も買物御世話罷成 當時孔方絶交背本意候 少少銀御座候間先入置申候 御受取置可
被下候

一、幸便次第久玄上物壹束御遣し可被下候

一、御令室様にも可然奉頼候 愚妻も宜敷申上候 恐惶謹言

八月廿九日

三 浦 安 貞

須摩屋源助様

川芎半斤御遣し (莊野源六氏藏)

幸使得申上候 溽濕の節彌御多福御入可被成奉賀候 然に此一通無據用事申遣候 何卒慥成使奉
頼候 尤魚町山田潮庵 是は海老や縁家いなり町多賀友兒 此方にててもよく御座候 其外にても
宜敷思召候様に御届可被下候

一、されなし久玄 一束

一、川 芎 半斤 (芎は香草ランナカヅラ)

右其内長太郎殿御出も御座候はば 其節御遣し可被下候 且又申入候 只今半夏拵候頃にて御座
候 貴店にも定て御調可被成候 六七斤程御調可被下候 近來は見事を好みカキ灰を入候様に承
候 願くはカキ灰不入を調申度候 無之候はば力に及不申候 灰入にてもとのへ可被下候 乍
御面倒奉頼候 早々以上

五月十四日

三 浦 安 貞

須摩屋源助様 外一通添

年賀 四海同風 (莊野源六氏藏)

年賀 四海同風申納候 御渾家御壯健御躰年可被成奉賀候 山中依然迎春光候 右御祝詞申述度
如此御座候 猶期永日の時候 恐惶謹言

正月 四日

三 浦 安 貞

莊 源 助 様

白水眞人と交を絶つ久し (莊野源六氏藏)

與白水眞人 絶交久矣 青州從事有君之寄來以荷厚意

抄 冬 季 六

晋

莊 君 足 下

又 緩々 參 上 (莊野源六氏藏)

御手簡忝拜誦 今朝草々申置候 然は今夕方參候様被仰聞忝奉存候 此節は急歸中度候故乍無禮

同斷申上候 又緩々參上可仕候 尤用事有之候間晩景か夜陰明朝にても必御見舞可申上候 以上

即 日

三 浦 安 貞

須 摩 源 助 様

貳 匁七分五厘 乍延引御落手 (莊野源六氏藏)

覺

一、貳 匁七分五厘

右之通進じ候 是は年内安太郎罷越候節遣候處 彼者失念及遅々候段氣之毒奉存候 乍延引御落
手可被下候 以上

三月 四日

安 貞

源 介 様

詩 轍 御 返 し (莊野源六氏藏)

此間は暫時邂逅其日薄暮分攀山之薜蘿玉章還壁猶處々之書狀進じ候 無爲殷公喬則幸甚

五 月 朔

す 武

萬世 詞君

詩轍御用に無御座分。御返し可被下候 毎度乍御面倒此書狀相そへ御封し被下 藤井安右衛門様安
貞と被成 藤永方へ一部御頼可被下候奉頼候 以上

名字 永頼 は (莊野源六氏藏)

名字

永頼 字萬世

舜典曰 萬世永頼

安永己亥六月吉

三 浦 安 貞

莊野太郎殿

君侯引見ニつき御賀被下 (莊野源六氏藏)

此間は君侯御引見誠不存寄御眷顧有難仕合 以來家門の榮と存奉候 御賀被下兩品御贈被下 御
深情難申盡 忝奉存候 右御禮申上度如此御座候 他重て可申述候 恐惶不悉

六月七日

三 浦 安 貞

莊野源右衛門様

年尾として御挨拶 (莊野源六氏藏)

客冬の貴札落手 御清安嚴寒御凌被成珍重奉存候 就は爲年尾御挨拶 御樽肴藥料壹封 被懸貴
意 忝致受納候 右御禮申述度如此御座候 恐惶謹言
尚々修令御加筆之御禮何角一同宜敷申述候 乍筆末御兩親様可然奉頼候 家語御會讀御座候由
文風漸開候趣珍重奉存候 以上

正月四日

三 浦 安 鼎

須摩屋源右衛門様 奉復

年尾御禮として御使札 (莊野源六氏藏)

如仰歲除相迫候 御闔門御多祉至祝不過之候 然ば今日は御多事の内爲年尾御禮御使札御樽肴
御藥料被懸貴意忝致受納候 萬縷來陽可申承候 乍末筆御兩親様へも可然奉願候 猶所々書狀御

届被下忝存候 猶又目錄は不致候 所々返書御届奉頼候 恐惶謹言

極月廿五日

三 浦 安 定

莊野源右衛門様

小兒出瘧之處 (莊野源六氏藏)

貴札忝致拜見候 彌御平善 寒威御凌被成奉珍重候 然ば手前小兒輩出瘧之處 何も輕十數日起 復安堵仕候 右爲御見舞見事之御肴一折御惠贈被下 不淺祝納仕候 右爲可申謝如是御座候 恐惶謹言

十月廿八日

三 浦 安 貞

莊野源助様 奉復

見事御肴御嘉賜 (莊野源六氏藏)

錦字披封 秋冷御安健被成御座恐悅奉候 拙御尋 無恙罷過候 御安意可被下候 今日は太郎兄 御出思召有之候 少々御不出來 俄に御止之由 使物語 早速御平復之程奉祈候 見事御肴御嘉 賜忝幾久賞玩可仕候 乍慮外皆様可然奉願候

轉藥も可然候 (莊野源六氏藏)

(切)可宜候 拙ともいついつより御進め申度候得ども御難儀に思召候半 指扣申居候 折角御服用被成候 轉藥を不被成候由 被入御念候御義 是又拙之久敷御藥進候義 思召次第に而御轉藥も可然御事と奉存候 一、日出之一封慥成ル便に奉願候

鹽飽屋に居候事 (莊野源六氏藏)

御再答拜誦 御平安奉賀入候 義善師乏義被入御念候義 彼僧勝手に宜敷候故 鹽飽屋に居候事 御心に御さへ被下間敷候

一、正字通御取可被成候 夫故脇かた承合不申候 披露仕間敷候 一、紙

高橋氏様御望次第御上け可被下候 帳面私方へ御扣可被下候 以上

六月十六日

三 浦 安 貞

須摩屋源助様

手本宜敷物無御座（莊野源六氏藏）

梅雨中如何 山中無事 令郎御壯健 長二郎殿御出精 拙とも毎日ねむるねむる素讀とも承候
一、此内古野便書狀進候 定て相届可申候 右申進候紙藥種等此節御遣し可被下候 尤少分の用
事折節申進候 御むつかしくば可有御座候得ども 通一通御認可被下候 無左候ては覺不申候
藥種と買物混してあしく候はは 二處に御付可被下奉頼候

一、長太郎殿御手本宜敷物無御座 今之千文も子昂と申事に候得とも どうやら偽筆之様にお
もはれ申候 近日書用大阪へ申遣候間 其節徵明一本可申遣候 若御用に無御座候得ば此方望手
可有之候 先御沙汰申置候

一、此内は舊杵英平も御宿仰付忝奉存候 心頭難盡書候 恐惶謹言

五月廿四日

三浦安貞

莊源介様

石碑螭首の義とく（莊野源六氏藏）

此間は逗留乍例御丁寧御馳走忝奉存候 其夜帶月無恙致還山候

一、此内藥申進候 藏出へも御頼申候へ共 今以無便候て歸
不申候 今日之便奉頼候

一、書狀猶又奉頼候

一、石碑螭首の義とくと相考候處 篆額と圭首との間に螭を

二つほり申事にて螭を頭に置き候事にては無御座候 もよふ

は御考次第 大圖は右に記候通に御座候 此段斗周翁へ御傳
可被下候 以上

九月十六日

三浦安貞

莊野源助様

行平鍋三つ入掌（高田龜市氏藏）

御平安奉賀候 河豚集略平川氏より落手 秋吉方書狀 行平鍋三ツ 並藥種入掌 猶又秋吉ニ銀



札入書狀御願申上 的便御届可被下候 以上

十月 七日

安 貞

莊 源 介 様

辨分より暮候へとも (來浦、吉武郁爾氏藏)

先頃逗留の間彼は御世話被下 不淺忝奉存候 爾來御平安奉察候 昨辨分より暮候得とも 無恙
歸宅今日は又々今在家へ罷越 御約束の反鼻霜少々進候 他の書狀共又々奉頼候 不備

二月 廿八日

三 浦 安 貞

源 助 様

當春は御婚儀 (姫島、江原虎二郎氏藏)

一筆致啓上候 然は當春は御婚儀御調被成候由 御満悦の御儀漸昨日承候 御歡乍延引 如斯御
座候 輕少の一種表寸志候 恐惶謹言

卯月 十四日

三 浦 安 貞

奥津左大夫宛

急流中勇退御手際ニ候 (奥津幸雄氏藏)

先月十八日貴書昨夕落手仕候 暑中御微恙又々御動御勝不被成候段 魔軍幽僻の地ニ窺窟相構
時々爲致劫掠候と相みへ候 秋涼も近日推移候得とも 消金の餘烈強相覺候 折角御自愛御快復
奉祈候 右躰の御義故 兼て御噂も御座候 御脱駕の義も御手短御取計ひ 追々御挂冠も可被
成段 無事ハ不存候へとも 如拙急流中勇退御手際と奉存候 近々御左右可承 猶緩々風月を
も相伴可被樂候 成程世ニハ鼎革の風聞ニ御座候へとも 若待成功拂衣去武陵桃花咲殺人
とも李白ハ申候き 拟拙恙毎々御尋被下忝奉存候 五月四日已來 伏枕色々變態多御座候へ共
近日ハ順復食事も慥相進 氣分も宜敷御座候、乍去筋力一向無御座 他ノ扶持ヲ不假と申位ニ
而御座候 讀書等ヲ隨分可仕候 今一月餘も保養相加候者 平生ニ復し可申候 今日始而筆取

申候 不分明の處御推覽可被下候 御令聞様 御賢息様可然奉願候 且拙恙難義の時分 兒女
輩婚嫁の義も無據指急相形付候 御丁寧ニ御紙面忝被仰下候通 安心仕候事に御座候 秋暑折角
御自愛奉祈候 恐惶謹言

七月三日

三浦安鼎晋

奥津左大夫様 明窓下

*奥津氏は代々杵築藩に仕へ、物頭役を世襲してゐた。左大夫惟孝は、明和九年家督し、天明五年隱居したとある。梅園の門に學び、陶齋と號し、寛政四年に歿した人である。

〔奥津君見訪〕

春溪洞口鎖煙霞 留飲煙霞洞口家 重向煙霞思洞口 溪流獨自有桃花

の一詩がある。

當主幸雄氏は陶齋四代の孫で、明治卅二年、帝大工科卒業、工學士として活動されてゐるとの事。

植田元左衛門宛

古牒致拜見 (朝來、植田榮氏藏)

古牒致拜見

一、今度依忠節 建長三年 大友丹後守賴泰

賴泰は大友の元祖 左近將監能直より第三代

建長三年は 今天明甲辰迄 五百三十四年なり

一、今度兩郷宗徒 親家

親家二人有 木付十三代の城主親家 木付六郎左京亮と稱す 永正の比の人なり 花押を○にするは 是は大友義鎮の次男新九郎親家なり 鞍懸の城主田原右馬頭親貫没落の後義鎮より其家を續かしめて 田原親家と稱す 天正の頃の人なり 二百年ばかりなるべし 此二通戦忠の義 眞

の感狀なり

一、今度自「最前」

此一通されて文字讀がたく候 されとも前書にみえ候坪井十郎兵衛みえ候へは 親家の家より出候とみえ候

一、父安藝守一跡

親家

一、父安藝守内跡

未考 親董

一、安藝守所望

天文六年 浮標に曰義鑑

義鑑は大友十九代の屋形修理大夫と稱す 天文六年より今天明甲辰迄 二百四十八年なり

一、父惣左衛門 天正七月。(七月は七年? 但親書其ま)

天明甲辰迄二百六年なり 文中七貫文知行七十石なり 府内前代城主日根野織部正藤原吉明この

事を長臣中村氏に尋あり 中村申狀古代永樂通寶錢一貫文 即正九百六十文也 壹貫文白銀四兩にあたる 此時の定價米一石を銀一兩として 錢十貫文米四十石にあたる 四物成にして 拾貫

文百石と成也 未位名々は一支配の名にして 今名主の名こゝに起れり

一、掟 壹通

掟と書出す事 天下の義 以下被相定候事 一つ書を以て被注置紙に書て其家々に被置申也と

小笠原家の書に出たり

一、代々扣目錄

以上九通植田家寶無相違候 植田家由緒別紙相そへ候外 綸旨うつし一通 建武は後醍醐天皇の時の年號に候 何れも御重寶可被成候 已上

天明四年辰閏正月日

三 浦 晋

植田 元左衛門 殿

附植田氏感狀後

大神姓相傳へテ祖母岳明神ノ裔トス、其裔大神惟基ナルモノアリ、豐後直入郡緒方庄ニ居レリ、依テ緒方氏ト稱スト云、又豐後風土記ヲ按スルニ、小片鹿^{ヲカダノカ}奥、小片鹿^{ヲカダノカ}臣ト云者アリ、緒方ハ或ハソレ、是ヨリ出ル乎、大友氏ノ豐後ニ來ラザル其族甚盛ナリ、大友氏盛ナルニ及ンテ、終ニ是ニ歸ス、蓋大友ノ家士三黨アリ、一ヲ御紋衆ト云、大友ノ紋ハ杏葉也、一族ミナ杏葉ヲ記章トスル家ナリ、一ヲ國衆ト云、九州ノ四姓丹部、漆島、宇佐、大神ノ支流ノ徒ナリ、一ヲ下リ衆ト云、大友能直豐後ニ入リシ日、鎌倉ヨリ從ヒ來リシ家ナリ、大神分レテ三十七家トナル、曰佐伯、曰雉城、曰田吹、曰小原、曰大津留、曰田尻、曰賀來、曰植田、曰小深田、曰數戸、曰木上、曰下郡、曰東家、曰橋爪、曰神志那、曰上野、曰徳丸、深田、堅田、夏足、長峯、都甲、眞玉、世利、

芦荻、阿南、陳、安藤、秋岡、朽原、由布、高城、奈須、胡麻津留、稗田、小手井、森迫
 惟基七男あり、長男三田井、次男阿南惟秀、三男植田七郎秀定、四男大野九郎基平、五男臼杵九
 郎權太夫惟盛、緒方ノ家ヲ繼ク（元暦ノ頃義經ニ身方シ、平氏ヲ追ヒシ緒方三郎惟義ハ此末ナリ、
 此惟義後上野沼田ニ配セラレテ、沼田氏トナレリ、此緒方ノ家ヲ臼杵トモ云）六男戸田次郎惟家、
 七男剛太郎惟道

秀定ノ子定綱、其子助綱、其子成綱、其子有綱。有綱ノ子清綱、遠綱、靈山執行有豪、親綱、康
 綱、女子ニ山科ノ女房、草牧ノ女房トミエタリ。

天明乙巳春二月

二子山 三浦 晋記

安東貞五郎宛

御城下に上り御目見マミエ（三浦榮二郎氏藏）

高田迄幸便致啓上候 彌御平安御仕廻可被成奉存候 周藏殿に此内木付にて逢申候て 御様子も
 とくと承候 拙者無恙罷過候 此内木付に被召罷出候 左の通御座候 お類へ御傳可被下候
 十一日 八時半時御城下に上り御目見仕候

上 御服上下（上とは殿様か）

席 御居間 是家老用人近習兒姓醫者御目見への處也 其處の御目みへは直直也チキ

御目見相すみ候て 上にも肩衣御とり 御はかまばかり 拙者も十徳とり夏羽織にて罷出候 夫
 より一つ間にはいり 間を六尺ほど置いて御咄申上候 暮かたに御庭拜見を被仰付 御前直に御先
 に御立被遊 付まわり御咄共被遊候 是は退屈可仕と思召候との御事と奉存候 御前にて御茶

御くわし 三日上り候處 三日共に被_レ仰付_レ 御くわし頂戴次の間に下り可被下と申候へとも 御免無_レ御座_レ御側にて御茶菓子頂戴仕候

夫より暮候ゆる支度被_レ仰付_レ候 一汁本三菜 御吸物御酒 御さかな 夫より夜四ツ半迄御咄申上 夫より下り申候 御烟草被_レ召置_レ候にも 御挨拶御座候

其日目錄頂戴仕候 金子二百疋也 御前よりの御挨拶御ぬし ソウシヤレ カウシヤレ 是は御家老衆と御同前の御挨拶に候 其外は手まへドウセヨ カウセヨ也 夜ふけ歸り候處 御紋付の御提灯中間とぼし 京原篤亭殿旅宿迄御つけ被下候

十二日 八ツ半より くれ六ツ迄

十四日 同斷

其翌日歸り申候 御籠可被下思召候へども 寵嫌と聞及被遊候故馬被下由 翌日御馬屋中間 御馬被下致_レ歸宿_レ候 右の通りの仕合無_レ殘處_レ御事に奉存候 ケ様に御座候へ共 御禮に廻勤と申て 御役人の方御禮に來候事に御座候へ共 拙者には廻勤の御禮に入不_レ申左様に御座候間 御家中の御挨拶格別に違ひ申候 御家老中根齊殿に見舞候處 挨拶かわり知行取同前の御挨拶に相成_レ歸り候節は 次の間迄御見立 中間に被_レ仰付_レ提灯被_レ下候

十四日には梅酒御前にて被仰付 殊の外酔申候 此段お類へ御物語被下悦申様に御申可被下候

今日急便あら／＼申殘候 恐惶謹言

五月十七日

安 貞

貞五郎様

お類袖留御祝儀として (御堂琴代夫人藏)

貴札致拜見候 寒威強御座候得共 御母堂様始御平安御入被成珍重之至ニ奉存候 隨而愚老無恙罷過候御安意可被下候 然者お類袖留御祝義として 重之内並御肴被懸貴意被入御念痛入 忝受納 修令夫婦も宜敷御祝詞御禮申述候 且又お類拂手形兩通相調進_レ之候 御受取可被下候 隨而追々可_レ被_レ下_レ御參_レ奉_レ存候 乍去嚴寒と申 御繁多奉察候 御出も御同然奉存候 御見合次第可被成候 お類も御同様と奉存候 嘸々萬端御取込と奉存候 乍慮外 皆々様へ可然奉願候

恐惶謹言

十二月十四日

三 浦 安 定 晋

安東貞五郎様 奉復

*長女お類は、まだうら若くて安東貞五郎にといひであたが、其袖留の御祝儀として、重の内を一族に頒つたとあるが、

袖留とは振袖を常着の長さに袖をとめるといふことで、男女元服以前に用ゐる振袖は甚だ長く作つて、腋下を縫うてないのだが、之を縮めることで女兒の元服祝の事である。して見るとお類は元服前に嫁いだものであらう。拂手形とあるはお類へ金を手形にして届けたものと見ゆる。

瀬戸田政藏宛

お祭に御招被下 (安岐、中島穆氏藏)

貴章致拜誦候 冷氣御渾家御安健御凌被成珍重奉存候 此節御祭に付定藏殿御迎御遣被成御歸し
申候因て 世倅並又五郎御招被下忝奉存候 相勸候へ共 小兒故彼是と申候故無據御斷申上候
右御答旁御禮申上度 如斯御座候 どなたにも宜敷奉頼候 恐惶謹言

十月五日

三浦安貞

瀬戸田政藏様

一同御禮申上候 (中島穆氏藏)

覺

一、御祝儀 壹封

一、御樽 壹樽

一、御藥禮 壹封

右

一、壹封 愚妻へ

一、壹封 拙息へ

右

何も千萬忝 一同御禮申上候 已上

極月十三日

瀬戸田政藏様

三浦安貞

小串逸鳳宛

病人容躰承知致候 (手島辰次氏藏)

先頃者御手教致拜見 殘寒兎角退兼候處 愈御清福御凌被成珍重存候 然者病人容躰委細被仰越致承知候 御書面之趣ニ而相考候へは難治之症と相察候 病家懇請難辭致投劑候へ共 存寄有之ニても無御座候 主方原ト格榔湯 加硝子丸並綠蒼丸相投候 最初ハ蒼龍丸相投候 一、去冬參上致候節拜見致候 菊苗少少御惠可被下候 時候も宜敷可相成幸便奉願 岩戸寺池普請ニ而 御代官も出郷被在候へは幸便可有之哉と奉存候 名札御付可被下候 猶ジャガタラ苗も一本御願申上候 右之段可得御意如此御座候 恐々謹言

二月廿日

三浦主齡

小串逸鳳様

*小串氏は來浦の人歟、「秋日來浦小串氏莊」の一詩がある。

窓前孤嶼畫園晚 岸上清風蘆荻翻 不向人間弄機事 相追鷗鷺泛虛舟

無宛名

始終の美名を全ふし給ふ様 (杵築 石田伯介氏藏)

晋謹て考ふるに 古仁徳天皇の御あらかは雨もり露そほてり 其古を推せは 大神宮は御供三杵にしてかやぶき也 御當代東照宮は江戸修覆の義はあしへを遣し給ひ候 新造の義は御とどめ被成候 何れの御代にや 下馬札新敷出来候得は 水戸侯より御當代の御法に新規の義なしとて御老中へ御沙汰有之 古の見つけ柱をかへ候とも承候 近來所所土木の事盛に相成 八坂兩子も出来 當時御宅思召立候由 屋は雨もり風入候而は用立不申候得は 定てやむ事を得ざるの御事と奉存候 御支配なども當春大變 定て御聞にも達候半と奉存候 左候は人民飢寒の徒も多可有御座候 文王の民つかふ事假るかごとくと申候 縣令の類は元より民をかるものに候 文王民をつかふ事かるかごとしと御座候得は かる人に手際は別段の事かと被存候 民をつかふに時を以て

するはもとより聖人の教に御座候 當君の儀を承候に民をつかふ事甚御苦勞に思召風聞に承候
定て是底の義は御思慮の上とかくに申上るに不及事とは奉存候得とも とかく手付の役人と申も
のは存寄候ても人情にひかれ申さぬものに御座候 拙義は切磋琢磨を以て 君と交を結候得ば
君始終の美名を全ふし給ふ様にと奉存候 古人雖有百術不如一清と申置候 とかく民人等役目に
罷出候ものに 御蒸愛壹人にてても御減少費省候様 肝心修造あしく候とも美名不多候 尤兩子と
も當春出來申候得とも 是は存寄御座候て一言も不申候 成事は不説とも申候得は 無用とも存
候へとも 千一人民痛苦の聲にても有之候ては 酸鼻仕事に御座候 少少怨言御座候ても主令の
耳には入不申物に御座候 御老父様も御堂上に御座候得は いらざる指出にても可有御座候 御
覽後唯献芹の志と思召御怒被下間敷候 已上

八月廿九日

三 浦 安 定

文徵明草書も参り候

(杵築、石田伯介氏藏)

開封御平安之段承知欣然不_レ過_レ之奉_レ存候 然_レは兼て御頼の廣澤墨帖参候故 此節書生方より進
申候 此外にも宜敷物と被_レ仰候 歐陽詢行書 文徵明草書参候 文徵明進申候 歐陽詢も御望
に御座候はば進可申候 董其昌も参候 是は拙者取申候 其外小部物参候得共皆形付申候 唐詩

聯礎と申物一部相殘居申候 左傳の義及御尋致赫顔候 設書難字過らしく御座候 但今日あたり
中はをこし申候 萬事期後音候 恐惶謹言

三月十九日

三 浦 安 貞

藝苑談拂本出候

(大阪、森繁夫氏藏)

通鑑漸十卷はかり見申候 孔雀樓筆記 藝苑談拂本出候 二部共七十錢はかり いつれも清君錦
著書ニ御座候 御用候者可被_レ仰遣候 拙老老懶相催〇〇〇 先者御念懸被下間敷候 御老人様
にも 御致意宜敷御憑候 恐惶謹言

七月十二日

三 浦 安 貞 晋

眞の寒水石

(佐々木高重氏藏)

契濶不相像候 頃日怡歌文而一家を閱するに 播州明石煎鹽之沙地底寒水石あり 是積年鹽鹵之
凝結する者 狀似_二水精_一而質軟ク水ニ浸す事久なれハ水と成 是眞の寒水石と御座候 御地煮鹽
之地にて御座候 地下此物御座有間敷や いつれ地に入る事淺くハ有間敷歟 御試被下間敷や
昔年月山の寒水石とて得申候はハ………… 同様と申候 質不軟 透徹之色 無御座候 草々已上

四月二日

三 浦 安 貞

銅君より承り慰悦 (佐々木高重氏藏)

御投書拜誦 爾來御壯健御暮被成欣慰不過之候 拙無恙罷在候 誠此節銅君御見舞久々にて申承
致慰悦候 此節御同伴も可被成處 御指合ニ付 無其儀段御尤奉存候 折角御自重御兩親様にも
可被成御力添奉存候 恐々謹言

三月六日

三 浦 安 貞 晋

尙々手野村孝子御助力之義段々御世話 此節自德藏殿落手忝仕合奉存候 可然先様にも奉願候
已上

健吉殿にも御歸の由 (出田新氏藏)

貴墨致拜見候 如仰久敷御様子も不承罷過候 先以て皆様御平安被成御座大悦奉存候 弊方無恙
罷在候 御意安思召可被下候 就者今日ハ御人遣候付 一種兩囊ニ〇〇乍例忝受納仕候 健吉殿
にも御歸可被成之由 任其上候 余事期後音候 猶皆々様ニ可然奉願候 恐惶謹言

三月廿一日

三 浦 安 貞

松原善太郎宛

遠路の御尋問 (中島穆氏藏)

一筆啓上仕候 寒威益御安泰可被成御座大悦奉存候 然者此間は遠路の處折角御尋問被下忝奉存
候 併不存寄御來臨。略の至思召恐入奉存候 暮に及御途中定て御難儀可被成案仕候 以參
御禮申上候筈御座候得共 兼て御心安被仰下候に付 乍略儀以愚札如斯御座候 元藏様にも宜敷
奉頼候 恐惶謹言

霜月十三日

三 浦 安 貞

松原善太郎様 玉几下

成吉儀兵衛宛

茅屋御立寄 (中島穆氏藏)

遙遙不得芳意御疎濶罷在候 然者此間は御通行に付 茅屋御立寄被下忝奉存候 折柄他出不得御意遺憾の至御座候 其節は不存寄一品御携被下忝奉存候 右御禮申上度如斯御座候 恐惶謹言

九月廿五日

三 浦 安 貞

成吉儀兵衛様

成吉室平宛

菲薄の御菓子 (中島穆氏藏)

爾來愈御徒然御入可被成奉存候 菲薄の御菓子如何敷御座候へ共懸御目候 折角皆皆様御自愛可被成候 どなたにも可然頼候 已上

五月廿四日

成吉室平様

定藏宛

爲年尾御祝儀 (中島櫻氏藏)

彌御壯健被成御座奉大悅候 然者今日は爲年尾御祝儀御使札兩種 並參子共方迄御祝被下忝奉存候 甚取込草々皆々様へ可然奉頼候 已上

極月廿五日

三浦安貞

定藏様

中野升右衛門宛

杉苗五百も六百も所望 (安岐、永松壯三郎氏藏)

貴札致拜見候 彌御壯健に餘寒御凌被成珍重奉存候 拙も無恙罷過候 然者當年西國思召立候由珍重に奉存候 近々御出船の由 最早得御意間敷候 折角御壯健御歸國綏々可得貴意候 御餞兩種修令より進上可仕候 恐惶謹言

二月九日

三浦安貞

中野升右衛門様

再白御令兄様へ申上候 頃日の御書付委曲承知仕書かへ申候 夏大豆の一件は一向不案内にて合點不仕候故かさ不申候 様子委敷本書に書入れ候程に御認被下度候 來る十二日頃壹人進可申候 近々清書成就仕候 廿日より木付 (木付は杵築) へ差出し申度候と御申可被下候

一、鳩藏殿へ杉苗の事修令より御頼申置候　よき雨もふり候　壹人取に遣申筈に御座候　横手より奉公人召置候　繪踏にかへり候　其時分人寄申つもりに御座候　無間違奉頼候　先三四文位の苗五百　見よく候はば六百も致所望候　此段も御申通可被下候　已上

小深田磯右衛門宛

取込の處逗留（江原氏藏）

貴墨詳要　催寒冷相増候得共　御渾家御壯健御入被成候段奉賀候　誠此内は御尋問申入候處　御取込の内逗留御馳走忝奉存候　任御心安到到御謝辭も不_{タウタウ}申述_{タウタウ}甚失禮の至　還て預御挨拶痛入奉_レ存候　且今日は健吉殿御入來御手作の一種御惠投　猶妻小兒迄兩品御遣被下忝奉存候　拙事も仍_レ舊消_二寒光_一候　御懸念被下間敷候　他事期後日候　恐惶謹言

霜　月　八　日

三　浦　安　貞

小深田磯右衛門様

落 正 平 宛

戸次軍記代八匆八分にて候 (朝來、植田榮氏藏)

先頃は御立寄申色々御馳走 殊安二郎等逗留段々彼は御取持被下忝奉存候 爾來無異事罷暮候
御安意可被下候 然は戸次軍記代銀八匆八分にて御座候 錢にて御座候得ば 百替にて御座候
最早年内一盃の調に社相成申事に御座候 態々御人御遣被下間敷候 草々
尚々御袋様御内様御舍弟様 何れにもよろしく奉願候 已上

十二月廿一日

三 浦 安 定

落 正 平 様

家中變化驚入候 (佐野氏藏)

先頃御狀 美忠方へ御狀 御詩意承候 返答仕候とも覺申候 しかと覺不申候 御免可被下候
扱御家中變化驚入候 御〇之節右之様子御しらせ可被下候 已上

五月一日

安 貞

眞 右 衛 門 様 (落正平と同人とある)

佐渡屋政左衛門宛

中汲は拙者甚好物 (佐野平作氏藏)

御使札致拜見候 窮陰風雪之頃御清安御凌被成大慶奉存候 令郎先月御心克御様子 乍然少々御外邪之由 折角御保護可被成候 春來又々御様子相伺可申候 今日ハ遠路態々御使 中汲(中汲は濁酒のうはずみ)一樽御肴料一封被懸御意不淺受納仕候 中汲ハ拙者 甚好物ニ御座候へ共甚難得品御心ニ付候義甚樂ニ奉存候 無餘日御座候へは 何事も期來陽候 皆様可然奉願候 恐々謹言

十二月廿七日

三 浦 安 定

佐渡屋政左衛門様 奉復

尙々此間ハ從志保屋 御使御藥禮等被懸御意忝奉存候 且又元藏より獺肝參候へ共 拙者新鮮を得候故 元藏より參候をは返し申候 犀角と一品分ニ御才覺御遣可被成候 已上

山田孫一宛

從長崎碑文參り候 (山田榮氏藏)

良久敷絶音問候 彌々壯健御入被成奉賀候 然者從長崎碑文參候故指上申候 尤字の壞有候クツシてちと石工氣ニ合間敷や 乍去致方もなく候 手跡ハ吳興之周壬錄書候 是を書候事却而大慶ニ存候由 長崎來狀懸御目申候 此狀御覽已後御返可被下候 尤此碑文並來狀市原氏寺川氏にも御みせ可被下候 今日到着直ニ進候故 此方にては点檢も不致候 萬々得貴意可申上候 頓首

五月十日

三 浦 安 貞

山田孫一様

* 山田氏は長州で伊佐氏と稱してゐた。慶安の頃、杵築に移住し、杵築侯に仕へてゐたといひ、孫一は文化三年寅九月に歿したとある。家に戰國時代伊佐氏と稱せし時の古文書を多く藏してゐる。

賀來吉左衛門宛

眞玉へ片便を得候故寸楮 (佐野秀子氏藏)

無程ことしも及暮春候 如何御過し被成候や 山中依然として罷在候 且此内書狀書物相そへ進候 今程へ御落手被成候半と奉存候 高田便稀ニ御座候て書狀も出し不申候 日出への御狀ハさし遣候 對客記事承候故津らん (津らんの文字、誤寫乎) 繁節別而序文めつらしき事とも承候 此節ハ眞玉への片便を得候故寸楮 記事御還璧仕候 此内ニも見へ候 油幢小品日本考 是も其内御かし可被下候 大疑義人蝦夷采覽等之品必御惠投奉希候 且先書之御報其内と奉謝候 頓首再拜

三月十一日

三 浦 すゝむ

玉 淵 君 梧右

* 歸山錄に「玉淵字は子登、中津豐後町に住す。我四十年來の相識なり、將に西遊せんとし中津に留まること數日、共に語る、玉淵和書を好み且つ俗間流布の書を藏す、近頃健島氏宮本武藏の事を書く、玉淵之を示す、猶武藏の碑文を出して示す」云々とある。

豐國紀行御惠投 (佐野秀子氏藏)

正月廿日年首の御賀詞落手 御持恙も次第御心好御踰年被成候御様子奉珍重候 自是も祝書指出候 定而御入掌と奉存候 十二月十六日の御鴻書も至春拜見 此内答詞申進候 豐國紀行 (豐國紀行は貝原益軒の著) 御惠投始而彼翁 (彼の翁とは益軒の事なり) 敝藩にも舉趾の事承候 右被尋候宮内の舊宅もしれ候得と 舊跡も殘ことなかるべく候事 別而悅申候 今暫恩借可仕候 御序跋御探索候事とも 別而有用の御文と奉存候 注進目錄受取申候 夾板等を元〇集彼は御返申候迄御預候 一、豐前後分れ候節探索不仕候 若見當り候へ者可申上候 彦山屬豐前候事同様承知 釋大潮英彦山志にも此事ハ無之様に覺申候

一、兩所の書狀其内得便相届可申候

一、播〇氏苦マ敷奉存候

一、八居題咏急ニ一覽仕度候恩借奉希候 石川覆醬集一寸考索ニ入申候忝奉願度候 鏡謙益列朝

詩集御地ニ有之候様子に承候故 此内倉文學（倉文學は倉成靜清也）ニ承候處無之候 もしや貴君方には無之やとの事ニ御座候 もし有之候は暫御かし可被下候

一、詩法要略年内御返進申候 定而御落手被下候と奉存候 兼而申候通 詩轍上木も可仕かと申ニ付 詩類詩話類吟味仕度事多候得とも 寒郷無書こまり申事のみに御座候 先々答意申述候迄に如是御座候 恐惶謹言

正月廿九日

賀來吉左衛門様

三 浦 安 貞 晋

*賀來子登、諱元龍、字子登、通稱吉左衛門、玉淵は其號である。又九九子と號し、亭を彩雲といつてゐた。中津の人で醸酒を業としてゐたが、父に繼いで町年寄となり、又銀鈔の事を司つてゐた。

先祖の惟春といふが、下毛郡賀來村から中津に移り、子登の父惟政が、濱田氏を嫁り、子登を生んだ。梅園先生と藤田敬所に從學したものだ、其の性獨立不羈、凡俗と合はなかつたので、町年寄を辭した後は閉戸し客を謝し、以て書を著はすを樂としてゐた。天明甲辰四年、六十九で歿した。梅園その時六十二歳であつた。其碑文は梅園先生の撰である。

今昔物語拂本有之由（佐野秀子氏藏）

年賀の御書兩通共落掌申候 春來仍舊而被混塵事候段要退遊候 荒歲故御城下も物騒ニ隔川失火及數百間候由 因而指揮旁御働勞御尤奉存候

一、今昔物語拂本御座候由 被仰聞忝奉存候 乍去當時相調候義ちと内分難仕候故 強而御乞難申候 何卒承諾此邊にも相手御座候様にハ仕度候如何

一、通かけ被成候義ハ相成申間敷や 夫共に慥に相手相しれ不申候ハ思召次第奉存候

一、此節歡樂筆談二王外記進之候 緩々御覽可被成候 挾板の義龜相には御座候へとも其御地へ被召置御遣ひ可被下候 必御返信被下候に及不申候 民德歸厚等追々一見仕度候 橘窓茶話五事略何卒御うつし取可被成候 其上拜借仕度候 甚所冀望候 當年に又其語いじりかけ候 如何様當年中ハはか／＼敷書物も見得申間敷候 猶期後慶候 恐惶謹言

二月十日

賀來吉左衛門様

三 浦 安 貞

綾部要哲宛

秋吉産科段々發興（荒卷瑛次氏藏）

、、、（切）御平安に御踰年奉賀候 從、是も書狀指出候 御落手と奉存候 拙者無異事罷在候
御慮念被下間敷候 然者産科一流秋吉生傳來此方に取 甚重寶ニ存候 貴兄も何卒暫御入門御傳
候様にと吳々 猶御親父様よりも此段自拙者 申入候様ニ御頼にて御座候 子女子も高年と承候
へハ可被成事ニ候者 御急被成度御事奉存候 秋吉産科段々發興ニ御座候 恐惶謹言

三月 四日

三 浦 安 貞

綾部要哲様

尙、、、（切）毎々御加筆可然御禮申上候 且又敢語今比ハ大かた及成就にも及候や 段々御
苦勞忝奉存候 左候へは 渭陽君に一部呈上仕度奉存候 如何可致哉 御賢慮次第先様不苦
思召候者可然御とりはからい可被下候 已上（此外綾部要哲宛二三通あるも、後項に掲ぐる事にした）

賀來泰安宛

加藤周平歸藩之上（賀來榮二郎氏藏）

遠方御使札忝拜見 先以曩日は遠路御芳訊忝慰積鬱候 御歸路夜中殊風雨 御難澁の段奉察候
先々御無難御歸着 其上御令閨様御分婉男子御出産の由遐祝仕候 扱又康二子之義段々御世話被
下不淺奉存候 重疊熟譚不相成之旨奉承知候 其外宜事も有之候ハ 小子迄可被仰聞奉願候
一、彫刻の義 御歸宅の上佐田屋御兩家へ御嘶之處 當時御入用銀子有之 御世話可被下之旨
御厚意忝奉存候 何卒左様仕度奉存候 乍然御推察之通 此節孫文子閉塾 右之銀子も郷中借
候。○相成候へは 急ニ取立の處甚無覺束 千一取立相成候とも皆濟可相成哉も難計候 御存之
通去冬已來在中噪擾ニ候へは 右躰の義ハ一向貪着ニも及不申様ニ相見申候 重疊之處相知れ候
は、拙者口入も成否は無覺束候へとも試可致候 此度加藤周平も出郷ニ而 相談相手も無之候

右刻料拙者初より預り不申候へは 其内加周歸藩の上熟談仕 兩子へも周平より内々懸合候様ニ可仕候 其上ニ而何れとも貴答可仕候 加周歸藩も未相分り不申 何れ四五日之内乎と奉存候拙者も十五日已後ニ相成候へ、佐野迄可罷越候間 其節拜顔御面談可申 先ハ貴答早々如此御座候 取込亂書御推讀可被下候 恐惶謹言

梅園 晉

* 賀來泰安、佐田村の人、諱驥、字は千里、通稱太庵（梅園先生は泰安又泰庵の字を當つ）幼にして異彩、喜怒を色に出さぬ爲、或は癡者と呼ばれてゐた。然し讀書を好み一讀すれば終生忘れぬといった程よく物を覚えてゐた。十七歳で梅園先生に就學する。七年に三度しか父母を省せなかつた。先生も其詩の天材を見て、詩を以て名を成せ、千首を作れば必ず詩人となれると勵ましたが、初志貫徹に力め、先生の勧めも用ゐなかつた。先生歿して始めて去つて京師小野蘭山に本章を學んだ。蘭山又本章を以て天下に名をなせと説いたが、聞かず、父の遺托を重んじ歸り高田町に開業、仁術を以て鳴つた。常に梅園先生の窮理の説から病因を原ね、能く奇中してゐた。文化十四年三月、享年五十七で高田町に卒した。碑文帆足萬里先生の作、二見佐之、飛霞、亦本草學を以て知名である。次の詩は梅園が泰安に贈つたもの。

送賀千里辭梅園還郷上

梅園 晉

丹鼎煉金古幽洞	洞天有路入瀛洲	濯纓水自僊源瀉	種玉山懸煙月浮
世上文章鸚鵡賦	人間意氣鸚鵡喪	停鞭試見春園色	風散飛花動暮愁

詩轍梅園集板木紛失（賀來榮二郎氏藏）

佐野玄盟御地へ參候付 呈一書候 溽暑之時候愈御清福可被成御凌珍重存候 劣義無魔事相凌候乍慮外御省念可被下候 就て先達より詩轍梅園集等 板木一件に付毎々及御懸合御世話被下忝奉存候 源泉兎角申譯を主と致し 板木取返之事相分り不申候 此方坏意外ニ仔細無御座候 是迄之刻料も紛失ニ而致方も無之 只紛失之板木取返し申度斗ニ御座候 此上源泉病氣快復不致か又は快氣の上亡命致候か 異變御座候節は手懸り無之様相成可申 兎角延々ニ相成候而ハ甚不安心之至ニ御座候 右板木髓に取返候と申儀相分り 此方安心ニ相成候程の人 加判の一札に而も受取置候へハ 已後源泉如何様へ異變有之候而も手懸り相残り候間 無據官裁ヲ仰様ニ致候而も板木ハ取返し可申候 外ニ仔細無御座候間右之趣意御含御取計可被下候 板木只今手ニ入不申候而も安心さへ相成候へは宜敷御座候 先日源泉書面にも 此上贅語正誤改刻致度杯申出候由ニ候へ共 左様迂濶之儀ハ乳臭之小兒を欺候様なる事に而承知難致候 此位の議ハ御雅量も可被下候委曲玄盟口頭可申陳非筆紙所盡 恐惶謹言

五月廿一日

三浦主 齡 黃

賀來泰安様

若狹屋老人ニ對し愚案未決 (賀來榮二郎氏藏)

先以過日は寛々拜眉大慶仕候 今日午後無難歸山仕候 御約束申置候藥十斤 今日の便指上候
御入手可被下候 長屋横物壹枚書候筈御約束申置候 今日急便妄却ハ不致候間 後便可呈候 左
様被仰通可被下候

一、長屋病人 私經驗ノ方ヲ以テ調合致候 三和散相用度奉存候 只今は便滑瀉致候間 半夏瀉
門か滑石相投候

一、若狹屋御老人投劑致候様 其節御噂有之候 愚案未決定不致候 殊ニ今日ハ急便故其時合も
無之候 得と相考其上何れとも可仕候 數十年痼滯之兎豎一旦ニハ不可除候 只一時之變調ニ
過申間敷候 其内疝ノ症ヲ挾ハ不致候哉 高案如何 何分附子吳茱萸面香川練子等之處乎と奉存
候尙賢案承度候 何分此節は勿々不違究尋候 頓首

六月二日

三 浦 修 齡

賀來泰庵様

尙々本書之旨若狹屋ニ御通達可被下候 甚細悉之人ニ御座候へば 私疎畧ニ致候様ニ被思候而
ハ氣之毒奉存候 大年(大年は、弟の玄龜なり) 醫業之儀御工面被成置可被下候 得と相考決定之處
可申上候 已上

鶴崎より大黃參候 (賀來榮二郎氏藏)

餘暑尙甚敷御座候處 益御平善可被起居珍重奉存候 小生も此節豐田病氣ニ付 又々罷越し同人
も起色無御座候迷惑仕候 右ニ付先日ハ順々御世話罷成候由忝奉存候

一、佐田屋御養弟 先日御引取被成候哉と奉存候 炎氣之節御苦勞奉存候

一、鶴崎より大黃參候 壹斤ニ付三拾七匁四分とか申來候 現銀ニ而は三拾貳參位かと相覺候
私方に書付御座候得共 得と覺不申候 少々ハ下直ニ御座候 御入用ニ候は、幸便之節 壹斤
差上可申候 草々

七月十八日

三 浦 修 齡

賀來泰庵様

貴塾兩雛蒙惠來候 (賀來榮二郎氏藏)

奉讀益御多福被成御座候由 奉大賀候 僕未逗留仕候 小兒病症進退不定 今日者宜敷御座候
僕疝痛も少々宛宜敷相覺候 然者今日者 貴塾兩雛生蒙惠來辱奉存候 鮮魚御惠被下 拜受仕候
逗留中手本相認可申候 拙筆不勝忸怩候 他者期後音候 已上

六月四日

賀來泰菴様

三浦修令

一九八

學業近來進一步候様相覺候 (賀來榮二郎氏藏)

懇篤之瓊報拜讀 新寒之時候 益御靈清被成御座候趣 珍重奉存候 然者古脉法圖解御投却被下入手仕候 一見識賢衷にも相合候旨 御尤奉存候 村山氏性質魯鈍之人 只用力專一成得一家之言可畏

一、賢兄益御精敏御作務珍重奉存候 小生牢落依舊候 只於學業近來進一步候様相覺候
一、牡蠣肉一筋御惠被下拜受仕候

一、平野立仗參謁之由一向存不申 歸國之様子も承不申候 萬端春陽可申述候 恐惶謹言
十二月十七日 三浦主令

賀來泰菴様

僕以天之寵靈一再 (賀來榮二郎氏藏)

尙々 京師書狀尙〇ニ見せ 其上御返可申候 如諭佐藤先生物故噫傷の至奉存候 已上

芳牘拜歷時下商夷益御康平不轔慰悦奉存候、鰯生眠食無恙幸勿爲念 誠ニ病中ニは如熾之時候 御尋被下不任感荷之至候 僕以天之寵靈一再得視天地日月何幸如之 術業以聞御發行之旨御尤奉存候 前胡治嗽之奇方簞聽候

一、行余醫言之義被仰下 應答無言候 來ル十月彼地〇禮參上可仕候 其節取調可申候 此節失言ニて足下假令作愁叔擇書僕不爲恨

一、京師之來書御投示被下忝奉存候 如仰惡筆濫讀仕候、平安之様子ニ御座候 先日杉山書狀到來賢兄へ加筆申來候 別事無之由 植置しネデカネ艸麝香艸當年も萌芽 左之通發句申來候
そよと吹く草にも風の香り哉

右之通申來候 賢兄より一向御音耗無之如何と申來候 幸便書狀御投可被成候 蠻婦母子鬻養(鬻養は財を貪り食を貪る事) 依舊候由姫路屋よりも書狀到來仕候 先は勿々拜復亂書御推讀可被下候 已上

九月廿三日

三浦主令

賀來泰菴様

拙家養子の儀 (賀來榮二郎氏藏)

御使札致拜見候 時下薄暑之候 彌御安泰被成御凌珍重奉存候 弊地無異罷在候 乍慮外御消

念可被下候 然ハ拙家養子之儀 内河野村爲五郎と申人博三縁家ニ而 先日歸郷之節傳言之趣委曲被仰下致承知候 先書申條之旨尤千萬之儀奉存候 春ニ至自_レ此懸合之處 去年大夫迄内々申置候儀 君邊難相濟色々心配之儀而已に御座候 何卒折合之上吉左右申遣度心底ニ而 日又一日月又一月及延引候 寡君東觀之期も這候ニ付 毎々申立候處 大夫之取計間違之筋有之候趣ニ相聞候 乍然過を大夫に歸し候儀ハ難相成幾重にも事成就致し候様ニ相計度 種々手を盡し候へとも兎角相濟不申 來歲寡君旋旆_{（まがひ）}を相待候様にと申事と相成申候 乍然來年に至り 重疊無相違相濟候事哉是以難計奉存候 先書無理ニ致所望候儀ニ而 千一破談ニ相成候而ハ何分相濟不申 博三父子再會之面目も無御座候 誠ニ進退維谷之仕合ニ御座候 然處京屋小三郎近日當地へ參候様承候ニ付 右之人ニ致_二對面_一候て得と熟談致度心底ニ御座候處 今以て參り不申 日々企望而已ニ罷在候 來歲ニ到り重疊無相違相濟と申儀分り候て 先書乍不肖右之旨懸合可申 又とても相濟不申と申事ニ候て 一日も早く決定致度候へとも 去三日寡君乘船前後大夫始小子輩 日々紛劇中ニ而 及其事候暇も無御座罷過候 大夫之處今一應懸合逆も 不相濟儀ニ候ハ、不〇以壹人存意可得貴意候 先書の存念甚以相濟不申心配此事ニ御座候 此上重疊不相叶筋ニ御座候 乍御苦勞賢兄と一應日田へ御越 右之旨御申聞キ被下候様御頼申度候 毎々御苦勞御儀と奉存候へとも代人ニ而ハ相分り兼可申と奉存候 小子心底全以破談之存念毛頭無御座候 右大夫間違之筋

ハ筆紙ニ盡しかたく候

一、俊兒儀先日年回ニ而郷里ニ歸候處 今以逗留之由 如何之儀可有御座候哉 氣之毒之儀ニ奉存候 是ハ何れ不熟之事ニ御座候ハ、早く決定可_レ然奉存候 兩方共何ぞ格別之申分も有之間敷奉存候

一、油藥之方 段々御發明 カネトール之方御工夫之由 誠ニ天下之奇方 上自天子下至乞兒_{（一）}是藥方ニ而不治事ハ有之間敷 私ハ此方傳授ニ及不申 御調合之上箱御投可被下候 話止繁茹

五月十日

三浦主 齡

賀來泰安様

日田表一件御面談之上 (賀來榮二郎氏藏)

新歲の嘉儀御同意申納候 御舉家彌御清福 被成御重算目出度奉存候 弊廬依舊候 然ハ日田表一件御面談之上取計致度 彼方へハ未何事も懸合不申 舊冬博多屋へ飛脚便一禮申遣候 鍋屋の方へは未書通致不申 尤此表願も未相濟不申候へ共 多違變之儀も有之間敷と奉存候 其内日田表一件差立候而宜敷可有之哉 結納等も追々は差遣申度奉存候へとも先拜顔之上と存 延引罷在

候 早春御出も可被下様年内被仰候ニ付御待申 暮ニ若シ御多用等にも 御入被成候は、大年ニ而も其内御地へ遣し委細御様子承候様ニ致度奉存候 先御左右承度如此御座候 恐惶謹言

正月廿五日

三 浦 主 鈴 黄(花押)

賀 來 泰 安 様

尙々御家内様宜敷奉傳候

一、唐大黃甘艸下直之品有之間敷や承度奉存候

灸炷七萬五千送達仕候

(賀來榮二郎氏藏)

去三日之貴報相達忝致拜見候 漸寒冷相増候處 愈御康裕被成御凌候由奉慶賀候 天刑方御示被下忝奉存候 是ハ經驗之御方ニ御座候哉 治効有之候哉 如何 灸炷七萬五千送達仕候 毎々御面倒之御儀御世話被下忝奉存候 御同様梅黄之時節 寂々寥々之仕合ニ罷在候 珍敷治驗も無御座候 今朝も不相替 公私紛雜 草々 略筆頓首

九月廿八日

三 浦 主 鈴

賀 來 泰 安 様

此方病人今日益宜敷

(賀來榮二郎氏藏)

尙々小子も明日ハ歸藩仕候 今日の様子ニ而先々安心大慶奉存 是上宣布

此方病人今日は益宜敷拜見悅申候 精神餘程正敷 言語錯亂は纔之事に相成申候 昨夜中小水不通 今日兩度快通 食量無増減 氣力同様無大便 今朝食事 箸梔自分ニ持候而食事仕候 渴少減 今日快ク熟睡呻吟之聲も相止 咳嗽も少ハ輕ク相成候 昨日竹溫膽適中と奉存候 御者御投劑可被下候 已上

十一月十七日

唐本之醫書拂本御座候

(賀來榮二郎氏藏)

梅雨連綿益御清福被成御入珍重奉存候 先日は芳訊忝奉存候 無程御歸着被成候哉 然ハ其節被仰置候唐本之醫書拂本御座候 單方彙編^{三册} 一帙 金百疋と申候 御入用ニ候は、近便ニ指上可申候 御入用無御座候は、其段可被仰付候

一、昨日杵築より書中指出候 未相達候哉 御用立置候東洋方函御用相濟候は、御投却可被下候 且又其節御願申置候豐陽志御借用可被下候 急奉願候 右之段可得貴意草々如斯御座候 頓首

五月十日

三浦修齡

賀來泰庵様

尙々京師杉山書中到來宜敷申上候様申來候 其段貴君之御書中一向無御座との事に御座候 已上

久勞如何御入 (賀來泰二郎氏藏)

久勞 (久勞は久しき間) 如何御入被成候哉 先頃ハ御返書被下 早速相達忝奉存候 小子申候金星艸
即小 鳳尾 又々可懸御目候

一、赤足蜈蚣 蜈蚣ノ小ナル者足稍赤シ 此ヲ謂乎 又別ニ一種有乎 俗一寸ムカデト呼者ハ蜈
 蚣ノ子乎 別種乎 馬蛭ハトウメ乎

一、鱧魚 ハモト云者當乎 總ジテ綱目 魚類ノ説僉也 彼ノ人江湖澤中等ニ有ト云者ハ 此邦
 ニ而多ハ海中ニ有リ 彼ハ大國故大澤巨水多ク 此邦ニ不生川魚等定テ多カルベシ シカシ鱧
 ハ海魚乎 綱目ニハ生ニ九江池澤ト有リ 海鰻鱺何物ゾ

一、蜚蜋 糞糞中ノ黑蟲有翼者乎 轉丸等ノ事 僕不見

一、鼠酒 其後見出シ不申 虎酒ハ狗ト有リ

一、飛絲 本艸ニ每々有リ 飛絲入目ト有 何物乎

右數條不願煩謹乞垂示

五月廿六日

三浦修齡

賀來泰安様 (泰安は博物學者である故に斯る不審を糺したものであらう)

唐木香賤價之品 (賀來泰二郎氏藏)

今日ハ好天氣御出立被成候様ニ候ハ 懸御目間敷候 遠方之處御出被下忝奉存候 贅語彫刻之儀
 も定而御熟譚被下候儀ニ奉存候

一、唐木香賤價之品若有之候ハ御調可被下候 代札三拾匁御預ケ申置候 御受取可被下候 已上

二月廿七日

主 鈴

泰安様

御母儀様御不幸之段 (賀來泰二郎氏藏)

陳者 御母儀様 御不幸之段 承之 奉驚入候 御愁傷之程奉體察候 右御悔申上度 如是御座
 候 恐惶謹言

四月六日

三浦大年

賀來泰安様

京師又々大火 (賀來榮二郎氏藏)

大暑之時候如何御入被成候哉 小子無別事罷在候 近來御療治御發行奉察候

一、白井河野書狀二通御届申上候 先日参り候へ共 便無御座延引仕候 斧屋より書狀参候 宜敷申上度 別事無之趣ニ御座候 四月廿八日出之書狀ニ御座候 貴君始 我々共三人へ狀ニ御座候 今日見出し不申 又之便り指出可申候 杉山より私へ書狀参候 宜敷申上候様との事に候 河野玄泰先日下り候由 未逢不申候

京師又々大火 五月廿八日より廿九日晝迄 四條より大佛迄焼失と承候 委へ存不申荒々申上候

草々頓首

七月七日

三浦修令

賀來泰庵様

桂細根皮御座候は、 (賀來榮二郎氏藏)

桂根は當所参居候て札六匁位仕候 其上大根交り候而細根ハ少ク氣味甚不宜候 御考合せ可被下候

先日は御答書拜見 溽暑之候彌御靜寧被成御凌珍重奉存候 其便牛黄之丸銀而木綿反御買被下由ニ而 慥致落手候 御面倒の義忝奉存候 尙其餘銀御座候間 麻黄御調可被下哉之旨致承知候 左様には餘銀可有之とも存不申候 乍併餘銀の有無ニ不拘 麻黄下直に御座候は、少々御調可被下候 桂細根皮も御座候ハ、五六斤御調可被下候

一、先日の御答書ニ近日中當地へ御出可被下趣被仰付候處 溽暑之節と申 遠路甚御苦勞の御儀ニ奉存候 必其儀ニ及不申候 御出被下候而も何そ格別之御面談筋も無之候 女泉一件の儀ハ以書中御懸合申候通りの儀ニ而 外ニ入組候譯も無御座候 燒鹽四顆御裏被下忝受納仕候 右再答旁可得貴意如是御座候 恐惶謹言

五月七日

三浦主鈴

賀來泰安様

鈴木老母中暑ニ而 (賀來榮二郎氏藏)

小坂小兒方差出候 御入手可被下候

益御全勝御凌之由珍重候 先日ハ遠路御苦勞奉存候 其後竹田の醫者参候へとも 驗無之候 先月十六日歸泉殘念奉存候

一、書物料不足ニ相成候 別紙御覽可被下候

一、鈴木御老母中暑ニ而 兼而持病の喘氣ヲ挾 些氣遣ニ存候へとも 只今の様子日々快復の御様子に御座候 初ハ生豚散小柴合加石 只今ハ清暑益氣相投候 御令閨様遠路御出 御苦勞奉存候流行病多 御繁劇の段承之 御混雜奉察候 早々頓首

八月七日

三 浦 主 鈴

賀 來 泰 安 様

賤女縁談決定御聞 (賀來榮二郎氏藏)

遠方御人被下忝存候 暑氣相増候處御清康被_レ成_ニ御入_ニ珍重奉存候 野夫無異罷在候 御省慮可被下候 然ハ先達被仰下候賤女縁談の義決定の處御聞可被成の旨 此義疾_トより可_レ得_ニ貴意_一の處本人も先日漸く歸宅 親子の間ハ情も難通暢候へハ 幸弊邑社日も來ル廿日の事ニ候へハ、親類の者共も相集り可申間 其節本人_シ體得_テと承り 貴答可仕と存及延引候 尙又足下得_ニ御尋候者甚如何敷候へとも 任_ニ御心安_一底意不_レ殘申述候 脇方より承候處 油屋御子息當時懲瘡最中と申事に御座候 傳聞の説甚以難信候へとも 承候而は安堵難仕 愚妻始如何と疑念相催候 婦人の道一與人齊至死失靡他是其常ニ候へとも 未許嫁不致中は宜熟慮細思事ニ奉存候 右之通_ニ御座候

へハ親類の情有_リ、是_レ亦已_レ抱_キ、御座候

無御座候へハ貧富の望少も無御座候 貧富ハ人間の常非_レ所擇候 右の段貞五郎方へも尋遣し候何れニも弊邑祭禮の節迄纔十日計の事ニ御座候へハ御待可被下候 佐野迄幸便可有御座候 御人遣ニ及不申候 自此一決の御返答可仕候 右懲瘡等ノ義御聞被成候事も御座候ハ、貞五郎へ無御遠慮御嘶可被下候 右拜答早々如此御座候 恐惶謹言

六月九日

三 浦 修 齡

賀 來 泰 庵 様

* 黃鶴にタツといふ一人の娘がゐた。其の養嗣子を納れる媒酌を太庵がしたらしい。それに関しての書狀である。

源泉一言半句罪ニ服する事無之 (賀來榮二郎氏藏)

先日ハ自貴館の貴書拜見 寒冷相増候處彌御安寧被成御凌珍重存候 其節の御書面ニ源泉因果物語三子の方へ被仰遣候間 承知致候様被仰聞候 折節小子檢見出役罷立 昨十二日歸宅 則三子への貴書致拜見候處 幸四郎佐藏と申兩家共ニ不如意ニ而大迷惑の由 偕々氣の毒ニ御座候 是ハ取計ニ依而 左様ニ不相成とも可相濟事と奉存候 春已來段々御懸合申候へ共 兎角此方の趣意御酌取無之哉と奉存候 依而差圖ケ間敷失禮の儀ニ候へ共 底意不包左ニ相記候 得と御諒察

可被下候

二一〇

一、源泉不埒の一件は今更縷陳ニ不及 先右の通不埒の儀明白ニ相分り候上ハ 源泉親類親友の者ニ而も早速壹人此方ニ参り 金拾兩ニ銀百七拾匁御捨被下候儀忝奉存候 上木の書籍懸合も不致猥りに改竄致候段 甚失敬の到此段御用捨可被下候 又大坂藏屋敷役人ヲ欺キ板木取出し自由ニ賣却候段 是以申譯も無御座候 一ニ源泉罪に服候と申挨拶有之 其上ニ而右板木ハ何れにも追々受返御返濟可申爲 其 慥成一札差入置候間 板木取返の儀ハ 銀子調達迄何卒延引被下候様ニと申挨拶有候へは 此方もソレヲ鹽ニ面皮相立 社中への申譯も相濟申候 然ルニ源泉一言半句も過ヲ悔ヒ罪ニ服スルノ事無之 強項不屈の段ハ何トモ 不得其意候 唯今人ノ扇子一本取替候而も 無調法致候 御免可被下と申挨拶ハ世間一統申迄も無之候 然ルニ源泉一言の誤リヲモ不申は餘リシキ人を馬鹿ニ致シタル仕方と存候 ソコデ左様ニ源泉カラ馬鹿ニシラル、コトハナラント申リキミ也 御合點乎 ソコテ此方ノ不平ハ源泉より失禮也 貴方の御心配ハ銀子の調達也 此處ニ大ナル齟齬有り 右の通り慥成一札ニ而も 此一札ノ儀ハ先書ニモ申述候 受取置候へは 板木取返は當年中ニ而も來年ニ而も不苦候 ソレ故此方ニハ賢兄御取計のヌルキヲ憤ルニハアラズ 義理ヲ以テ源泉ヲ服シサスルコトノ出來ヌヲ不平ニ存スル也 源之助殿ハ御役人ニ而世事ニ御練熟ノ事故 左様の處ニ御心付も可有之哉と存し 内分にて申進候也 全ク表向の訴訟ニハアラズ 乍然

此トモ申明不申候ニハ 無提出可致候 其儀此方より申され候儀ハ無御座 是迄并扣

候へ共 此度ハ不得已申述候 失禮の段御用捨可被下候 右の段可得貴意如此御座候 恐惶謹言

十月十三日

三 浦 主 鈴 黃 (花押)

賀 來 太 安 様

尙々腸子も歸泉 偕々殘念の到ニ存候

前藥の餘力ニ而 (賀來桑二郎氏藏)

脈も何れ少々平和ニ相成候 唯今の處ニ而ハ手を出す程の療治場見受不申候 精神氣力ノ復ヲ

待計の様ニ相見申候

今朝通し無之ニ付 黃龍湯御調合被下候様申上候處 只今大便秘通硬梗の中ニ而 ナリノ出來ヌト申位の事ニ御座候 飯椀二盃程茶色の便通し申候 前藥の餘力ニ而 是上一二行ハ通し可有之候 最早黃龍ハ相止可然存候 思召の竹葉石膏御投可被下候 昨夜より得と熟睡仕候 食事今朝の儘其後未タ不申進追々相進可申候 只今通後も精神安靜ニ御座候 肌膚の熱少も覺不申 平人の肌膚も同様ニ御座候 明日は乍御苦勞又々御一珍可被下候 拜稿

十一月十四日

日田博多屋へは飛脚便有之 (賀來榮二郎氏藏)

(三字缺)遠路御苦勞被下以御働熟談之儀不涉忝奉存候 先達而以壹人御様子承度存罷在候處 御歸郷の程も難計見合せ罷在候内 佐野より以_レ使爲_レ知來り尙又貴書桑名屋より相達縷々致承知候 一、輕少の到候得共二種致進上之候 小子安心無此上 當座御挨拶の印迄ニ御座候 春ニ相成候而ハ余り等閑の義と存候間 不取敢早々如斯候 事成就之上以_二大年_一も御挨拶可仕 此節ハ誠ニ草略の到ニ御座候 是上重疊宜敷奉願候

一、日田博多屋(博多屋とは日田町廣瀬家也)へハ此度飛脚便有之候ニ付 乍草々挨拶の狀差遣置候 鍋屋の方舊識の儀ニも無之 尙又此度取計の次第 賢兄面晤の上ニ無御座候而ハ草卒ニ難取計 博多屋鍋屋共々春ニ至り賢兄の思召をも承り 任_二御指圖_一度存候 尤博三への書中加筆ハ致置候 一、弊地の豆油一樽酒と被思召 御受納可被下候 酒ハ御地近來ハ名酒出來候由 任_二御心安_一右之通取計申候 失敬海涵

右御禮旁如斯御座候 万端期春陽候 恐惶謹言

十二月廿三日

三 浦 主 鈴

賀 來 榮 安 様

尙_二御室内_一宜敷奉願候 已上

今朝ハ精神爽ニ (賀來元吉氏藏)

昨夜は寒風御難澁被成候半と奉存候 然ニ病人昨夜より今朝迄小水快通 四度ニ壹升程通し有之 是ハ黃龍湯ニ而通候やとも奉存候 大便ハ未通し不申 轉失氣も無御座候 小水能通候故乎 今朝は精神爽ニ言語も正敷 尤昨夜より 嚙語 (嚙語とあるも嚙語と改めし) も透と相止 今朝迄一言も無御座候 今朝は自分ニ箸と椀ヲ持候而食事いたし候 食量ハ相替儀無御座候 渴少輕 能熟睡仕候 脉何となく平和ニ相成様ニ御座候 何れ吉兆と奉存候 大便通しも無御座候 昨日の黃龍湯御投劑可被下候 頓首

十一月十四日

木綿二十反御世話被下 (賀來元吉氏藏)

拜呈 先日ハ長々御逗留 御世話被下忝奉存候 昨日ハ疾御歸着之由奉賀候 思召被寄 御齋に御香牛房一苞御惠被下忝靈前ニ相備申候 尙又木綿拾貳反御世話被下 是又御繁用之中忝奉存候

一、處々より 弔書被下候へとも 忌明之上返書可差出候

一、木綿代札六拾四匁三分八厘 此度差上候 御入掌可被下候 頓首

二月二日

三浦主鈴

賀來泰安様

賀來三郎治宛

天地帙も來月中には (賀來元吉氏藏)

久々絶音間候處 五月廿四日の貴墨落手 御無恙 猶御改名被成 彼是目出度奉存候 拙宅無事故 明日の迎秋可申候 御事多 此邊の來遊も難被成段 御尤折角幹蠱(幹父之蠱とて父の失敗を取返す事)之御勤專要奉存候 御手許も大分俗吏めかしく相見へ申候 世忤様安節とのにも宜敷申上候

一、草本皆生長 御樂奉察候 一通落手

一、身生帙 叔藏に御頼して 寫居申候得共 近來構典上卷等を大に改舊面目候 因而やめさせ申候 日外面談にて申候處の臟腑へ 猶配當家之藩園(範圍の當字?)を出不申事にて御座候 此節の本にて先大槩は立らしと覺候 拜面ならては難申盡候

一、家庭指南下り候而 此内諸生輩大勢初集一通講申候 本餘計無御座進不申候 追て餘計出來候上 進可申候 天地帙も來月中には雕巧畢可申様申來候 來月雕成候ても 一通相改指上て其上にて發行致候へは 何れ年内一盃バイは出來可申候

一、御歸國の後 杵城遺事と申をあみ申候 小冊子 杵藩之事を記し申候

一、當夏未曾有之凶饑世上大ニ物騒 秋稼見事に人心少々安し申候 御地同様ニ奉存候 乍慮外御家兄様ニ可然奉願候 恐惶謹言

六月廿九日

三 浦 安 定

賀 來 三 郎 治 様

*宛名賀來三郎治とは草本生長御樂みなどあるによつて、或は太庵の事かと思ふ。「家庭指南」は綾部綱齋の遺書。それを餘計に作つて進上しよう、天地帙も來月中に出来る、歸國後「杵城遺事」を作つたとある。「杵城遺事」は六十四五歳頃の作、して見れば太庵宛歟。次に、參考として賀來元吉氏藏、太庵筆の書簡を掲げる。

彌御無事珍重奉存候 然者江戸より 朝野北水と云天文家此方へ參居申候 星宿杯教候事至而捷徑有之 十日之内ニハ星之名も悉覺申候 青森助五郎 天満屋文吉杯も習申候 其外追々習ふ人多く御座候 先生へ御尋被成候而 先生より

御禮圖之類 而 種古抄官署と先生の御候は、 彦一郎同道 而 十日斗歸可被下候 是も先生思召次第也 右草々申入候 已上

七月十六日

太 庵

宛名を缺くが、太庵の子佐一郎が或は梅園先生の許に従學してゐたのを、江戸から朝野北水といふ天文の先生が來たから先生が稽古してよろしいといふなら許を得て彦一郎と一緒に歸家せよとの手紙ではあるまいか。

鄙序御覆醬可被下 (賀來元吉氏藏)

春來再御投書一々拜讀候 益御清勝被成御座奉大賀候 不佞懶態依舊候 御勞念被下間敷候 然者御還家之節相認置候鄙序 此度清書指上候 御覆醬 (漢書に「吾恐後人用覆醬語」とあり、著書世に行はれず反古となり醬油瓶の蓋となる義か) 可被下候

一、此度御舍兄様より 爲歲抄之御祝儀御取揃 被懸「貴意」御厚情忝奉存候

一、當春丸屋ニ而 御○被成候藥種代且 書物料之儀被仰下承知仕候 銀子御遣被成候様ニ被仰下候へ共銀子ハ參不申候 幸便之節高田丸屋へ御遣可被下候 其節札拾五匁御取替申上候 是も

緒ニ丸屋ニ御出可被下候 藥種直段書附指上可申候へ共 通只今高田へ遣置相分り不申 後便指上可申候

一、大同類聚方一卷 是ハ愚弟（愚弟とは玄龜也）へ御頼置被成候由 此度相認指上候 表紙も掛候而指上候 是又落手可被下候

右縷々得貴意度如右御座候 恐惶謹言

十二月廿三日

三 浦 修 令

賀 來 三 郎 治 様

尙々春にも相成候は 些御出奉待候 其後御讀書御出精被成候哉 小子も 通鑑未相仕舞不申候 易ハ先達而讀かけ相仕舞 其後又々一遍相仕舞 只今又々三遍目讀かけ置候 已上

逗留中手本相認（賀來元吉氏藏）

奉讀 益御多福被成候由奉大賀候 僕未逗留候 小兒病症進退不定 今日者宜敷御座候 僕疝痛も少々宛宜敷相覺候 然者今日は 貴塾（貴塾とあれば賀來有軒宛敷）兩雛生蒙惠來忝奉存候 鮮魚御惠被下拜受候 逗留中手本相認可申候 拙筆不勝忸怩候 他ハ期後音候 已上

六月 四 日

安 貞

山崎甫庵宛

歳首御祝儀（日名子太郎氏藏）

尙々家内 御加筆被下忝存候〇〇可然御禮申述度申出候 御令閨様宜御通暢可被下候 已上
示墨畫誦 御萬福鶴算御加被成候由 奉遙祝候 蝸廬少長無恙加年仕候 爲歳首御祝儀三種
御惠投被下千萬不淺祝納仕候 右奉答旁 御祝詞可申述如斯御座候 恐惶謹言

仲春 初六日

三 浦 修 齡

山崎甫庵様

渡邊小兵衛宛

おくめどの機嫌克滞留 (荒巻璞次氏藏)

(切) 罷過候間 御心安思召可被下候 然者おくめとの随分機嫌克く 滞留被致候間 必御氣遣被成間敷候 其内御左右 彼是かね候 恐惶謹言

霜月八日

渡邊小兵衛様

三浦安貞

廣瀬久兵衛宛

當領内村々騒立候趣 (武石繁待氏藏)

去ル四日之飛札拜見候 暖和之節御座候處彌御堅固珍重存候 然者村尾市藏殿より 貴様御呼出御内々に而 當領内村々何事ニ歟此節騒立候趣風聞有之候處 彌騒立候儀ニ而 若江戸表へ御達ニも相成候は、御陣屋よりも御達可被成哉ニ付 當方より御達之有無 御内々爲御知申候之様御心得ニも相成候義ニ付 不角立候様 拙者共迄 貴様より御内々御聞合御座候様被申聞候間如何之様子ニ候哉御承知被成段 委細致承知候 然處右騒立候村方ハ當城下より四五里程相隔候海邊筋町家之者へ右隣村之百姓共 遺恨有之趣ニ而 夜中致亂妨候段相聞候ニ付 早速取鎮申付候處 無程打鎮 其後右村々へ急度示方申付 當時靜謐ニ相成候ニ付 公邊御達之儀相扣候旨家老共申聞候間 此段宜〇〇申達可被下 右御報可得御意如此候 恐惶謹言

四月八日

三浦主 齡
増田 藤 八
榎並庄 八郎

博多屋 久兵衛様

右之通相認 四月十日 村尾様へ差出

鐵砲等取扱候儀有之候へハ (武石繁待氏藏)

以「飛脚」得「御意」候 梅雨之節愈御堅固珍重存候 然者先日以「書中」及懸合候當領内町家打崩一件之儀ニ付 内々以俵屋 玉田氏迄御伺候處 別紙の通被仰下 委細致承知候 右一件未不致落着候儀有之 御地へ一人罷越候儀 及延引候 一、御陣屋御聞合之御別紙之内 御料所村々 私領出入候儀ニ候へハ 多人數相集り候儀ハ勿論若又鐵砲等取扱候様之儀有之候得は尙更之儀ニ而 江戸表へ相達候程之儀ハお互ニ爲知合御座候御心得ノ趣ニ候段被仰下致承知候 然處先年豊前筋御料所 其外隣端右様之儀御座候節 何方よりモ 爲知合之儀無御座此方此節之儀も 右之振合ニ相心得罷在候處 御別紙の趣ニ而ハ御互ニ爲知合御座候節之儀ト相聞申候 併右様之儀ハ時之振合ニ御座候儀と存候へ共 以來ハ右之趣相

心得可申 いづれ追々同役之内一人罷越 委細貴殿可得御意 右之趣御内々御陣屋へ宜敷御教可被下 如此御座候 恐惶謹言

五月廿一日

三浦主 齡 黃 (花押)
増田 藤 八 陳 (花押)
榎並庄 八郎 守 (花押)

博多屋 三郎右衛門様

何分久兵衛殿御多出ニ付 貴様段々御世話被下忝存候 久兵衛殿御歸之程難計 貴様御名前ニ相認申候 乍御面倒宜敷御願申上候

* 主歸以下三人共、杵築藩當年の郡奉行であつた。

久兵衛返事 (武石繁待氏藏)

——参考として——

然者御領内町家打崩候一件先日被仰下候趣 御内々相伺及貴報候處 右一件未落着不仕義も御座候由ニ而 當方へ御一人様御越之儀延引之段委細承知仕候 早速此段申上候處 御越ニも及問敷且當表へ御送達無之候而も御差支ハ無之由ニ御座候 尤御料所入會之御場所ニ付 追々右様之義

博多屋久兵衛

增田藤八様

榎並庄八郎様

猶々豊前邊混亂之節御送達無之ニ付右之趣ニ見へ申候得共 其時節模様ニ寄可申旨被仰越候越承知仕候 右等之儀打明ケ内伺も致兼候間相含 急度御咄申候處 御料所入會ニ候へは入押移ため夫々被及御聞次第御料所御手當御座候趣ニ承知仕候 前文申上候通 不容易義ニ付 私共曉と相伺兼申候 以上

* 廣瀬淡窓の弟、廣瀬久兵衛南陔の書狀也。

さて此事件は文化十五年三月廿一日の事である。初め、來浦、手永の農民相集り、松明を燈し、谷筋を下る。村役人之に説諭を加ふるも聞入れず、遂に田染の町家（田染の町家を果して何軒打崩せしか不明なり）を打崩し、同月廿三日

小原、清水、大藏寺、小古山の町家を打刷した。官帖出がある。そこで、小原、小古山、大藏寺、清水の増田八郎に、
が、手永の代官や足輕を召連れ、興導寺村に出張した。

又安岐、手永の農民も集合してゐるといふので、それには郡奉行榎並庄八郎守珍が手永の代官足輕を召連れ、瀬戸田村及び湊に出張した。

抑も其騒動の原因は實は町家が協議して米も油も占め買ひして小賣をせぬので、米油が大に騰貴し、農民一同が大に困難した結果の暴動であることが判明したから、杵築藩から米二百石油二十餘挺を買入れて、各手永村々へ割賦販賣させたので四月朔日になつて、鎮定したのである。

其翌文政二年正月十日、杵築藩儒臣三浦主齡黃鶴先生は歿したのである。主齡先生は明和元年生れ、享年五十六歳で歿したが當時は郡奉行も兼ね治績もあつた。實は藩主親賢の教授役で儒臣としての貢獻も大であつたらう。

尙々この内本家に酒をたのみ申候 代を忘れ申候 又のたよりに御申つかはし候へかしと存候
増右衛門どのへよろしく 猶又この頃のあいさつ よきに申候 已上

此内は久々にて御かへり　ゆる／＼御目もし海山よろこばしくそんしまゐらせ候　おかへりの山
いと／＼おかへりばんも　きけんも無之よし　うれ敷存上まゐらせ候　お類も杵築につゝがなく
のきしところ　只かへりたきとのみ申参り候　今日日本家たよりにまかせ　あら／＼申のへ候

已上

霜月十五日

あ
ん
て
い

お家との上る

・本書は村松の撰り、前掲「イヌ」とあるに在りて、その書信らしいもの、
じとあり、歸りの途に危険もなかつてうれしとある。お類が歸りたがるとの事、婦人文體で然も夫人に與へた書簡として尤も珍しく先生の人間味を露はした書簡である。

兩子善兵衛宛

内々申上候浪人の義 (加來義市氏藏)

貴札拜見仕候。御平安殘暑御凌被成恐悅奉存候。然者小兒儀 毎々御丁寧ニ御尋被下忝奉存候。一、内々得ト申上置候浪人之義 一昨日歟 一寸參候 兼而申候 彼方酒かぶ買取之事段々事六ヶ敷相成居申候 何レにも今暫御沙汰なしに被成置被下候由 拙者迄願申候 其故ハ此間の義變改と申には無御座候 當分殊外手つめの相談にて 無左候は其方定而 別に所存可有なと、申様の事にて申分出來承候 時節之由ニ御座候 先彼仁候 大意申上候 紙をも病人難儀故 安節とくと承置候 其内可申上候 恐惶謹言

七月十六日

兩子善兵衛様

三浦安貞

無宛名

西方寺流人 (加來義市氏藏)

去年西方寺流人代吉 此手永にも可參や 私意見にて相談仕様に御申 因而彼是相尋候得とも其節ハ右の存寄も無御座候處 近來何卒辨分へ參申度由 内分拙まで願申候 拙者申にも世間不案内之拙者候へハ 無覺束候得とも 兩子氏へも内分歎見可申候 人をすてさる御人に御座候へハ 可成事にこそ御世話も可被成候 いつれ急ニハ相分り申間敷候 其内 御返答可申遣候由申候

一、此一件 先必々竹田津御兩人に御咄被下間敷候 子細當時寺川田宅酒場相添是非 此仁へ買候様ニ御申取 難澁仕候而居申候趣に御座候 左候へハ當時此事おこり候ては 彼仁又々姦計とも 御兩人にも一先此義ハ御面談迄ハ御出言不被下候様ニ奉願候 且此書面御覽後ハ 火中可被

下候 已上

即日

三浦安貞

彫刻料加賀屋善藏へ御拂 (加來義市氏藏)

八月三日之貴書相達 忝致拜見候 秋冷相催御揃被成彌御安康御凌被成由 奉珍重候 然ハ加賀屋善藏よりの紙包ハ富來重太郎船へ御渡被下 慥ニ致落手候 扱又加賀屋彫刻料爲替手形而指上候 乍御面倒中之島綿屋清八方ニ而右之銀子御請取被下 加賀屋善藏方へ御拂被下候様奉願候 尙又跡彫刻之義無據故障有之 當分見合申度候 其段加賀屋書中にも申遣候へ共 御序之節御演說可被下候 先只今迄之刻料 此度爲替ニ而不殘拂相濟申候 毎々御多用之中 申兼候得共 宜敷御願候 尙 春已來 毎々の御懇書 自是ハ大ニ御無音 申譯も無御座候 御寛恕可被下候 先ハ右可得貴意如此御座候 恐惶謹言

九月十一日

三浦主鈴

*書中の加賀屋善藏方へ拂ふ彫刻料は、贅語刷費ではあるまいか。宛名を缺いてゐるので判然せぬが、爲替手形の中の島の綿屋で受取り仕拂ひ呉れとあり、後の彫刻は故障あり 當分見合せとある所から 贅語刊行に關することか。

敢語一部懸御目 (杵築、荒木氏藏)

敢語出版候得共 未十分相調不申候 京都より江戸にも 指上候様に 兼々申候得共 大方未相發申間敷候 因而壹部此節 懸御目 御歸塾の御邪魔にも相成不申候は 覆醬之御用に被召置候ても 不苦奉存候 百介様にも指上申度奉存候得とも 折節本 下り合せ不申 但京都にも頼置候得は 從彼方指上候義も可有御座 兎園之冊トエシノサツ (兎園の冊とは俗語にて書ける卑近の著と卑下したるにや) 進上仕候とは難申上候 御電囑之上は 御旅宿に御指置可被下候 頓首謹言

正月廿一日

三浦安貞

*敢語の起稿は、寶曆十年、三十八歳で、四年を閲し、同十三年脱成とある。然し其上木は、安永二年五十三歳の十一月であるから、本書は、安永三年正月の書簡である。宛名を缺くので分らぬが、敬意を拂つた所から先輩かと思ふ。歸國の邪魔にならう 覆醬の用に立てば仕合、京都からも指上る筈であるが、兎園の冊、呈上とは申されぬ。御電囑の上は旅宿に拾置いて苦しくないと、卑下されてゐる。

乍無禮雌黃相加 (高山通男氏藏)

無程碧雞報候者 每物新ニ覺候 御平安御躰年可成奉賀候 拙老無異事 經霜雪迎烟霞候
且客冬念日之貴札昨夜落手 舊臘之起居悉之候 爲御餽歲 黑頭公二十枝 御嘉貺文房之幽事
相伴可申忝樂申候 御作造を宜敷承候 乍無禮雌黃相加候 是にても可然候者 其内御投被
下度候 其已前之御狀 返書はとく指出候 誰家殷公喬者江ニ流し 御覽無覺束候 詩轍も冬
中絶消息候 成就又一兩日ものべ候半と奉存候 拙詩稿も當年上木を心かけ候者有之候 大
かたは左様ニ相成可申候 下しらへ共仕候 萬々不能腐毫候 恐惶謹言

正月三日

三浦安定

*本書東宛名なし。黒頭公は筆の別名也。

補遺

錠前寸法進上候 (杵築、荒木氏藏)

一、一件いつかか得貴意不申てハ、難申盡候 先承置候
一、錠前寸法進上候 彼是御面倒と奉存候 乍慮外 皆々様へ可然御願申上候 萬々期來陽
候 恐惶謹言

極月廿八日

三浦安貞

綾部要哲様

御歸國無程 (杵築、廣石氏藏)

此節寺川氏參府に付 呈愚簡候 良久絶音問候 皆々様定而御安健御務可被成候 當地皆様御
宿所御安全 隨而拙宅兩家(兩家とは廣鶴氏分家後?) 無恙罷在候 御慮念被下間敷候 誠に當年も無

程五月末ニ押移候得は 御歸國之節も無程相成樂ミ罷在候 折角御剛健御歸國奉待候
淺田善二郎子 委齋より何事も御聞可被下候 委齋へも申上○○御目に懸り候上申度と申事の○
御座候○○書面に書の○候事○○相洩し○○○○妻安節も宜敷申上候 恐惶謹言

五月十八日

三 浦 安 貞

御寫取の贅語暫御かし被下度 (佐野秀子氏藏)

先頃者 途中迄御送被下忝奉存候 菅野ニ而日沈 夫より伴月還候 逗留之内御心遣奉感荷候
如何御病魔候や 折角御保重可被成候 然ニ鶴崎郡代より拙著書見度様ニ申來候得とも 何そ有
合不申候 御寫取之贅語 天地之部 暫御かし被下候義者相成申間敷哉 此節素貞罷歸候付 御
拜借 門ニ御尋申候様申候 尤池子玉御請可申候間 間違ハ御座有間敷候 猶又申上候 拙答多
賀黒吉書 貴君には進置不申候や御尋申上候 老心朦朧 任御心安御尋申上候 若左様にて無
御座候とも老脱之所致と御免可被下候 猶皆様へ可然奉願候 恐懼謹言

九月十四日

三 浦 安 貞 晋

佐野玄遷様

「玄遷子への手紙に「留滞中御懇意」とある。外出稀なる先生も杵築玄遷子邸には折々歡待され逗留したらしい。

遠路敝藩迄御尋問 (大分、小野澄氏藏)

先頃者遠路敝藩迄御尋問 始而接高範 猶珍話共承之 慰宿望大慶不過之奉存候 別來愈御清
福御座可被成奉賀候 拙も漸二十二日歸山 依舊而臥白雲候 如何其日とく御歸宅被成候哉承度
候 先御禮旁得貴意度如此候 心緒渾而後鴻候 恐惶謹言

二月廿八日

三 浦 安 貞 再拜

小野昌庵様 玉几下

卯作生歸省定て對話 (小野澄氏藏)

長跪讀來書 字々懇々 伏荷厚意 時下雖風霜之候丹龍下御清寧 唱南山之壽野老煮芹日々
望江南而已に候 卯作生歸省 定而御對話敝境之事も可傍御耳候 詩轍繕寫にかゝり兀々申
逼春候 歸鴻も年内者繫書間敷候 御自齋可被爲迎陽春候 恐惶謹言

極月幾望

三 浦 安 貞 再拜

小野 昌 庵 様 奉復

*詩集安永九年の部に「藤卯作吹笛」七絶、天明五年の部にも「添藤卯作」五律、同年の部に「別藤卯作」七絶等がある。「君吹横笛我吹笙 相送西樓風月清」とあるから、卯作の吹笛に巧である事も分るが、書中に卯作歸省定めて御對話とあるから府内のものであらう。劣弟とは妹婿安節である。此簡は詩轍上木の天明六年の前年であることがわかる。

禹餘糧一顆被贈 (小野澄氏藏)

本月廿一日之華簡捧讀 時下霜露肅候へ共 貴體御確然奉唱南山候 拙老蝸涎自濡候 御安意可被下候 然者兼而御噂申候禹餘糧一顆被懸貴意忝玩弄仕候 猶堅殻之一種も御座候由不堪望蜀之意候 一嘘 且敢語進呈 高慮にも強而齟齬も不仕由大慶奉存候

一、御佳篇數章忝今晒景落手 直返書相認候故未得熟覽候 ○政可申上候 先得握壁大悦仕候 近來チヨコ／＼之物懸御目度物も御座候へと 老懶筆無狀 卯作生來遊之時待申候 先早々御禮而已如此候 恐惶謹言

十月廿六日

三 浦 安 貞 再拜

小野 昌 庵 様

*本書簡は昌庵から禹餘糧といふ化石を贈られた禮狀だが、辭源を見ると、禹王が戦に勝つて餘糧を棄てたのが化して

石になつたとある。

さて小野家は代々府内の藩醫で、其祖の宗圓といふ人は松平忠直父子の病を治療したと言はれ、代々昌庵といつてゐたやうである。

昌庵との交遊に就ては、書簡の外に、『詩集』天明二年の部に「贈野昌庵」一絶があり、寛政元年の部に「野君昌庵 萱堂八十壽詞」の七絶もあり、交情こまやかであつた事がわかる。

書物料遣に落手 (大分、伊藤氏藏)

新霽稍得秋涼候 御渾家御多福奉賀候 今日源吉生御出 此内は御宿食之由 不承罷過候も 先早速御全癒 御逗留中緩々可申承候 且書物料御遣被成慥に落手 追て書肆へ相届可申荒々御答申伸候 恐懼頓首

八月十日

三 浦 安 貞

詩轍御加文の旨 (辛島詢二氏藏)

一書附「歸鴻」候 華鳥之時節御吟興奉存候 野老無事故致送迎烏兎候
一、御詩稿拜見 此節之詩卷ハ大分新意を覺悦申候 折角御出精 此上ハそろ／＼御讀書被成

其上之功を以て被成候上ハ進一步候事ニ御座候 此節委曲子玉生ニ申入候

一、詩轍御加文被成候旨 御文數回及展讀候 序喬文學草廬ニ頼申候 跋文未相決不申候
門下少 屬文者 相成候バ 弓柳之二子ニ而御座候 惣中相談次第ニ相成可申 拙一存ニ難決
候 惣中柳生ヲ推候へとも 柳生達而辭退申候 弓生ハ尙時不慥 當地ニも參得不申候へは難
申候 惣中何れ柳生を推申候 足下之御文意いつれ 小文之御仕立ニ相ミヘ申候 畢竟寫工ニ
記し取候様ニ相みヘ申候 詩轍尾ニ附言被成候方可然存候 此節点檢御返し可申候ヘ共 思召
之通ニ意ヲ換ズニ 被成度様にも 御紙面相見ヘ申候 乍去筆削ちと不相加候而は 如何ニ御座
候 思召之處得と承候上ハ 愚存御心ニ相叶候ヘハ 取計らひ可申候 因此而節指扣申候 若
右文ニ御望も御座候は 子細附子玉生 口頭ニ御聞可被下候

一、修令も當時中津ヘ致遊學候 來月末罷歸可申候 任御心安 御沙汰申候 恐懼謹言

二月廿八日

三 浦 安 貞 晋

池邊橋左衛門様 (子昌と稱した鶴崎の人乎)

*子玉は鶴崎の人、先生より年二十五も若く、天明五年三十八歳で歿したが、秘藏の弟子であつた。

詩轍は門人に詩學の軌轍を授くべく作つたものだが、水戸の人草廬龍公美といふが、天明四年に叙を書き、それより
前、天明元年に日出の文學喬維嶽といふが序を書いてゐる。此書簡には「序は喬文學及び草廬に頼んだが跋は未だ決せ

るし、弓崎はいつ來るとも分らぬ。足下の文意は小文の仕立であるから、詩轍の末尾に附してはと思ふ、子細は子玉生
が申上る」とあるが、池邊子昌の跋などはないので削つたものと見ゆる。そして自ら天明六年六十三歳の時跋を書き、
翌年上梓したことになつてゐる。

自拙者申入吳候様 (松本義一氏藏)

彌御無變 潯雨御凌可被成奉賀候 然者伊左衛門久敷難氣ニ候段 相勝不申 懸御目度段
自拙者申入吳候様ニ頼來候 委曲自使可申入候 一應御覽被下候様にと願申候 以上

五月廿六日

三 浦 安 貞

綾 要 哲 様

急に御見廻難申 (松本義一氏藏)

御手教拜見 御微志先御同邊水氣も減不申趣 扱々^{コマ}込り申候御事に御座候 猶又御藥相考調合
仕候 以前之通り用御覽可被成候 何卒今一應罷出相伺候様 被仰下御尤奉存候 然處拙
ども 臥候様成事にては無御座候得共 少々中暑之氣味 腹部和し不申 急に御見廻も難申候

兎角遠方之義 始終者御療治も 御近ク無御座候而者如何と奉存候 必御病症ニ就候而申上候には無御座候 今日及候間早々如此御座候 頓首謹言

六月廿三日

三 浦 安 貞

冬木屋治右衛門様

折角滅性無之様 (松本義一氏藏)

折角 紙遣切候故 以^{ツカニキレ} 龜紙申上候段 御免可被下候 御喪中折角御滅性無之様 御凌可被成候 來月以參萬々可申上 御内様へ可然奉願候 已上

九月十八日

安 貞

惟策様 (策、或は茂?)

遍阿の詠草見集めて (秋永鼎三氏藏)

一札拜見 甚暑愈御平安被成御座 大慶奉存候 弊方無異儀罷在候 御安慮可被下候

一、在豐記拙者方へ者原稿有之候間 御返却不被成候而も不苦候 可被任貴慮候

一、遍阿師御歌御書付被下忝追感仕候

ハ涼風も起り候半 墓所をも弔申度心懸罷在候 左も御座候は、其節積る心事可申上候 乍去世事悠々事難計 必御待被下間敷候

一、追悼御集被成候由御尤奉存候 月窓和尚御作拜見仕度候 拙者も御同前ニ讀兼申候

待かねてうらみしほとになくさみつ

わかれてのちを何と過さむ

其外遍阿師御詠草見集候て可懸御目候 所詮御集被下候は、あなち多少にもより不申儀かと奉存候 取捨よろしきに御隨被成候 猶又事により御相談ニも及可申候

一、因事通書等高野ニ御送り被成候由御尤奉存候 如何高野よりも到來無御座候哉

一、碧岩集田染安養寺より御借被成候儀 拙者よく拜居申候 六祖經しかと拜不申候 是も多分

ハ安養寺本かと奉存候 田染へ御便少く御座候は、此方よりも取次可申候

一、不動尊如何様被成候も拙者好無御座候

一、田方少く痛申候由 甚敷ハ無御座候へとも 此方も左様にて御座候

一、日外之使臘石返呈仕候 如何御落手被成候哉

一、童蒙箴懸御目候 是ハ未草稿にて御座候間 議論引用相謬り候はん 御推量にて御覽御他

見者御用捨可被下候 權八殿ハ兼而御心安存候ヘバ 御望ニ御座候ハ、御覽も苦間布候

一、最早秋之節ニも罷成候へとも 海熱ハ一入手強扱々凌兼申候 如何興御催被成候哉 御詠草も御座候哉 懷敷奉存候

一、言論今以相濟不申候故 貴邊迄も進不申候

一、愚親よりも宣布申上候様申付候 心事如雲先筆を置申候餘ハ後音 恐惶謹言

六月廿四日

三 浦 安 貞 晋 拜

脇五兵衛様 梧 右

* 畫蘭中の遍阿といふ僧は、高野山から來て双子山に長く居たが、頗る修養の出來た僧で先生も就いて書を學んだとある。先生より四五歳の年長であつた。先生は大石主税の逝去したのであらうと一時疑つてゐた。それは赤穂義士の話が出るゝと紅淚潸然緇衣の袖を濡したからであるといつてゐる。此遍阿といふ人、威儀の正しい人であつたと見え、先生も五十年來、こんな端嚴の人を見た事がない、詩歌もたしなんでゐたが、其佛道を説く中々凡僧でなかつた。それで書道も問うた丈でない、修養上幾多得る所があつたと見ゆる。寶曆四年卅九で小浦の風月庵で入寂したとある。(慟婉錄) 其遍阿の歌を脇氏が書いて先生に見せたところがあるが、脇氏が其詠草を上梓しようと先生に相談したものを見ゆる。それで見集めて送らう、あながち多少によらぬ、取捨よろしき様との文面である。

宛名の脇五兵衛とは愚山先生のやうに見ゆるが、愚山先生にはそんな名はない。脇とあるから同族のかたであらう。先生の門人には違ひない。臘石を送つたり、童蒙箴を貸したりした處から見れば、弟子の愚山先生らしくもある。

人間三浦梅園